
戦国御伽草紙

50まい

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

戦国御伽草紙

【Nコード】

N8712N

【作者名】

50まい

【あらすじ】

戦国時代、はちゃめちゃんな前田の姫を中心に縁は廻る。あたしはあたしの思いを貫く！過去も未来も関係ない、今を生きてるんだ！

登場人物（前書き）

これは氷室冨子さん著「銀の海金の大地」「なんて素敵にジャパネスク」の2次創作？です。

でも上記を知らない人でも全然読めます。それくらい原作とかけ離れています。まず時代からして違います。

戦国時代をイメージしていますが細かいところでぼろが・・・ものの呼称が平安時代だったり現代だったりしますが、なんちゃって戦国時代と思ってください。

名前の付け方や呼び方は戦国時代に順じてません！

登場人物は最新話に合わせて随時変更します。

やりたいほーだいやってます。すみません…。

時代背景等大分甘いですが、後々加筆修正します。とりあえず更新優先でいきます。

シレッとした顔でそれっぽい造語をばんばん使います。

登場人物

戦国時代

織田家おだ

平脈ひらみやく

織田家現当主。

公子きみこ

宗平の正室。佐々家から嫁いできた。高彬とそっくり。

三郎宗平ざぶろうむねひら

一人称・私

織田家次期当主と見られている。

平脈の3男。

鷹男たかおという名で瑠螺蔚と知りあう。

発はつ

宗平の側室。柴田家から嫁いできた。

正良せいりやう

平脈の4男。

佐々(さっさ)家

右衛門忠政うえもんただまさ

現佐々家当主。子供がこれでもかという。

北きた

忠政の正室。産んだ男の中で一番下の高彬を可愛がっている。高彬と由良の実母。

あまり表には出ない。

尉高いたか

高彬の義兄。

喋り方に独特の江戸訛りがある。

高彬たかあきら

一人称・僕

15歳。

瑠螺蔚の幼馴染。真面目で有能。宗平に重宝されている。

由良いゆ

一人称・私わたくし

高彬の実妹。14歳。

大きな瞳にふつくらとした小さな唇。かわいい。

柴田家しばた

権六道重ごんろくみちしげ

柴田家現当主。

中年のお腹が出た狸爺。

徳川家 とくがわ

寧 ねい

亦証の祖母。

洪一郎亦証 こういちろうやくまき

一人称・わたし

徳川家当主。優男風のイケメン。
恋人が何人もいる。

前田家 まえだ

一太忠宗 いっただただむね

瑠螺蔚の父。

前田家現当主。

亡妻蓄とその血を引いた瑠螺蔚に頭が上がらない。

あやめ

忠宗の後妻。瑠螺蔚と稔成の義母。

荊逸郎と馨慈郎の母。

蓄 たく

忠宗の前妻。

瑠螺蔚と稔成の母。

強く、気高く美しい人。

忠宗の身代わりとして鎧を纏い死ぬ。

喜六郎稔成きろくろうしなり

一人称・私

幼名は吉之助きつのすけ

瑠螺蔚の兄。

常人に理解できない霊力ちからを持つ。

依より

19歳。

稔成の正室。

小萩こはぎ

19歳。

前田家の侍女。

破天荒な瑠螺蔚にいつも振り回されてる苦勞人。

瑠螺蔚るるい

一人称・あたし

16歳。

主人公。

黒髪で腰までのロング。前髪癖っ毛のセンターわけ。

おてんば。正義感が強い。

荆逸郎けいちろう

瑠螺蔚の義理の兄。

馨慈郎けいじろう

瑠螺蔚の義理の弟。

村雨家 むらゆみ

発六郎速穂 はつろくろくすみ

一人称・俺

村雨の前当主に赤子の頃拾われる。戦で両親を亡くす。
忍。

千集 せんしゅう

村雨家当主。わりと温厚。

三七郎 さんしちろう

小姓。素直。

古墳時代

息長一族

美知主 みちのうし

息長の王子。有能。

真秀の実父親。

額に傷がある。

真秀を愛しすぎないように、傍に置かないようにしている。

氷葉州姫 ひばし

美知主の子。伊久米の大王 いくめのおおきみ に嫁ぐ。

顔も悪く意地も悪い。

真若王 まわか

息長の王子。

真秀の采女姿うねめを見てから妻に望むよつになる。
若く傲慢ごうまん。

佐保一族

加津戸売 かつとめ

佐保の巫女姫だったが、同母いろの兄と通じ、御影と大閻見戸売を孕む。
滅びの子の予言を残す。
真秀の祖母。

大閻見戸売 おおくひみどめ

御影と双子の妹姫おとひめ。

「佐保を永遠にいかす」子を産むと予言されていた。
御影を愛し、自らの産んだ子を憎む。
佐保の巫女姫。

御影 みかげ

一人称・ミカゲ

大閻見戸売と双子の姉姫えひめ。

精神がずつと5歳児のままの神々の愛児まな。女陰ほとから血が流れ続ける
と言う業病を負う。

「佐保を滅ぼす」と予言された真秀と真澄を産む。

真澄 ますみ

一人称・僕、私

真秀の同母の兄。

目も見えず、耳も聞こえず、口もきけない神々の愛児。
真秀とは心の声で喋ることができる。
真秀を愛する。

佐保彦さほひこ

一人称・俺

大閻見戸売の子。佐保の王子。滅びの子を激しく憎んでいる。
真秀に魅かれる。
真澄とそっくりな容姿。

真秀まほ

一人称・あたし

主人公。

残酷な運命に翻弄される。
佐保彦に魅かれる。

佐保姫さほひめ

大閻見戸売の子。佐保の姫。
真秀とそっくりな容姿。
滅びの子を慈しむ。

登場人物（後書き）

*ちなみに年齢は…数えで考えています！今の年齢に換算するとき
は大体1〜2歳ひいて頂くとちょうどいいと思います。

*家ごとの年齢順に並び変えました。

*家を50音順に並び変えました

由良の縁談1（前書き）

中学校一年生の時に書いていたものです・・・。

由良の縁談 1

初めての落城おちきりは11歳のときだった。

あたしはまだまだ幼くて、唯何も出来ずに人が死んでいくのを見ていることしか出来なかった。

「兄様。父上。母上」

不安を抑えようと頼りなく伸ばしたあたしの手を兄上は優しく握ってくれた。

母上に似た綺麗な顔でそつと微笑む。

母上は勝気で、綺麗な人だった。兄上は母上の美貌を継ぎ、あたしはその性格を継いだ。

煙渦巻く中、瑠螺蔚^{るい}、吉之助^{きつのすけ}と呟^{つぶや}きあたと兄上^{あにじょう}を抱きしめてくれたことは、今でもはつきりと覚えている。

それが、父上の身代わりに城で果てるために、鎧^{よろい}を身に纏^{まと}い顔も衣も煤^{すす}けて尚輝^{なお}いていた、大好きな母上の最期の記憶。

母上^{ははじょう}が亡くなられてから、父上^{ちちじょう}は新しい母上^{ははじょう}を連れてきた。

荆逸郎^{けいいちろう}と馨慈郎^{けいじろう}と言う連れ子も二人いて、楽しく遊んでいた。

けれど、いつだったかその二人も急に行方知れずになり、また二人だけの兄弟に戻った。

それから5年。

「瑠螺蔚とま」

「あ、姉上様」

あたしが振り向くと、藍の桔梗の着物を着た姉上様が微笑んで立っていた。

姉上様は兄上の正室で、兄上とお似合いの優しい人だ。2年前に嫁いでいらしたばかりの御歳は確か19、だったような…。

兄上には側室がない。姉上様を大事に思っているから。

姉上様は勿論政略結婚で、ここ、前田家まえたに嫁いできた。

でももう前田家に馴染んでしまって、あたしも「義姉上様」じゃなく、「姉上様」って呼んでいる。

「何ですか、姉上様」

「瑠螺蔚さま…」

と言って、姉上様は笑っていた顔を歪ませて、あわてて顔を隠された。

「姉上様！どうなさったのですか？」

「…瑠螺蔚さま、私は、あの方に愛されてはいないので」

「はい！？あの方って姉上様、稔成としなり兄上ですかっ!？」

姉上は静かに頷く。

「え、で、でもっ、兄上は姉上様を大切にしてくっしゃるわ!」

あたしは驚いて叫んだ。

姉上様と兄上は近所では評判の夫婦で、あたしも二人みたいな夫婦になれたら幸せだろうな……って憧れていたのに。

「確かに私はあの方に大切にされています。でも、それだけ。あの方は優しいから、私の気持ちをわかっているから、優しくしてくださるだけ。あの方は私ではない他の人を愛しているのです。」

兄上が、姉上様ではない人を愛している！？

そんな、まさか。

寝耳に水もいいところで、呆然とするあたしに姉上様は涙を零しながら言う。

「…ごめんなさい瑠螺蔚さま。私意地悪ね。でも、私…もう」

童^{わらわ}が三人、川縁を楽しそうに駆け回っている。

あたしと、兄上と、高^{たかあきら}彬。

高彬は隣の佐々(さっさ)家の子で、あたしたちの幼馴染だ。

…これは夢？

夢よね？だってこの日は…。

目の前の小さいあたしがきゃらきゃら笑いながらいきなり駆け出す。

そう、これは夢。

あまりにも鮮明で、忘れられない日。

「瑠螺蔚！」

「瑠螺蔚さん！」

二人の鋭い声が飛ぶ。

小さいあたしは良く見ないで駆け出したものだから、川に落ちたのだ。

渦に飲まれて、何がなんだかわからなくて、苦しくて…。

「僕、人を呼んでくるっ！」

高彬は青ざめた顔で、矢のように走り去る。

兄上も血の気が引いた顔で、呆然と立ち尽くしていた。

あたしは波に揉まれながら、兄上に助けを求めようと、手を伸ばしていた。けれど、その手も、あっさり激流に飲み込まれる。

「瑠螺蔚い

っ！」

兄上が叫ぶと同時に、なぜかあたしは兄上の腕の中にいた。

あたしはゲホゲホと咳き込んだ。

「に、兄様、あたしどうしてここにいるの…？」

「…瑠螺蔚、今、私は靈力ちからで瑠螺蔚をここに呼び寄せたんだ。私には、そういう力があるんだよ」

「え…？」

「今まで黙っていてごめん。だから、私に近づかないほうがいい。驚かせてしまっでごめんね、瑠螺蔚。」

兄上は、笑った。とてもとても悲しそうに。

だから、あたしはすんなり信じれた。霊力があるなんて突拍子もない話を。

「何でそんなこというの！霊力があるっていいことじゃない」

「いいことの訳、あるものか」

「どっして近づくななんて言うの！兄様はあたしのが嫌いなのです？」

「違うよ瑠螺蔚。そうじゃなくて…」

「兄様が嫌だっていうのなら、あたし誰にも言わない！だから、兄様あ…」

ぐくぐくと泣きじゃくるあたしをみて、兄上は、笑った。

「だから私は瑠螺蔚が好きだよ。ありがとう、瑠螺蔚」

兄上とあたしは、それから指切りをした。

兄上の霊力のことは、誰にも言わないこと。

「ゆーびぎーりげんまんうーそついたら…」

高彬が戻ってくるまでに、あたしたちはふたりとも笑顔に戻っていた。

由良の縁談1（後書き）

落城…城が落ちること

敵に攻められている城から逃げのびること

こんにちは。50まいです。

中学校一年生の頃に書いたものなので大分支離滅裂で御見苦しいですが、どうぞもう少しお付き合いいただけると嬉しいです。

由良の縁談2

そういえば、あたし、いつの間にか眠っちゃったんだっけ・・・。

あの時、あたしは11歳、高杉は10、兄上は16だった。

母上が亡くなられてすぐ後、落ち込んでいたあたしを兄上が遊びに誘ってくださった日のこと。

忘れてはいないけど、遠い日の話。

どうして今更、あの日のことを夢に見たのかしら？

あたしはいつのまにか噴きだしていた額の汗を拭った。

「カミ瑠螺蔚とん」

あたしはびくっとして顔を上げた。

夢の中より、少し低い声。

「たかあき高彬・・・」

あたしはぼんやりと呟いた。

ニコニコと笑う、人のよさそうな笑顔は、小さい頃からずっと変わらない。

「瑠螺蔚さん、ちょっといいかな?？」

「え、あ、いいわよ?？」

高彬が、すたとんと腰を下ろす。

「あたしに何か用？」

「由良ゆらに縁談いづが来た」

高彬は単刀直入にそういった。

「そう」
「そう」

「そう、って瑠螺蔚さん、驚かないね」

高貴な姫のところ縁談が来ること。

そんなことは、よくあること。

あたしのトコにもそれなりに来てるし、高彬の妹の由良のところにも、そろそろ話はいくんじやないかとは予想していたけど。あのコももう14だしね。

「で、由良はそれを望んでるの？」

この政略結婚の御時世望んでるわけがないとは思いつつも一応聞く。

「え、いや・・・」

案の定、高彬の返事は歯切れが悪い。

そう問題はそこ。望んでないだろうとは承知で聞いたけれども、あの大人しい由良が態度に出して望んでいないということアピールするってのが・・・。由良は家のためなら、って涙をのんでくそじじいにも嫁げる子だ。それが嫌がるとなると・・・なんかあるわね。

「そう。じゃあ、あたしを由良のところに入れてって」

あたしがそういうと、高杉はほっとしたように頷いたた。

「瑠螺蔚さんなら、そう言ってくれればいいと思った。ありがとう」

「あたしはまだ由良のところへ連れて行けとしか言っていないわよ？」

「瑠螺蔚さんなら、由良が嫌だというのがなら天地城に乗り込んで上様を怒鳴りつけたりだっしてしまっただろう？」

高杉はいたずらっ子のような笑みを浮かべてそう言った。

「勿論、そこまでさせないけどね。でもそれくらい、僕は瑠螺蔚さんを頼りにしてるから。」

「そりゃあ、アリガトウ」

なんだか素直に喜べないわね。

「じゃ、来て。由良は、家にいるから」

「瑠螺蔚さまっ！！」

由良は、あたしを見ると火がついたように泣き出した。

「私は、嫌ですわ！！徳川家などに、嫁ぎたくはありません！！三河さま以外の、誰にも嫁ぎたくはないのです！！」

あたしはぎょっとして周りを見回した。

高彬は、いない。気を利かせてどこかへ行ったらしい。

『三河さま』って、由良、好きな人いたの……。そりゃあ好きでもない人に嫁ぎたくないわよね。

「そうよね、由良。好きな人がいるのに他の人の奥方になるのは嫌よね」

「瑠螺蔚さま……！！！！」

由良は、わんわんと泣いた。

ひとしきりあたしにしがみついて泣くだけ泣くと、由良はぐずぐず鼻を齧りつつもぴたりと泣くのをやめた。

「……ごめんなさい、瑠螺蔚さま。私……っ、誰かに話を聞いてもらいたかっただけなのですわ。覚悟は出来ております。お家のためですもの」

「それでもやっぱり行きたくない？」

由良ははっとしたようにあたしを見た。

その丸い瞳に、大粒の涙がゆっくりと盛り上がる。

はらはらと涙をこぼしながら、由良は小さく頷いた。

「そう。それなら、断ってくるわ」

「っ 瑠螺蔚さま!?!??」

あたしがあっけらかんと言つと、由良がぱつと顔を上げた。

「な、なにを・・・」

「だから、断ってくるんだつてば。由良は、結婚するのがヤなんですよ?」

「や、やめてください!!! そんな、断つたりしたら、家は・・・」

佐々家は・・・」

由良は蒼白になって言った。

「大丈夫よ。まあ、あたしにまかせときなさいって。」

茫然としている由良にぱちりとウインクを飛ばす。

それにね、高彬はいくら妹大事だとはいえそれで目が曇るような人でもない。あたしのところにくるってことは、あいつが懸念するよ
うななにか原因が徳川家かその結婚相手にあるってことよ。なら、
そこを突くのみ！

覚悟してなさいよ、徳川家〜！！！！

由良の縁談3

「や、やっぱり駄目だよ、瑠螺蔚さん」

「何言ってるの。あんた一応男でしょっ、しつかりしなさいよ。それに、あんた前田家に来たとき言ってたじゃない。天地城に乗り込んで御屋形様を怒鳴りつけたりだっしてしまっただろうっ、って」

「いやだっしてそれはモノの例えで…」

「もういいじゃないの。本当に御屋形様を怒鳴りつけるわけじゃないの。ほら！いつまでもうだうだ言ってるんじゃないの！」

あたしは高彬たかあきひの頭をぱこんと叩いた。

それでも高彬はまだぶつぶつと呟く。

「やはり由良ゆらの為とは言え……」

「あああ、瑠螺蔚さんに言ったら僕が馬鹿だった……」

「上手くいかなかったら佐々家は終わりだ……」

と、頭を抱えて呻いてる始末。

ったく。

情けないと思ったらありゃしない。

今あたしと高杉は天地城に来ている。

もちろん、由良の縁談を断るために。

腰砕けの高杉は恐れ多いだの何だの言ってるけど、自分の妹が嫌がってるってのに、兄が動かないで一体どうするつもりなのか。これだから男は。

あたしはいつも着ている小袖と違って、ずるずると引きずってる裾をちよいと持ち上げた。

ああ、うっとおしい。これだから正装って嫌いなよね！

「瑠螺蔚さん！」

とたんに高彬に窘められる。

「そんなことしちや駄目だよ」

「知ってるわよ」

暑いし、重たいし、最悪。

「母上になりすますのなら、もっとおしとやかにしなさい」

「っさいわね。わかってるわよ」

あたしは御屋形様の御座せられるここ、天地城に由良の縁談の相手、徳川家の嫡男を呼び出した。あ手続きとかめんどくさい事はみんな当然高彬ね。

今は徳川の嫡男がいる部屋に向かっているところである。

なんで佐々家の姫の縁談に家が隣ってだけで血筋的には全く関係ないあたしがこうしてしゃしゃり出てるかっていうと、このあたしが由良の母、佐々家の奥方になりすましてその嫡男に会っちゃおーっという計画なわけなのよ。

ま、流石に無理があるかな？とは思ったんだけど、佐々家の奥方は引きこもりがちであんまり他人と顔を合わせたことがないって言うから、大丈夫でしょ。

なにより第三者として手をこまねいているのはあたしの性格上ちょっと無理な話よ。

「瑠螺蔚さん。絶対に！その被かすき取らないでくれよ。ただでさえ無理がある設定なんだから・・・」

「あら大丈夫よ。最悪バレた時だってなんとも言い訳ができるか

ら

あたしは目の前に垂れ下っている被きを引つ張りながら答えた。辻が花染が美しい月草色つきくさのこの被きは真正正銘佐々の御内室のものである。ちなみに本人には無許可でちよつと拝借してきた。

ばれても高彬がちよこつといびられるだけであたしは痛くもかゆくもないしね。佐々家は子沢山だけど御内室は実子の高彬を猫かわいがりしてるからそんなに酷い目にもあわないだろうし。

「よっしゃッ！由良のために気合いいれていくわよ！」

はあ…と前で高彬のため息が聞こえた。

「母は先日、病を得ましてその際の傷が治りきらず顔に残っており
ます。失礼と承知の上ですが、面を隠す御無礼お許しいただきたい」

「私も女心を知らぬ男ではない。気にいたすな。忠政どのの御内室、
面を上げられよ。」

あたしはゆっくりと顔を上げ被き越しに目の前の徳川の嫡男を見た。

瞳はすっと涼しく横に伸び、鼻立ちは高く全体的にさわやかなんだ
けど、顔の輪郭がしっかりとしていて男らしく草紙にも出てきそう
な今時の伊達男！って感じ。

声も澄んでいて、まるで夏の木陰みたいな耳通りのいい声。

はれーいい男じゃないの〜意外だわ…。

由良が嫌がるって言うからてつきりもつところ…あいや別に顔で判断するわけじゃないんだけど！決して！最初に想像してたのが悪すぎたというかうにやうにや…。

心の中で誰にともなく弁解していると横の高杉にすっかりしてよと言うふうに肘でつんとつつかれた。

わかってるわよ！この瑠螺蔚さまは外見なんかじゃ惑わされないんだからね？おほん。

気を取り直して徳川の嫡男に向き直る。

「傷が痛みましたら遠慮せずおっしゃってください。今日連れてきている私の従者のなかにはささやかなれど薬師くすりしの心得があるものも

おりますから」

「その御心遣い、誠に有難く存じます。ですが病の面影は最早見目に残るのみ。痛みはなけれど目障りではありません故このままでご容赦を」

「それは勿論先ほども申した通り。さてでは本題に入りましょうか、御母君」

にっこり笑いながら嫡男はそう言った。その瞳はひたとあたしを見据えて形こそ弓形ゆみなりになっているのにその実こちらを注意深く観察している。

そう来たか、とあたしはお腹にぐっと力を入れた。

御母君とわざと言うからには、今日、あたしがここに呼びつけた用事はわかっているはず。

この人、優男やさおとこのような外見たがと変わらず、頭かぶがいい。

「お初、御目通りいたします。佐々右衛門忠政ささむねもんとだまねが妻、北きたでございます」

「北とは『子』をも意味する名。そちらの高杉殿たかすぎのどのや、由良姫ゆらぎめのような健すこやかなる子をお産うみいたしているわけです。いい名ですね」

「ありがたく存じます。あなた様は聡明あで有あらせられます。私などがいろいろ言っても詮無せんむきこと。単刀直入たんとうちくねいに申し上げます。由良との縁談ゆらだん、なかつたものにしていただきたい」

「おやおや…それはまた、どうしてですか」

嫡男ちやくなんは笑顔えがよのままであたしに問う。

「由良には好すいた男おとこがございます」

高彬が横でぴくっと反応した。

「それはそれはめでたいことですね」

「そつでございましょう」

「私にだって好いた女ぐらいいますよ。何人もね。それで、何か色々徳川の縁談に不祥事が生じるのですか？」

ニコニコと笑いながら嫡男は言う。

好いた女が何人も…ね。

ケツ。てめえなんかによ良は任せられないわ、やっぱり。

「女は誰でも好きな男のもとへ嫁ぎたいものでございませう」

「つまり私では由良姫の相手に不十分だと」

びり、とその場に緊張が走る。

「いいえ。そのように申す訳がございませうか。由良には由良の都合があるのです。いきなり知らない男と祝言をあげるといわれ、心から頷く女がおりまじょうか。皆、断腸の思いで頷くのです。女を泣かせるは男の恥。女は、好いた男のもとへ嫁ぐのが一番の幸せ。故にこのお話、お断りしたく存じます」

「家の利益よりも娘の幸せをとりますか。佐々の御内室が」

「徳川家とはまた後ほどご縁がありますように」

「わかりました。娘を思うその心に折れまじょう。この縁談、無か

ったものと致します」

「わ、若殿っ!？」

嫡男の後ろに控えていた老人が泡を食って叫んだ。

「こ、こ、この話はあれほど大切だからと…!」

老人は喋り終わらないうちにうんとうんとう唸って倒れてしまった。

よほどショックだったらしい。

それを見かねてか、外に控えていた従者が二人がかりでその老人を運び出して言った。

嫡男についていた供ともは、部屋の中にいる人数で3人。

出て行った人も、3人。

「…さて」

老人を連れて行った男達の足音が遠ざかると、嫡男は肩の力を抜いたように喋りだした。

「^{noisy}煩いのもいなくなったことだし、せつかくですからお話でもしていきませんか、北どの」

「あら。ですが、お話をするのでしたら私よりも歳の近い高彬のほうが…」

「私とでは、不満ですか？」

「いえ、そういわけでは…」

「ならばよろしいでしょう？ああ、私の名前を名乗っていませんでしたね。勿論御存じでしょうが…徳川とくがわ洪こう一いち郎ろう亦やく榎えんと申します」

「はあ、亦榎どの」

嫡男の名前なんて知らないわよ。興味ないし。

あたしは話の展開についていけずぼんやりと名前を繰り返す。

ふいに亦榎の瞳が強くあたしを捉えた。

…何？

すると突然、高杉があたしの腕をつかんで立ち上がった。

「亦枉どの。話も済んだことですし私どもはこれで下がらせていただきます。母は未だ病を得ている身です。御身にも障るといけませんし。失礼いたします」

あたしは驚いてこそこそと高彬に話しかけた。

(ちよ、ちよっと高彬、どうしたのよ。いくらなんでもこれは失礼じゃ…)

(瑠螺蔚さんはなんにもわかってないね。今は一刻も早く、ここを去るべきだ)

高彬はぴしゃりと言った。

そのまま、あたしをぐんぐんと引っ張って、部屋から何も言わずに出て行くようにする。

「ね、ねえ本当に、ちょっと待って。痛いってば。ねえ！」

「お待ちください」

急に、亦証の声が響いた。

「早く帰りたいとおっしゃるのですたらお止めはしません。ですが、せつかくの機会にひとつだけお聞かせ願えないでしょうか？」

「行くよ瑠螺蔚さん」

高彬がこわばった声で言う。腕を引く力も強まる。

あたしはそれでも立ち止まったままでいた。

だって、ここで変に機嫌を損ねて、やっぱりこの縁談の話、なかったことにしませんー・・・なんてことになったら困るじゃないの。

由良の泣き顔も見たくないし、任せてといったあたしの立つ瀬もない。

それに主の織田様直々の申せではないとはいえ独断かつ無条件で色々な縁談をなかつたことにしてもいいというこの男の真意も気になる。ぶつちやけ、不気味なのだ。

「瑠螺蔚さん！」

「いいじゃないの。ひとつだけだというんだし」

「でも！」

「じゃあ、あなたは外に出てるといいわ。あたしもすぐ行くから」

「違う……るぶ……！」

高彬を無理矢理障子の向こうに押し出して、あたしは亦証と向き合った。

「なんでしょうか、亦証さま」

「用件はひとつです。私の真名まなは言いました。あなたの真名もお聞かせ願えないでしょうか」

「……………北、ですが？」

「いいえ。違いますね。それは仮名だ」

……………なにか……………話がマズイ方向に進んでるような……………。

ひやりと背中を汗が伝う。

「一体何が違うとおっしゃられるのでしょうか。私の名は北です。それのどこがご不満なのでしょうか」

「あなたは、忠政どのの妻と、正室というには声も手も若すぎる。由良姫は、好きな男がいて、私に嫁ぎたくなくて、泣いていた。あなたはそんな由良姫が可哀想だから、北どのの名を騙^{かた}ってまで私と話をつけに来た。違いますか、姫」

「違います。私は、北です。少なくとも、あなた様の前で語る名は、これより他にはありません」

あたしの言葉を受け止めて、亦衿は目を大きく見開いた。

そして、笑った。今までの胡散臭い笑みとは違った、素直な笑みが零^{こぼ}れる。

「なるほど。すばらしい人ですね、あなたは。機転が利いて、頭の巡りがいい。度胸もある。由良姫はなかなかかわいらしいとの噂が届いていましたね。佐々家と今どうしても手を組まなければいけないということもないけれど諦めるには半ば惜しいような気もしましたが…由良姫は、もう、いいです。由良姫よりも、あなたが欲しい」

ふいにさっと立ち上がったかと思うと、あっという間にあたしの目の前に来た。

あたしとは頭ひとつ分も違う。気おされて亦怔の顔を見上げること
もできず横を向いた。

「せめて、あなたの御名だけでもお聞かせ願えないかな？仮名かりなではなく、真名を」

「…嫌だといったら、如何どうしますか」

「そのときは、今ここで気絶させて、徳川家まで、持って帰りましょうか。そこで既成事実を作るもよし、祝儀を上げるもよし。姫、無駄な抵抗はやめて、さっさと吐いたほうが楽ですよ。わたしが名前を聞くだけで満足している間にね。さ、お聞かせ願えないかな？」

「……………由良」

すると、また亦証は笑うのだ。

「姫。自分が由良姫だと言って、それで通じるとお思いかな？由良姫は、可愛らしい、のですよ。私は仙せんではないのでその被かきの下は見えないが、どうもあなたは可愛らしいというには大人おとなびすぎている。と、言っいて北きたどのを騙だまるにはまだ若わかすぎますがね」

「……………」

ああ、高杉と一緒に、あたしも外、出ておけばよかった……。

「さ、姫？」

「どうしてそんなにあたしの名を聞きたがるのよ」

あたしが口調をがらりとかえると、亦証はおやおやと何でも言いつつ、
に眉を上げた。

「そちらが姫の普段の物言いなのかな？」

「何よ。悪い？」

「いいえ素敵で」

「わっ、わっ、わわ、若殿ーっ！ーっ！」

突如、ヒステリックな声と大きい^{ずったい}図体が乱入してきた。

それは、倒れたはずの老人。

「若殿っ！御傍を離れ申して面目ない！そばに置いたるものもいくら新参者と言えどみな儂わじについてくるとは何たる不始末。若の身に何かあつたらと思うとわしは…わしは寧ねいさまに面目が…若っどこの身にお障まわりはございませぬかあっ！」

老人はそういうと、混乱しているのか亦杖の肩をぐわしと掴むとがくがくと揺さぶった。

あたしが、チャンスとばかりにそこから逃げ出したのは言うまでもない。

由良の縁談3（後書き）

今回の話が難しかった人のための3分でわかる戦伽

*実際の登場人物とは性格が違う場合があります。御注意ください。

瑠螺蔚「由良のために高彬のママになりすまして政略結婚断り行くしー」

高彬「普通に無理だと…」

姫「ダイジョーブ布で顔隠せばバレないっしょwwいざ出陣！」

亦「え？結婚中止？おKおK」

姫「マジで話わかるう」

亦「そのかわりyou俺んとききちゃいなyo！」

姫「パス」

亦「そう言わずにサ てか高彬のママってちみどんだけ年増w普通にバレルし」

姫「マジで」

亦「I LOVE YOU愛人になれし」

徳川家臣じいちゃん乱入

爺「ボツチャン毛がない！？間違えた怪我ない！？」

亦「毛はまだある」

姫「じつちゃんナイス！逃げろー」

亦「逃げられただろこのK Y！空気読めし！今まさに女口説いてたんだYO」

爺「メンゴメンゴ」

はい。こんな話でしたね？今回。

あ、石は投げないでください。

いやーこのルビの多さは他の小説の追隨を許しませんな。

どれだけ文中に注釈を付けようと思ったことか…。

でも小説内に注釈的なことは書かないようにしようと思ったのでここで書きます。読みづらくてすいません…。あ、でも話の内容は大體上のを読めばわかります

被き 着物を一枚頭から被ったものと思ってください。

月草色 薄青色。

内室 身分ある人の正室の呼称。昔は一夫多妻制で地位が高い男には沢山の奥さんがいました。その中でも一番身分が高い奥さんの事。所謂正妻。でもこの呼称は戦国時代でもそうだったかは確認取ってません。

忠政 高彬の父。

薬師 医者

嫡男 家を継ぐ長男

真名、仮名 本当の名前、偽りの名前

祝儀 結婚式

寧 亦衿の祖母

草紙 絵本

昼間なのに暗い部屋。奥のほうは、光も届かず本当に暗い。どうやらここは、天地城の中でも奥のほうの部屋になるらしい。質素で、調度品とかひとつも置いてないところを見ると、この部屋は普段使われていないのかしら。

なんか、きみわるい。お化けでも出そう。耳をすませば、微かにイザナミのイザナギを怨む声が聞こえてきそうなーーーーー……………。

『……………佐々家がーーーーー……………』

え。

イザナミの声でもなかったし、人を怨み呪う声でもなかったけど、なんか、今、聞こえたわよね。

佐々家が、って聞こえなかった？

あたしは注意深く回りを見た。

どうやら、襖一枚隔てた隣で誰か話しているらしい。

あたしはそつと襖ににじり寄って聞き耳を立てた。

『やはり、あいつだな』

はつきりと声が聞こえる。

『ああ。佐々忠政ささただただまの末の…佐々高彬。あやつは…目障りだ』

は！？高彬って言った！？

『あいつが、若殿に一番忠誠を誓っている。…だが、今回のことに直接的な差障りさしさわは無かるう、永田ながたどの』

『まあ、それもそうだが…。手筈は進んでいるのか』

『ああ』

『目障りだが消せもしないとは…全く面倒な存在よ』

そのとき、いきなりあたしのお腹に誰かの力強い腕が回った。

思わず、悲鳴が口から漏れる。

「ひ、…っふ！」

でもそれは大きな手によって、遮られた。

「し…姫、ここで一体何を？」

耳元で囁かれる。

やけに色っぽい低めの男の声。

嫌な汗が背中を伝う。

……だれ。

男の手の下で呟くと、唇の動きからあたしが何を言ったかわかったらしい。男がふっと笑う気配が伝わる。顔が見えなくて、それがどつという種類の笑みかわからずあたしは体を強張らせる。

「姫、もしか今の話を聞かれましたか？」

.....。

「そうですね。聞かれましたか」

男は小さくため息をついた。

「立ってますか、姫。とりあえずここから出ましよう。音は立てないよじに歩いてくださいね」

「あたしを殺すの?」

部屋から離れ、男の手が外れた途端にあたしはそう聞いた。

「いいえ。でもさっき聞いたことは忘れてもらいます。他言はされ
ないように」

67

強い調子で男が言う。

「なんでよ」

「強情な姫ですね。なんでも、です。約束してください。今日聞か
れたことは忘れてくださいますね」

そうはいくもんですか。高杉の名前が出てきたんだから、気になつてしょうがないわ。

しかも、目障りときたらいくらあたしでも、聞いて聞かぬふりは出
来ないわ。

男が、返事をしないあたしをじっと見る。

なによ。そんな睨まれたってあたし怖くないんだから。

あたしはじっと睨み返した。

暫く、無言の争いが続く。

先に音ねを上げたのは、男のほうだった。

「どうしても、忘れてはくださいませんか。それなら天地城から帰す訳にはいきませぬね。今あなたにいろいろ騒がれると私たちの苦勞が全て無になる」

「…あたし、誰にも言わないわ。それで気が済むんなら、もう帰っていいかしら」

「姫。私は、忘れてくださいといってるのですよ」

「誰にも言わない、っていつてるでしょ？同じことよ」

「どうしてそう駄々をこねられるのか。関わればあなたの身も危険に晒されることになるのですよ。関係のない話に好奇心だけで首を突っ込むのは自殺行為です」

「関係なくないわよ！だってあいつら、佐々家って…あ」

あたしは思わず手で口を覆った。

この男の素性も知れないのに、迂闊うっかつに不味いこと言っちゃったかも…。

「佐々家、……ですか。では姫は佐々の者なのですか」

あああああ、まずいまずいまずい……。

「うっくん、違っわー!」

とりあえず否定したけど、後の祭り。

でも実際あたし、ホントに佐々の者じゃないし!

男は溜息をついた。

「言っておきますが姫、私はさっき話していたものの仲間ではありません。そこは誤解しないでいただきたい」

「そんなこと言われたって信じるわけないでしょ」

「それはそうですが。姫、どうしたらわかっていただけるのです」

「…わかった。この話はあたしの心の中に閉まっておくから。でもそのかわり！条件があるの」

「なんでしょう」

「おロ、ギル」

「……はい？」

「だからっ！天地城から出るにはどうすればいいか聞いてるの！」

「つまり・・・どういふことですか？」

「つまり、迷った、ってコトよ！」

「迷った？この、天地城で？」

「そっよ」

「では、ここに行ったのは...」

「迷いこんだのよ、ここに！あたしだって聞きたくて盗み聞きしてたんじゃないんだから」

そういうと、男はふっと噴出した。

・・・失礼なヤツね。何笑ってんのよ。

横目で睨みつけると、男は笑いながらあたしを宥めるように片手を挙げた。

「いや、失礼。貴女は普通の姫とは違いますね」

「悪かったわね、普通の姫じゃなくて」

「いえ大いに結構。ただ大人しいだけの姫より、よほど頼りがいがあっていいですよ」

それは褒めてるのが貶されてるのか。

「で、出口まで案内してくれるの？くれないの？」

「案内します。ついてきてください」

男が颯爽と歩き出した。

「何であたしのこと、姫って呼ぶの？あたし、名乗ってないわよね？」

「着ている物を見れば一目瞭然ですよ」

あ、そっか。

あたしは前を歩く男の背を見つめた。

……別に、悪い人、には見えないわ。

墨をすったようなとろりとした光沢を放つ髪。歩くたびにさらりさらりと揺れる様は女のあたしでもうらやましいくらい。その顔は…素直に認めますこれ以上ないくらいの美丈夫よ。魅力的なのはきりりとした眉かな…。

どっちかっていうと、気品があって、きているものはアレだけど、顔も別にいやらしい感じとかじゃないし。身分が高い人、かしら？

でも、一体誰なんだろう。

自分はさっき話していたものの仲間ではないと言っていた。仲間じゃないとしたら、何よ。

「あんださあ」

「はい。何ですか？」

ほら。ちゃんと敬語使ってあたしと話してる。女だから、って馬鹿にしたりしない。

うん。いいひとね。

我ながら単純だけど、人を見る目はあるつもりよ。

「あなた亦^{やく}_{まき}杖^{づえ}って知ってる？」

「亦^{やく}杖^{づえ}：徳川亦^{やく}杖^{づえ}ですか。知っていますよ」

「あなた、そいつに似てるわ」

どどこが似てる、って具体的なことはいえないけど。なんとなく、

雰囲気かな？が似てる気がする。

「はは、似ていますか。そう言われたのは初めてですね」

男は、にこと口の端をあげて笑った。

う。

かっこ、いい……。

「……」

「姫？私の顔に何か？」

「う、ううん。なんでもないのよ。なんでも」

あたしはぱたぱたと手で顔を仰いだ。

「あんた、名前はなんていうの？」

「私ですか？そうですね…鷹男^{たかお}、です」

「鷹男、鷹男ね。じゃあ、鷹男」

「はい？」

「あんた、誰？」

「…はい」

「あんださ、そんな服着てるけど、もつと全然上の身分の人じゃない？」

鷹男が、黙る。

暫しの沈黙。

不意に、鷹男が笑い出した。

「な、なによ」

「姫、凄いですね。やはり貴方は普通の姫ではありませんね」

「あんだだっであたしを姫だっで見抜いたじゃないの。おあいこよ」

「おあいこ、ですか。そうですね」

「で、あんたどこの家の子?…まさか」

ふとひとつのことが頭に浮かぶ。

「……あなた、由良^{ゆら}、知ってる?」

「佐々家の末の姫ですね。知ってますよ」

「あなた、まさかとは思いますが、三河家^{みかわ}の者、じゃないでしょうね」

まさか、「こいつが由良の想い人…」

「いいえ?」

な、ワケはないか。そうそう世の中は都合よく出来てないわよねえ。

「三河にお知り合いでも？」

「ううん。そういうわけじゃないわ。じゃああんたどこの人？」

鷹男は意味深に笑う。笑うだけで何も答えない。

「織田おだ？な、ワケはないわね。柴田しばたかしら。あ、でもちよっと亦な証しやうに似てるから徳川の人？」

「では姫ごそこの姫ですか？見覚えがなくもないのですが…」

「あら、あたしもあんた何処かで見たとような気がするわ」

「それは光栄ですね」

「で、あんた結局何処の…」

「つきましたよ姫」

「へ？」

ふと気がつくと、あたしは天地城の正門にいた。

「私はまだ用事があるので、ここまででいいですか？」

「あ、うん。ありがとう」

「では、また逢いましょう姫」

にっこりと微笑んで鷹男は踵かかとを返した。

あたしは暫くそこでぼーとたっていた。

あ、結局何処の家の人が聞き逃したわ・・・。

でも、また会いましょう、って言っていたもの。きつとどこかで会えるわね。

そのときに聞けばいいか。

毒の粉1

「高杉は〜どこよー!」

ばしん!と障子を開けたら中にいた由良が目を見開いて固まっていた。

「まゝ、る、瑠螺蔚さま、どうなさったんですか?」

大きな瞳とぼつてりしたちいさな唇をポカンと開けた由良は今日も愛らしい。

…じゃなくて。

「どうもこうも…まったくあのポケは!あ、由良。喜んで。縁談はチャラになったわよ」

「えっ!？」

「穏便に済ませたから佐々家にも何の影響もなし。そもそもそこま
で重要な縁談じゃなかったしねー思ったより簡単だったわ」

「ほ、ほ、ほ、本当ですか!？」

「うん。だから、安心してね」

「ありがとうございます!」

由良は手をついて、あたしに深々と頭を下げた。

「いや、そんな。てれちゃうな、もう……。あ、由良。高杉は何処
? あゝいゝつゝめ」

「え？兄上様はまだお帰りになっていらっしやいませんし、今日はいろいろと忙しいらしく、天地城に御泊りすると言っていましたわ」

「あ、そう。て、ことは明日まで帰ってこないのよね？ぶうん」

まったく、思い出しても腹が立つてくる。

あいつが、あたしを置いていったから、亦やく証まに絡まれるし、なんか

変な話聞いちゃうことになったんだ。

ま、鷹男たかおというカッコいい男と知り合いになれたけど。

それでも、全くの偶然とはいえ、何かヤバイ会話を聞いちゃって、もしそれが見つかったらその場で斬られてたかも知れないんだし。

それもこれもあれも、みいいーんな、全部っ！高彬が悪いんだ！

ま、モトはといえばあたしに変なおせっかい心出して天地城に乗り込んだこと、って気もしなくもないけど。

でも！あたしが滅多に天地城になんていかないの知ってるはずなのに置いていく高彬は酷い男よ！

「たーかーあーきーらーのおおオオ~~~~~ばあ~~~~~かっ
」！

あたしは夕焼け空に思い切り叫んだのだった。

毒の粉1(後書き)

短いです。

毒の粉2

「た〜か〜あきらっ！」

次の日、朝も早はよから佐々家に乗り込むと、目を丸くした由良ゆらが奥から出てきた。

「ま、まあ瑠螺蔚るいさま、こんな朝早くから…どうなさいましたか？」

「高杉たかあきは？あんにゃろっはどっっ？」

「まだ帰っておりませんわ」

「…ふうっん。そう」

ふっ、と笑ったあたしに由良が震えあがった。

「あの…?」

「邪魔したわね」

あたしを待たせるとはいい度胸じゃないの。こっぴなったら、こっぴちから天地城に乗り込んでやる!

高彬のぶあくかつ!

あたしは頭に血の上ったまま、天地城に乗り込んだ。

と、言っても勢いだけで来たので高彬は何処にいるのやら全く見当がつかない。

うろろろしていたらまた迷ってしまいそうだ。

きよろきよろしていたら、向かいから深緑の服を着たおじさんが歩いてきた。

でっかいおなかにはげちよろびんの頭。

高彬もおじさんになったらあんなになるのかしらと人知れずため息をついた時、向かいのおじさんもすれ違いざまつられたようにでっ

かいあくびをした。

そして、ふとあたしに話しかけてきた。

「のう、おぬし」

「！」

あたしは息を呑む。でも何事もないかのように答える。

「何でしょうか」

「永田殿を見かけなかったか？」

「いいえ。存じませんが？」

「そうか、すまん。一体永田殿はどこに行ったのやら・・・」

ぶつぶつ言いながら、おじさんは歩き出した。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

あたしはその背を睨みつける。

この声、間違いない。こいつ、高彬を目障りだとか何とか言っていたやつだ。

なんだ、声だけだったらもっと若そうだったのに、こんなおじさんだったのか。

永田殿って昨日も言っていたけど偽名じゃなかったのか。本名で呼びあって密談するなんて、抜けてるのか罨なのか…。

あたしはそつとそのおじさんの後をついていった。

「おお、永田殿、こんなところにおられたのか」

「柴田殿、ささ、はようお入りになられて」

柴田！？超有名な家じゃないの…。

二人にこそつとついていったら、昨日のように天地城の奥まったところにある小部屋に入っていた。

あたしはすかさずさつと隣の部屋に入った。今日は昨日のような襦じゆではなくいつものどおりの小袖こそでなので、衣擦れの音もしないし、身も軽い。

襖一枚を隔てた部屋で、あたしは聞き耳を立てる。

『早速だが柴田殿。発殿はつは了解してくださったのかな？』

『それが…』

『む。どうかなさったのか？』

『それがなあ、若殿は、ほれ、あの容貌であるう？少し、情が傾いてきているらしい』

『！それでは…』

『いや、了解はしてくれたよ。まだ完全に情が移っている訳じゃないからな。でも、急いだほうがいい』

『では、例のものは』

『まだ、届いてはおらんが…。永田殿、悪い知らせじゃ。お六がつい昨日、急死した』

『なに！？』

『お六がいなければ、これは成るまい。他の侍女ではだめだ。誰か、家とは関係ない何も知らない新しい侍女を探してこなければ……。お六も、よりによってこんなときに死なずともよいものを……』

永田がはははと笑った。

『新しい侍女を探してくるまでもないでしょう。行き倒れくらい、このご時勢、いくらでもおりましたように』

あたしは段々といらいらしてきた。

確かに、密談しているだけあって、二人の会話は何処となく曖昧だった。高杉がどう関係しているのかもわからないし。

……。

さっき、こいつら新しい侍女が何とか、って言ってたわよね。

あたしはにやりと笑った。

「あゝ、兄上！いたいた！」

「溜螺蔚？」

庭に出て上衣を脱ぎ剣の型を練習していた兄上にあたしは駆け寄った。

兄上を見上げて微笑む。

「兄上、あたしちょっと旅に出てくるから」

「旅？」

微笑んでいた兄上の顔が驚きで固まる。

「父上には兄上からごまかして。好きな男が出来て、そこに通つてるとかどうとか、適当に言っというて」

「溜螺蔚っ!?!」

兄上は、あたしに視線をひたと当てて、でもどこか遠くを見るような目をした。

「兄上」

あたしは冷めた声で言う。

「やめて。あたしの心を視^みないで」

兄上が、そういう目をするときは、^{ちから}霊力を現す時。

あたしは心を覆う。

心を強く持たなければ。でなければ視られてしまう。

兄上は諦めたように苦笑いしながら言った。

「せめて、何処に行くかだけでも…」

「駄目よ。これは、兄上にも言えないの」

「瑠螺蔚。そう言われてもそんなに簡単に頷けないよ。いきなり旅だなんて言われても」

「大丈夫心配しないで。ひと月もしないで戻ってくる予定だから」

「瑠螺蔚…」

「ね？お願い！兄上」

妹からでも上目遣い攻撃が効いたのか兄上は諦めたように息をついてあたしをぎゅっと抱きしめた。

まあ兄上は大概あたしに甘いけど。

「わたしが一緒に行きたいと言ったら？」

「無理よ。兄上お仕事があるじゃない」

「それでも」

「だめ」

「誰かと一緒に行くのかい？」

「…ホントはね、旅じゃなくて、ちょっと知り合いの家に泊まり行くだけなの」

嘘は言っていないわよね。

「だから、心配しないで」

「なら最初からそう言いなさい。旅なんてひとりじゃ絶対に行かせられないんだから。最近物騒ものさわになってきているから。淡海国内あふみなんだね？」

「うん。そんな遠くないよ」

「でも場所は言えない？」

「さし」

「瑠螺蔚。もう心は視ないけれど、危なくなったら私を呼ぶんだ」

「うん。ありがとう兄上」

毒の粉2（後書き）

瑠螺蔚と稔成としなりのいちやいちゃを増やしてみました。あとどう考えても過保護なお兄ちゃんが可愛い妹を一人旅に出してくれませんでした。

襠：織田信長の妹お市の方の絵姿みたいな当時ちょっと豪華だった服

小袖：普通の着物

淡海国：近江国。今で言う滋賀県。

毒の粉3

「ひまあ・・・」

あたしはごろん、と転がった。

畳の匂いが鼻を突く。

「ひまだなあ・・・」

本当に、何にもすることがない。

あれから、あたしは柴田家しばたを探し当てて、その門前で、門番に声をかけた。

柴田家は有名だからすぐ見つかった。

「あのう・・・すみません」

河原の石で揉んだ衣に薄汚れた顔。工作はバツチリよ。

「何だ女。物売りならば裏へ回れ。客引きであれば大殿様は間に合っている。帰れ帰れ」

しっしと門番はにべもなく手を振る。

「私は、石と言います。戦で家族を皆亡くしました。お伺いすればここは慈悲深く聡明で有るといふ柴田様のお屋敷。私がここにたどり着いたのも神のお導き。どうか、私をここで雇っていただけないでしょうか」

途端に門番は目を輝かせた。

「わ、わかった。そういうことなら話は別だ。ちょっとまっている。今、大殿様を呼んでくるからな」

かくして、怖いほどに話はすすいと進み、今こうして侍女として雇ってもらっているわけだけど。

あの、あたし、仕事、何にもしてないんですけど？

それなのに誰もあたしを叱ったりしないのは、何か思惑があるからか。

一人部屋も貰っちゃったりして。

ごろん、と転がったら、目の前にぬつと顔が出た。

つるんとした頭にしわくちやの顔。

「でたあ！」

「……………石」

「あ、お、大奥様！」

あたしは慌てて飛び起きた。

「も、申し訳ございません！」

「大殿がお呼びです。いらっしやい」

上座には偉そうにふんぞり返っているデブなおじさんと、若い女。そして、あたしと大奥。

「おお、来たか石」

「大殿様におかれましては、ご機嫌も麗しく、まこと……」

「口上は結構。発はつがそういうものを嫌きらがるのでな」

なあ？というふうには柴田は隣の若い女を見る。20前後に見える女は、ふん、と鼻を鳴らした。眉間には皺が刻まれ、目尻はきつくつりあがっている。大奥様とそっくりだ。

と、いうことはこの女の人は、柴田と大奥様の子だろうか。

「石、この子はわしの娘で発と言う。お前は知らぬかもしれないが、
発は織田平脈様の第3子、織田三郎宗平殿の妻じゃ。わかるか？」

宗平様はもちろん知っている。なんてったって若君で時期織田の当主だもんね。正室には佐々家から高彬の姉の公子様きみこがなっている。その縁もあり、高彬に目をとめた宗平様が重宝するということ話は聞いている。あの真面目な高彬は有能らしいのだ。

それにしても発だなんて、そんな名前聞いたこともないわよ？柴田家からとはいえ、宗平様のものの数にもはいらないうような側室の一人ね。有名じゃないってことは宗平様が目をかけていないってことだもの。

「いいえ。私は教養なき身ゆえ、存じ上げません」

「で、あろうな。参河みかわより来たとなれば、知らぬもまた道理」

柴田は勝手に一人でうんうんと頷いている。あたしのでっち上げ話、本当に信じてるし。

「だいたい、ちゃんとした身分調査もしないで即興で雇うってどうなの。」

何か狙いがあるみたいだけど……こうして渦中に飛び込んだからにはあたしも腹を決めてかからないと。」

「この淡海国おつみは、我らが主、織田家が治められておる。その本城が天地城。そこに我ら家臣は集う。現織田家の当主は平脈様であらせられる。そこはわかっておろうな?」

「はい。参河も同様でした」

「おぬしは参河では武家屋敷に勤めていたと言っていたか。ふむ。言葉や態度といい全く知がない訳ではないのか。でな、その平脈様が」

「お父様！私、もう帰らせていただいていいかしら。」

イライラした発の鋭い声が柴田の声を遮った。

「これ以上ここに居るのは時間の無駄だと思っておりますけど」

そういって、さっと立ってさっさと出て行ってしまった。

なんだかなあ……。癩癩持ちなのかしら。

そもそもどうしてあたしが呼ばれたんだろう？参河国から来たあたしにわざわざ淡海国講座？親切心からじゃないと思うんだけどな

あ…。

「発は短気なのが玉にきずだのう」

いや短気なところだけじゃないと思うけど…。

「おぬしももう戻ってもよい」

はあ！？結局あたしは何のために呼ばれたのよ！？

「僭越ながら大殿様。私はこの…何のために…」

「新しく入ったお前を発に目通りさせてやるうと思ったただけだ」

「わざわざ私めなどのために…ありがとうございます」

「よい。さがれ」

「はい」

部屋に戻って考えてもわからない。ホント、どういうこと？

あたしに発の顔を、または発にあたしの顔を見せる必要があったってこと？新入りの下働き（働いてないけど）を姫とわざわざ面会させるなんて聞いたことないわよ？

「……起きなさい、石」

「……ん……。ぎゃあっ!!」

目の前にはどーんと大奥様のアップ。失礼ながら、のげぞる。

流石に朝っぱらからはきついよー。

「し、失礼いたしました。何の御用でしょうか」

「大殿がお呼びです。すぐ準備をするように」

「あ、は、はい」

あたしは急いで支度に取り掛かった

毒の粉3（後書き）

側室：第2夫人以下の妻。

参河国：今の愛知県東部辺り。

毒の粉4

小さく揺れる輿こしの中。あたしは懐から、小さな守り袋を取り出した。

さて、一体これは何なのか。

あたしは権六から、発に届け物を頼まれた。この、守り袋、たったこれだけを届けるのなんて、別にあたしじゃなくてもいいだろうに。

やっぱり、きな臭い。権六も、発も、何か臭うわね。

そっと袋を開くと、中には白い粉が詰まっていた。

見るからにあやしい。何よ、この粉。

ま、大体予想はつくけどね。

織田家の現状と柴田の動向を見れば、バカでも大体の察しはつく。

織田家の現主が織田平脈様。おだひらみやく子が全部で4人。その中で、一番有力とされ、「若殿」と呼ばれているのが発の夫の第三子、宗平様。むねひら

なぜ、跡目を継ぐのが長男ではなく第三子なのか。

まず、長男は母の身分が悪い。諸子しよしの子だ。だから鼻にもかかけられなかった。

次男。母が京の貴族で、身分はいいのだけれど、後ろ盾がない。長男と次男の名前は覚えてないわ。長らく表舞台に出てきていないもの。

三男。宗平様。この人は母が平脈様の正室。後見は佐々(さつさ)家。おまけに宗平様本人が頭脳明晰容姿端麗という全てが完璧なヒト。ま、この人が若殿となるのも頷けるわね。

そして、最後。四男の正良様^{しんりやう}。後見人は柴田家。母は残念ながら側室だけれど、まさに柴田家から出た人だから、身分が悪いわけじゃない。もしも、宗平様がいなかったのであれば、間違ひなく正良様が若君となっていたのであるうが、ま、運が悪かったとしか言いようがないわね。正良様が悪いんじゃない。宗平様が突出しているだけなのだ。

柴田、柴田権六道重^{しばたこんろくみちしげ}は、柴田家当主で大本山ともいえる人物。しぶとく、狡猾^{こうかく}であり黒い噂もしばしばあるものの尻尾はなかなか掴ませない、らしい。

正良様の後見についている柴田。柴田にとって、宗平様は目の上のタンコブのはずだ。その柴田が、敵ともいえるところにわざわざ娘を嫁に出したのはなぜなのか。

服従の意味ではないだろう。

守り袋の中の白い粉と、宗平様の妻である発。

この粉は九割方向かしらの毒と見て間違いないと思う。いつどのようにして発が若殿に飲ませるのかはわからないけど、妻だもの、隙ぐらいきつとたくさんあるはず。

問題は、あたしが今これを握っているってことなのよ。

そのまま素直に渡せば、いずれ若殿は殺されてしまう。だからと言って渡さなければ、その場で発に見咎められるだろうし、ヘタをすればお手討ものだ。疑われたら困ると思つて、懐刀かいたうなんて持つてきてないもの。持つてたとしても大刀にはリーチ的に敵わないし、それを補う速さなんてないし。

もし、今。あたしがこの粉を持って天地城に駆け込んだとする。でも当然柴田はしらばっくれるわよね。「この女は頭がおかしいのでしよう」とかつて。あたしは孤児こいってことになつてるし、柴田家に来たのも誰にも言つてない。もみ消されて終わり。

それじゃあ意味がないわ。若殿に「発があなたのお命を狙つています」って言つたつて、確たる証拠もないし、若殿があたしを信じてくれるかもわからない。侮辱された、つて柴田家が前田に戦を仕掛けてくるかもしれない。

……どろどろ。

とりあえず、この粉をどうにかしなきゃ。中身を入れ替えるとか……
ああでもなにもかわりになるもの持ってないわ！

突然、ガタンと輿が揺れて、止まった。

あたしはさっと青くなった。…ついたんだ。まずい！

「侍女殿、つきましたぜ」

へへへ、と下品な笑い声と共に簾すだれが上がる。

「あ、あの、私、ちょっと酔ってしまいましたの。申し訳ありませんが、すこし、待っていただけられないでしょうか」

「いやあ、それはいけないですけど、侍女殿。休むにしても、渡すもん渡してからでなけりゃあ」

そういつて、男はあたしの腕を掴むと、無理矢理輿の外に引きずり出した。

地面にひざをついたあたしを、これまたガラの悪そうな男が数人で取り囲む。

「侍女殿。こちらですぞ」

…逃げられない。

もう、行くしかない。あたしは腹をくくって、発のところまで、いった。

いつになく不機嫌そうな発に口上を述べる前に「袋は」と聞かれて、あたしはとまどった。

渡そつか、渡すまいか。

けれど縁には、あたしを引き連れてきた男がいる。中の様子を伺っている。だめだ。きつと今渡さなければ、あたしの身が危ない。

重ねて問われて、あたしは懐ふくから守り袋を出した。

発の手に、それを乗せた。

ああ…。

「連れて行け」

発があたしを指差す。

は？と思ううちに、あたしはいつの間にか後ろから、羽交い絞めにされていた。

発がいた部屋から、出される。そのままずると引きずっていかれる。抵抗もしてみたが全く焼け石に水だ。

何！？あたしこれから、何処に連れて行かれるのよーっ！

まさかとは思っけど、このまま、殺されちゃったりとか、はは……。

……………。

ヤダー……っ！まだ死にたくない……っ！

「離しなさいよっ、このおっ！」

あたしはおもいつきし男の腕に噛み付いてやった。

あんぎゃああ、と男は情けない悲鳴を上げる。あたしはその隙に逃げ出した。

結局こうなるんだったら、迷わずあの袋捨てておけばよかったわよ！

129

屋敷の、かなり奥まで連れて来られたらしい。とにかく走る。

男がついてきたかと後ろをちらりと見て、あたしはすぐさま見たことを後悔した。

きらりと光るものが一瞬、見えた。それは間違いなく、刀。

「ジュンのアママあー！」

ブン、と腕を振る音が聞こえた。あたしは咄嗟に頭を下げた。すれすれのところを、刀が滑る。髪がごっそりと切れて散った。

な、っ…なんなのよ、もう！

震える体を叱咤して走る。

ブウン、ブンと音が鳴る。男がどうやら、手当たり次第に刀を振っているらしい。あたしはそれを我武者羅がむしゃらによける。髪が切れ、肌が裂けた。腕が悪いくせに刀の切れ味がいいってどういうこと!？

やだ…！死んじゃうのかも…。

気がつけば、もうすぐ正門だった。運がいいことに、開いている。

急ごうとして、あたしの足が纏れた。しまったと思ったときにはもう遅い。あたしは走っている勢いのまま、大きく転倒していた。頬を地面でする。痛みはあんまり感じなかった。早く逃げなきゃと思うほど焦って、足が動かない。

不意に、髪の毛を鷲掴みにされた。頭の皮が剥ぎ取られるんじゃないかといづくらい強く引かれて、仰向けにされる。

あんまり痛くて、涙が滲む。

「手間、かけさせやがって…。死んだら、可愛がってやるからなあ」

視界の端で凶暴な光が滲んだ。それは果たして男のきらきらとした目か、刀か。

あたしは思わず目を瞑った。もう、だめ…。

「……っいさんっ!!」

いきなり髪を掴む手が外れた。いや、手は外れなかった。手が、男の体から、外れた。

ぶらん、とあたしの髪に下がっている、手。

「……………っ!!」

喉の奥で凍って、悲鳴さえ出やしない。

男は情けなく絶叫しながら、無様にのた打ち回っている。

「しゅん。髪、切るよ」

誰かがそういつて、頭が軽くなった。あたしはかくんと前にのめる。

た、助かった、の…？

いやでもまだわからない。

でも気がぬけて、そのまま地面に倒れこみそうになった。それを、誰かが支えてくれた。

きつと、あたしを助けてくれた人だ。でも、助けたんじゃないかもしれない。これからまた、何処かへ連れて行く気かもしれない。この屋敷で、味方がいるなんて信じられなかった。

「立って。歩ける？とりあえず、こっちにきて。ここじゃまずいから」

ほぼ抱えられるようにして、あたしは歩いた。

「あたしをどうするつもりよ……」

さっき死にかけたからか、声に覇気がなかったが、そんなことにはかまっていられない。どうせ死ぬんなら、何もかもをはっきりさせてから死にたい。

人がいなさそうなところまで歩かされた。

……。人気のない場所。

「……あたしなんて抱いてもしょうがないわよ」

「溜螺蔚さん、僕だ」

「……!?!?」

一瞬間が空いて、あたしは慌てて男を見上げた。

「嘘、高杉っ…!？」

どうして声で気づかなかったんだろう。でも高杉がまさかいるわけはないと思っていたから…。

高杉は今まで見たことがないような怖い顔であたしを見ていた。

「な、なんでこんなところに…。ゆ、夢かしら」

「出来るなら夢であって欲しいね。僕こそ、何で瑠螺蔚さんがこんなところにいるのか聞かせて欲しいくらいだ。一体何があって、あんなことに、いや、とりあえずちよつと待ってて」

高杉が離れようとしたから、あたしは咄嗟に高杉の腕を掴んだ。

「い、いや！高杉っ、離れないで！」

またいつあんな目にあつかもわからない。さっきの逃亡劇でもう肉体的にも精神的にもぼろぼろだ。

「……。わかった。一緒に行こう」

高杉は、あたしの全身をざっと見て、眉をしかめた。それから、あたしの肩を抱く。

「輿には先に行ってもらったけど、きっと冒人^{まさと}たちは待ってる」

何の話かわからなかったけれど、とりあえずあたしは頷いた。

「後でゆっくり話してもらおうけど、僕は瑠螺蔚さんが軽い旅に出て

いるって俊成殿としなりから聞いてたんだ。本当に心配だったけれど、すぐ帰ってくるって聞いていたし、旅は一人でないと聞いた。なのになぜか柴田どのの家にいて、あんな…。これは俊成殿も一枚噛んでいると思っていいの？」

高杉が感情の籠らない声で淡々と責める。

「…兄上は関係ないわ」

「…ふうん」

高杉の手に籠る力が心なしか強くなった。

「あんたは、どうしてこんなところにいるの？」

「いや…若殿、って言っても瑠螺蔚さんは知らないだろうけど、柴田家の側室が今日天地城で若殿と朝餉をお食べになるんだ。時間的にはちよっと遅いけど。僕はその警護できたんだよ。…瑠螺蔚さん

「？」

「た、高彬。あんた、さっき、輿がどうか、っていったわね…」

「輿？送っていこうとした矢先に瑠螺蔚さんが切られそうになっているのが見えて、とりあえず僕以外の人は皆先に行かせて…瑠螺蔚さん？大丈夫？くちびる真っ青だよ。僕がそばにいる限り、もうあんな目にはあわせないから…」

「あんた、乗ってきたのは馬！？」

「え！？うん」

「いい、あたしが今から言っことを信じてね！」

あたしは言う時間ももどかしく、高彬の腕を引っ張って走り出した。

「馬は何処!？」

「しっちだ」

高杉も徒事ただごとではないと察したのが、顔が真剣になる。

「その側室は発たけというのよね!？」

「しっているのか、瑠螺蔚さん」

「発は若殿を殺そうとしているのよ!？」

「!？」

「毒よ。多分酒にでも混ぜて飲ませるんだと思うわ。だからあなた

は早く行ってそのことを知らせて!」

「わかった!」

馬のいるところに行き着くと、高杉はすぐに飛び乗った。あたしに手をさしだす。

「瑠螺蔚さん!」

「早く行って!あたしはいいわ」

高杉は周りを見渡して舌打ちする。

「だめだ!昌人たちがいない!残してはいけない!」

「行くのよ!あたしは大丈夫」

そういつた途端、ぞろり、と正門から手に刀を持った男が出てくるのが見えた。

高彬もそれに気づく。

「早く！溜螺蔚さん！」

「だめ！行って、早く！高彬っ！」

高彬が、あたしの手を捕らえた。そのまま強く引かれて、馬の上に引っ張りあげられる。

「僕に、掴まっつて」

「駄目よ、下ろして！二人じゃ遅いわ、間に合わなくなってしまう」

「それでも！」

高彬が声を荒げた。

「それでも瑠螺蔚さんをここに残していくことはできないよ！」

あたしは息を呑んだ。

「あんた、自分で何いつてんのかわかってんの」

若殿の命よりも、あたしの命の方が大事だと言ってしまったているも同じなのだ。

「バカじゃないの！」

高杉は唇を噛む。

「若殿は大勢の方に守られていらっしやる。きつとご無事であらせられるはずだ。でも、瑠螺蔚さんは違う」

「ご無事のはずないじゃないの！外からむさい男が刀持って乗り込んでくるのはワケが違うのよ!？」

まさか、妻が毒を盛るとは思っていないだろう。

「毒味もいる」

「あんたもわかっているはずよ。毒なんて、毒味の後にいれればどつとでもなるのよ!」

「若殿はこの命に代えてもお守りするつもりだ!…けど、僕は瑠螺

蔚さんも大事なんだ！ここに残していったら殺されることがわかっているのに、どうして残していけるものか！」

毒の粉4（後書き）

輿：よく江戸時代のドラマで將軍様が乗っているもの。

守り袋：お守り。

懐刀：小刀。懐に忍ばせる護身用。

毒の粉5

「何奴、止まれ！」

「いや待て！あれは佐々の…高彬たかあきら殿だ」

「そんなこと言われて止まる奴いないっての」

ばらばらと出てくるおっさんたちを尻目にあたしはぺろりと舌を出した。

146

「捕えろ！」

一人ひとりに説明している時間なんてあるわけなく、天地城に明るい高彬を盾にして若殿がいるところへ強行突破している。

いつもはなよっとしている高彬も、さすが自らの仕える若殿の一大

事ともなれば顔つきから違つ。

「火急の時！道をあけられよ！」

一喝で戸惑っているおっさん達を竦ませる。

走つて、蹴散らして、走つて、飛び込んだ先の部屋。開いた襖の先の上座に、驚きで強張つた顔の発と若君がいた。

ああよかつたまだ無事だ……。あたしはほつと息をついた。

若君は中腰で、腰の刀に手をかけている。

横には転がつた杯と、発の手には提子がある。

発がぼろぼろのあたしを見留めた途端、それとわかるほどに青くな

った。震えた唇のまま、ヒステリックに叫ぶ。

「だっ、誰か！あれを、あれを殺してっ！いますぐに！」

殺してと。まあ、さつき屋敷で死人に口無しと殺したはずの『石』
がこうして若殿との朝餉あさけの場に現れたんじゃそりゃあ驚くわよね。
でも、そんなこといきなり喚き散らしたら自ら疑ってくれと言っ
ているようなものよ。

あたしは構わずかずかと上座に歩み寄った。

「無礼な！切って捨ててくれるわ！」

「よせ！手を出すな！私の知人である！」

突然の侵入者に、周りが騒然となって、誰何の声と、刀を抜く音が響いたその時、そう若殿が叫んだ。

あたしは目を見張った。

えっ、鷹男！？なんで！？

前に会った時よりだいぶ上等な衣を纏って、流していた髪もきつちりと結び上げてはいたけれど、目の前の『若殿』の座るべき上座に座っている人、それは間違いなく以前天地城で会った鷹男だった。鷹男も驚いてあたしを見ている。

あたしははっと気がついた。もしかして、鷹男は若殿の身代わり？

「はやくっ、はやく殺して！はやく誰か！」

みな刀は下げないものの、斬りかかってくる者もない。あたしはそのまますつと発の目の前に立った。

「なぜ…おまえここに…死んだ、筈では…」

発の震える唇から、呻くような声が漏れる。

「お生憎さま。こつして生きてるわよ」

高杉がいなかったら死ぬところだったけど。

あたしは発に固く握られている提子に目を落とした。

その視線を追った発が震えあがった。

「柴田殿!?!」

「このおおおおおおおお…」

切羽詰まった声がしたと思ったら、振り返りざま背中を誰かから鷲掴みにされて体が傾いた。

一瞬の後に、あたしは鷹男の胸に抱えられていた。

「私は」

鷹男の声が低く響いた。

「手を出すなと言ったはずだが」

刀を喉に宛がわれた男は冷や汗を垂らして頷いた。

「連れて行け」

侍従の一人が男を取り押さえて、どこかへと連れていく。

「鷹男…」

「姫。これはいったい、どういふことが説明していただけますね」

あたしははっと気がついた。

「あなたが、探ってた事って、このことなの？」

「どのことですか」

あたしがいいたいことぐらいわかっていいるだろうに、鷹男はあたしの傷だらけの顔を見て痛々しげに顔を顰めた。

「こんな…」

「あたしのことなんて今はどうでもいいのよ！鷹男、あんたわかってんの！？殺されるところだったのよ！」

鷹男が息をのみ、一気に場の空気が凍った。

鷹男が発をみた。発はかたかたと血の気を無くして震えている。

鷹男につられて、皆の視線が発に集まった。

「ち、ちが、違います！私ではありません！私ではっ！」

「で、あろうな」

意外な鷹男の言葉にあたしは目をむく。

何言ってるのよ！発のバツレバレの態度からしてもその提子のなかの酒だか白湯だかに毒が入れられてるのは明白じゃないの！しかもあの態度からして無関係なんてのは絶対にありえない。

「宗平様！」

発が我が意を得たりとばかりに声を上げる。

「と、当然です。私の訳がありません。私は宗平様の室です。ねえ宗平様、はやくそのわけのわからないことをわめく小汚い女を殺してくださいな」

「道重も娘を使つなど、心ないことをする」

「…え？」

突然自分の父の名が出てきて発は茫然とした。追い打ちをかけるように鷹男の声がかかる。

「連れて行け」

「は」

「な！？無礼ものつ触るでない！私は、私は柴田権六道重しばたごんろくみちしげが娘、発であるぞ！無礼ものつ！宗平様つ私をお疑いになるのですか！その女の言うことを信じると！」

「そうだ発。そなたは最後まで柴田権六道重が娘でしかなかった。私の妻ではなく」

「そん、な」

発の目から涙があふれる。瞳が絶望に染まる。

その瞳が未だ鷹男に片手で抱かれたあたしをとらえた途端、燃え上がるようにつりあがった。

「石っ！おまえ、こんなことをして、ただで済むとは思っていないだろうね！絶対にお父様に言っただけで殺してやる！身分もない孤児のくせにこんなところまでおめおめと乗り込んできて、拾ってやった恩を忘れたかっ」

口封じに罪なすりつけて殺そうとしいてよく言っわ！

「孤児…？」

鷹男が不思議そうにあたしを見た。

孤児、ですって？身分のない？

あたしはふつと笑うと鷹男の胸を押しやって両腕を押さえられている発に向き直った。

「私の真名は前田まえだ一太忠宗が娘、瑠螺蔚るらい。」

その場がしん…とした。

発の瞳はこれ以上ないくらいに大きく見開かれている。

前田家、と震える唇が声なく紡いだ。

「若殿の命により常日頃不審な動きしていた柴田家に密偵として入り込んだまで。うまく事が運び、貴方方がこうして無実の者に罪を被せて殺そうとするような義も忠もないものだということは私の恰好を見ていただければ誰の目にも一目瞭然のはず。」

あたしは自分の血のにじみボロボロになった衣を指した。

「そ、んな、なぜ…姫自ら」

「ただ私が天に背くものを見過ごせなかっただけのこと。発姫。魂の半身とも言うべき夫を弑^{しい}そうとした行いを自らの身を以^もって悔いるがいい！」

発の顔がゆがんだ。一気に瞳が憎しみで染まり、火事場の馬鹿力とでもいうのか、大の男に掴まれた腕を振り払ってあたしに向かって一直線に走ってきた。

「ああああああああっ！」

すっとあたしと発の間に高杉が割り込み、その手を取って捻りあげた。捻られた発の手には、短刀が握られていた。

きらきらと光る瞳は高杉に腕を掴まれても、あたしから離れない。

「連れて行け！」

鷹男が鋭く叫ぶと、高彬を初めとする侍従が、発を取り巻いて、連行していった。

ついでとばかりに手を振ると2人ほどの武を残して皆さがっていった。

「鷹男」

「…姫」

あたしがくるりと鷹男を振り返ると、彼は打って変わった低い声で唸った。

「これは、一体どういうことですか。私は、前田の瑠螺蔚姫にこん

なに危険な命を授けた覚えはありませんよ」

「え、えと…あの後また、権六たちの話を聞いちゃって、それでこれは怪しいと思つて、柴田家に孤児だ、雇つてくれっていつて、乗り込んだのよ。そしたら何か、発が毒持つて天地に乗り込んだつて聞いたからさ、若殿助けなきゃつて、必死で馬乗りつぶしてきたのよ。そしたら、あんたが若殿の身代わりやつてるし、あたしあんま意味なかつたかな、つて。でもあのままだとあんたがあれを飲んでたことになるから、来てよかつたわよね。悪者もみんな捕まつてこれで一件落着！ね？あはは、は、はは…」

「姫。先ほど口封じに殺されそうになつたとおっしゃいましたね」

「いや、でも実際あたしこうしてぴんぴんしてるし。殺されかけたつて言つてもそんな大したことには…」

「そういう問題ではないのです！」

鷹男があまりにも怖い顔で詰め寄ってくるから、あたしがごによごによとごまかしたら、いきなり鷹男に一喝された。

「どうしてそんな危ないことをなさるのですか！私はあなたに忘れてくださいといったはずです！何故約束を守られないのですか！何故たった一人でそんな危ないことを！」

「だ、大丈夫だって！殺されかけた、って言ってもそんな大したことなかったんだってば！ホントよ！」

鷹男はあたしの頬に手を当てた。

「大した事ない傷には到底見えませんね。女なのに顔にこんなに傷をつけて…どうするつもりですか」

ふ、っと鷹男の瞳に色っぱい光が宿って、あたしはどきっとした。

指先がゆっくりとあたしの頬の傷をなぞる。

「べ、べつにそんな、こんなあたしを嫁に貰おうなんていう度胸がある男なんていないから、別にいいのよ、別に。こんなのへいちや
らよ」

つい、そうしどろもどろに答える。

「そんなことを言うてはなりませんよ、姫。私にとっても姫は十分魅力的です……」

「わーっ！ちよ、鷹男！今はそんな話じゃないでしょ！？」

気がついたら、顔と顔の距離が今にも接吻せつぶんできるような距離になっていた。しかも、鷹男の指はあたしの唇に触れていて、いとおしむ様にそつとなぜている。

あたしは慌てて飛び離れた。

「それでは、この話はまた今度ですね」

鷹男は残念そうに言う。

二人つきり、ってワケじゃないのに何考えてるのかしらね、この人は。いえね、別に二人つきりだったらいいかさそういうことを言ってるわけじゃないけど。もしかして、ほんとの若殿がそういう女つたらしな性格で、鷹男はそれを真似ているのかしら。

あたしはちらりと周りを見た。家臣たちは、苦笑いであたしと鷹男を見守っている。またか、という雰囲気だ。

あ、やっぱりそうなのか…。

「鷹男、それより本物の若殿は？あたし、その人に話があるんだけど」

あたしはこそこそと鷹男の耳に唇を寄せていった。

「…本物の、若殿？」

「え？」

違うの？え、身代わりじゃないの？……て、ことは…。

あたしは、思わずまじまじと鷹男を見てしまった。

「織田、三郎宗平様…？」

肯定のかわりに、鷹男のくちびるにうつすらと笑みが浮かぶ。

う、嘘…。

「織田平脈が三男、織田三郎宗平です。前田の瑠螺蔚姫、私に用とは何でしょう」

「…さつき、あんた、いえ、貴方に言ったことと同じことをお伝えしようと思っただけです」

あたしはふいと横を向いた。

「お騒がせしてしまい申し訳ありません。今までの御無礼を深くお詫び申し上げます…帰ります」

「怒ったのですか、姫」

「いいえ」

「声が怒っていますよ」

「いいえ」

あたしは鷹男に一礼した。

「御前、失礼いたします」

「待つてください姫。怪我をしておられる。手当てをさせましょう」

「ご命令ならば従いましょう、宗平様。私に拒否する権利はございません」

「いいえ。貴女に命令はしたくない」

「ならば従えません。では」

「姫！」

あたしはさっさと縁まで出た。その腕を、掴まれる。

「姫、何を怒っておられるのですか。私が『若殿』だと黙っていたからですか」

「いいえ。私が貴方様に対して何を怒ることがありましようか。畏おそれ多い事でございます」

「敬語はやめてください」

「それはできかねます。申し訳ありませんが、ご理解いただけます
「おしゆ」

「なぜですか」

「貴方が若殿で、私はその臣下だからです。ご存知であらせられましょう?」

「…」

鷹男が黙った。ちょっと悪い気がして、あたしは鷹男をちらりと見た。

でも、若殿だつてことを黙ってたなんて、酷い。

鷹男に騙されてたという事実には、あたしの純粋な心はキズものよ!

「では、臣下でなければ対等に話してくださるのですね」

「…?」

「私の妻になれば、対等に話してくださるのですね」

「若殿！意味がわかりかねます！」

あたしは思ってもみない言葉にぎよっとして悲鳴のように叫んだ。

ちよつとぐらい思い知ればいいなんて気持ちはずつとんで思わずまわりを見渡せば、あたしよりも眼ん玉が飛び出しそうなくらい驚いている、家臣。

あたりまえだ。それなりの影響力を持つ前田家のたった一人の姫を主家である織田家の嫡男が本当に妻取るだなんてことになったら…！

今の世は政略結婚が当たり前。家同士の関係が重んじられ、仲の悪い家に姫を嫁がせて絆の補修または強化をするというのが普通。服従の意や人質のかわりに姫を差し出すってこともあるんだけど。

だから織田と前田が仲が悪ければそれも領けるけれども、関係は良好で別にあたしが嫁いで関係改善だとか、はたまた人質になんてなる必要なんてなし。兄上も父上も造反の意はこれっぽっちもないし。織田家も前田家を信頼してくれてるし。

正直今あたしが織田家に嫁いでもなーんの利益もないのだ前田家にとつて。

それなのに妻取るうとするのは、ただ主家であるということにふんぞり返った横暴でしかない。勿論、本当に織田家がそれを望んでしまえば家臣である前田家に否イヤはないんだけどね…。

「わかりませんか？」

「……………」

鷹男はじつとあたしの目を見た。

「姫」

追いつちのように優しく声がかかる。

このっ…！ワガママ鷹男め…！

と怒っても結局あたしが折れるしかないのだ。周りのおじさんたちの胃が裂けないうちに。

あたしはふうとため息をついた。

「…強情を張ったことは謝ります。ですが宗平様も酷いです。どうしておっしゃってくださらなかったのですか！」

「申し訳ありません、姫。決して騙していたとかそういうことではないのです」

「…謝らないでください。若殿に頭を下げさせたなんてことが父上に知られれば私はまた説教を受けなければならなくなります」

「では許してくださいますか」

「許すも許さないもありませんよ」

「それは許していただけると受け取ってよろしいですか？とりあえず部屋に入りましょう。怪我の手当てをさせてください。その怪我は私のせいです。…髪も、ざんばらになってしまいましたね…」

そう言って、鷹男はあたしの髪を一筋、掬って、くちづけた。

「おやめください宗平様！」

「鷹男、です姫。姫にはそう呼んでいただきたい」

「ですが、っ」

もう一度、鷹男があたしの髪にくちづけようとする気配がしたので、あたしは叫んだ。

「わ、わかりました！わかりました！」

「それと、敬語もなしですよ」

「わかりました、ですからそのようにして私を困らせようとするのをやめてくださいっ！」

「『わかりました』？」

「わかった！から、やめて、鷹男！」

わかったって言ったのに、鷹男はふつと笑ってさつと髪にくちづけ
た。

「愛い姫ですね」

瞳をあわせてカッコいい色男に微笑まればこのあたしもいつもの
ようにがなりたてることもできない。

「そのままの格好では、前田家に帰るにも帰れないでしょう。衣も
差し上げましょう。忠宗と俊成としなりに心配をかけたくないのでしたら、
どうぞお入りになられてください」

あたしは、改めて自分の格好を見て、頷いた。

「兄上——っ！」

「瑠螺蔚っ!？」

振り返った兄上の胸に飛び込む。

「ただいま、兄上」

「おかえり瑠螺蔚…。一体いままどこにっっ!この傷は?髪は!

「？」

「あ、そんなにわかるかな？えーと、ちょっと木から落ちちゃって……」

我ながら苦しい言い訳だな……。

当然納得するわけない兄上のお説教をうけながら靈力で傷を治して貰っている中ふと、視線をずらしたあたしの目に、一人の男が目に入った。

片膝について静かに座っている。

……………誰？

「癈六郎じゅうろくろう」

「は」

兄上の声に、男が応える。

「瑠螺蔚が帰ってきたと父上に伝えてくれ。」

「は」

男は空気も動かさずあっという間に去っていく。

「兄上。あの人、誰？」

「父上が新しく雇った男だよ。無愛想で無口だが仕事はできる男だ」

「ふうん…」

毒の粉6

「あー！」

あたしはそう無駄に叫んで衾ひすまの上を仰向けに転がった。乱れた合わせをなおしながら、ふうと息をつく。

今日は大変な日だった…。

傷は兄上が不振がられない程度に治してくれたから、きっと痕は残らないだろう。

ただ、髪はそのままだ。不揃いなところは兄上が小刀で綺麗に切ってくれた。見た目は前と比べてそんなにはつきり変わったわけじゃないけれど、やっぱり、なんか寂しい。外見が普通といわれるあなたにとって、髪が綺麗なのは結構な自慢だったんだけどな。

まあ、命あつてのモノダネだから、髪で済んでよかった、って思うべきなのかもしれないけど。

ふと、ぎらりと光る刃を思い出して、あたしはすつと体が冷たくな
った。

本当に、今から考えても、よく、助かった、わよね…。

相手は確実にあたしを殺すつもりだったろう。

やっぱり、高彬たかみぎが兄上あたりに稽古つけてもらおうかなあ。戦の世
であればいつまたあんなことが起きるかもしれない。

「……………」

あたしはむくりと起き上った。

そういえば、兄上は靈力ちからであたしを治してくれたけれども、人を癒おち

させることは、肉体的に酷く疲れてしまうのだと昔言っていた。この世の理ことわりに反するものだから。最近はそのような派手な怪我をすることもなかったから治してもらおうような機会もなかったし、さっきの兄上は治し終っても別段普通にしていたから、今まで気にしてなかったけど…。

もしかして、無理してたんじゃない…。

兄上の霊力のことは姉上様も知らないという。心の優しい兄上だったらあたしを気遣って平気なふりするぐらいやるだろうし、そしたらきつと誰も気づかないじゃない！ああもうあたしの馬鹿！なんでこんな大事なことを忘れてたの！

考えれば考えるほど不安になってきて、あたしは足早に自分の室を出た。

焦りから、兄上の室に向かう足は段々はやくなる。

けれど、半分ぐらいまで来たところで、あたしはゆっくりと足を止めた。

気軽に遊びに行っていた昔とは、もう、違う。兄上は結婚して、姉上様と同じ室にいるはずだ。

そんなところに、こんな夜に、いきなりあたしが行っていいわけがない。

そもそも、本当に体調が悪くなっていけば、兄上がいくら隠したとしても誰かしらが気づいてしまうだろう。今あたしが騒ぎ立てるまでもなく。

立ち止まってしまえば足の裏に縁の冷たさがじんと凍^しみた。静かに冷えた秋の夜の空気は指先から温もりを奪っていく。

…戻ろう。

そう思ってあたしが踵を返そうとしたその時、ひゅうと空っ風が吹いた。

「寒、」

反射的に両肩を抱いて体を縮めたあたしは、そのまま声を失った。

あたしから十足あまりの近さに、兄上が、いた。月を見あげていた。

時すら凍ったように思えた。

それほどその光景は美しく、儂かった。

兄上には、姉上様のほかに、好きな人がいる…。

その瞬間にあたしは悟った。

姉上様から聞いたときは、絶対にそんなことないと思ったけれど、今はそれを疑う方が愚かに思えてくる。

月を見上げる兄上の瞳は、狂おしいまでに強く何かを乞^こうていた。手の届くことがない月に恋してでもいるように。

それが姉上様ではないことも、なぜか、わかった。

だってあの目はきっと手に入らないものを求めている。絶対に手に入らないとわかつているのに、それでも諦められない、そんな恋があるの？

あたしは知らない。そんな恋、したことない。

目頭が震えた。冷えた頬に涙は熱く溢れた。

悲しい。なんでだろう、ただ、ただ悲しい。

兄上と姉上様が相思相愛じゃないってわかってしまったのが悲しいのか、兄上がそんなあたしの知らないような切ない気持を抱いていたのが寂しいのか、そのどれもが違うのか、涙はあとからあとから零れた。

例え、兄上がいくらその人の事が好きでも、決して添い遂げることはいできないだろう。

兄上の正室は姉上様だ。それはもう変わることはない事実なのだ。

兄上は優しいから、たとえこれだけ好きな人がいても、姉上様をけつしてぞんざいに扱ったりはしないだろう。

でも、きっとそれが姉上様にはお辛いんだ…。

兄上の視線が、はっと月からあたしに向けられた。思わずのように声なきその唇が誰かの名前をかたちどる。

何かに貫かれたかのようにあたしの心臓がどくと大きく跳ねた。

その一瞬、まるで兄上が求め恋^こうているのが世界中でたった一人、
ここにいるあたしだけでしかないかのように、その瞳は誤^{あや}違^{また}わらずあ
たしを射ていた。

妹のあたしですらどきりとするのに、兄上にこんなに求められたら、
どんな姫だつてきつと一目で恋に落ちるだろう、と思つのに…。

また涙が溢れてきて、あたしは小さい童^わのようにしゃくりあげた。

「瑠^る螺^そ蔚^い？」

兄上が足早に向かってきた。

それはもう、あたしのよく知る、いつもの兄上の顔だった。

「どうしたんだい。何か怖い夢でもみたの？それともまさか昼間の傷が痛む？顔を見せて。瑠螺蔚。泣かないで…」

そっと優しく仰向かされる。

心配そうに眉を寄せた兄上があたしを覗き込んでいる。

母上に似た、高い鼻、長い睫、儂げな眼差し、さらさらの髪にすべての肌。いつもいつも女なのになわなくなっと思っぐくらいに整っている面差し。優しくて、綺麗で完璧な兄上なのに、なんでこんな悲しい恋をしなきゃならないんだろっ。

「マホって子が好きなの？」

兄上は今まで見たことがないくらいに驚いて、大きく目を見開いた

あたしは構わず言い募った。

「姉上様よりも？どうして？姉上様は、兄上のことが本当にお好きだわ。一緒にいて、あんなに楽しそうに笑っていたじゃない。お優しい姉上様よりも、そのマホって子の方が好き」

最後まで言えなかった。いきなり、あたしは強く抱きしめられた。

「愛している」

耳元で兄上が言った。感情を抑えようとして、抑えきれずに零れたような声だった。

かっ頬に熱が集まる。思わず胸を押し返そうとしたけれど、ふと思った。

あたしをマホって人と重ねているんだろうか…。

「この世のすべてよりも大事だ。他の何にも代えられない位」

あたしの耳の上ぐらいに兄上の唇がそつと触れる。

優しく、愛おしく、その言葉が真まことだと証明でもするかのように…。

「溜螺蔚、体が冷えているよ。戻りなさい。夜風は体に毒だ」

またその一瞬の後には兄の顔に戻ってしまふ。

あたしの髪を優しくなでて、ふわりと微笑む兄上。

そんな兄上しか知らなかった。あんなに何かを求める兄上なんて見たことがなかった。

「どこの姫なの？」

「ん？」

「マホって、どこの人なの」

もうこの話を終わらせたのだろう兄上は困った顔をする。

そりゃあそうよね。妹に自分の恋話したい兄なんていないわよね。

でも聞きたい。

それで、できるなら叶えてあげたい。

「瑠螺蔚…」

「教えて、兄上」

「サホ、…かな。サホの巫女姫だったかな。もう忘れたよ」

だった…、もしかして、もう、その人は…。

サホなんて聞いたこともないけれど、巫女姫ってことは一生神に身を捧げ、夫を持つ事はそもそも許されない姫だ。

あたしは言葉に詰まった。

どのみち、実ることのない恋…。

「さあもついいだろう？送ってあげるから戻りなさい」

兄上に促されるまま、あたしは気の利く言葉の一つも言えずに室まで送り返された。

「兄上…」

勢いをなくしたあたしがぽそつと言つ。

「ん？」

「そんなに人を好きになるって、どういふことなの？」

兄上はふと笑ってあたしの額に優しくくちびるを押しあてた。

ひやりと名残が残るのはあたしの顔が熱いせいか。

「こつこつことだよ」

「やだ兄上、ふざけないでよ！」

「ゆっくりおやすみ、瑠螺蔚」

「ばか！もう」

笑いながら兄上は戻っていった。

こつこつことしてるから、たまにあたしが奥さんに間違えられるんだってば！

怒ったふりをしながら、あたしは兄上の背中と月を見送った。

兄上は、月を見上げて何を思っていたのかな。

マホって巫女姫は、もうこの世にはいないのだろうか。

兄上を愛している姉上様の気持ちはどうなるんだろう…。

どうか、お月さま。あたしからもお願いします。

あんなに悲しい恋をする人がもう出ませんように。

兄上を、姉上様を、どうか幸せになれるように見守っていてあげてください。

毒の粉7

真秀^{まほ}は両手で顔を覆った。その場に膝をついて咽び泣いた。
「佐保彦^{さほひこ}が好きだった。今でも好きよ。でも、真澄^{ますみ}と佐保を出て、二人きりで生きるつもりだった。真澄がいれば、幸せだった。真澄も好きなのよ。それだけじゃ、駄目だったの…？」

この世で一番大切な兄だった。

この世で一番大切な妹だった。

だから、佐保を出ようと思ったのに。

だから、佐保に残って欲しいと思ったのに。

このままじゃ、いけなかったの？

このままじゃ、いけなかったんだ。

あたしは、生きて欲しかった。

僕は、死にたかった。

僕は、死にたかったんだ、真秀。

だから、これでよかったんだ。

望むものと得るものは違う。

あたしは多くを望まなかった。あたしと、御影みかげと、真澄と、三人で寄り添って暮らしていけたら、それでよかったのに。擦り切れたような衣一枚を纏って、身を切るような夜に凍えても、隣にふたりがいればそれは幸せだった。それがあたしのたった一つの願いだったのに。

これは、あたしへの罰なのだろうか。

佐保彦に逢ってしまった。佐保彦を望んでしまった。御影よりも、真澄よりも、佐保彦を。

だから、こうして二人とも失ってしまったのだろうか。

こうして、真澄をこの手で殺さなければいけなかったのだろうか。

こんな惨い運命がある筈がない！

あたしたちは違う運命を持つはずだった。

別々の領土くで生まれ、邂逅めくい、恋をして、幸せになるはずの運命が、どこかで歪たんでしまったのだ。どこかで、あたしたちの運命は枉まげられ、矯ためられてしまったのだ。

毒の粉7（後書き）

文章引用：氷室冴子著『銀の海金の大地』

毒の粉 8

あたしは一気に飛び起きた。

朝。夜明けに近いけれどまだ薄暗く、肌寒い。

あたしは体中にじっとりと汗をかき、がたがたと震えていた。跳ねのけた衾ふすまの色が白くなるほど握りしめる手すら細かく揺れている。

今、夢を見ていた。何の夢かは分からない。けれど、夢を見ていた。

強く、心に残る絶望。そして、体に収まりきらないほどの悲しみ。

「っ……」

ずきりずきりと頭が痛む。

夢の内容を思い出そうとすればするほど、遠ざかる。考えてるその間に記憶がこぼれていく。

残っているのは身を焦がすほどの感情だけ。

夢、ゆめ。泣いている。誰が？

炎が舞っている。何もかもを燃えつくそうと、炎が踊る。

頭痛い。

「うっ、あ、うっ…」

いかなきゃ。どーしよ？

待って、どうして…。

考えがまとまらない。

暗闇の室の中、不意に音もなく光が射した。

光を辿って顔を向けると、開いた障子に手をかけ誰かが立ち尽くしていた。

足音も何もしなかった。あたしが気づいていなかったただけかもしれないけれど。

「…」

唇は開いたけれど、声を出す力が体になかった。あたしはなぜか、酷く疲れていた。

夢を追いすぎて、今のあたしの状況を考えるのが億劫おくくわうで、それが誰かとかなぜこんな時間にあたしの部屋に来たのかとか思うのもだるくて、ゆっくりと睫まばたを瞬かせた。

静かに滴が頬を伝う。

その時、初めて気がついた。ああ、あたし、泣いているんだ。

悲しい。何が悲しいんだろう。でもすごく、すごく、悲しい。

何か大事なものを無くしてしまったような。

夢のこと、なのに。

夢の中ではそれは確かに現実としてあたしの心に迫っていて。夢でよかったとも思えずあたしは静かに涙をこぼした。

「いかないで」

胸が締め付けられるように、夢に浮かれたままぼろりとあたしは言葉
葉を落とした。障子から目の前に伸びる人影の肩がびくつと揺れた。
ぼんやりとそれを見ていたあたしははつと我に返った。

「うそ。ごめんなんでもない」

慌てて言った。

けれど人影は、一瞬戸惑ってから、遠慮がちにそつと部屋に足を踏
み入れた。

一歩入ったところで立ち止まった。その、顔が見えた。

背の中ほどまでの髪を首の後ろで降ろしたまま一つに括り、肉の削げた頬と切れ長の瞳。以前見た時はむっつりと引き結ばれていただけだった唇が、今日は困惑するように薄く開いている。

それは、兄上が言っていた、最近うちに仕えるようになった発六郎という男だった。

「瑠螺蔚様……」

狼狽しながら、もう一步、褥じとふに近づいて、そっと片膝をついた。

あたしは震える手を隠そうと衾の下で握りしめた。

「どうか、なされたのですか？誰か人を呼んで」

「いい！……いいわ。大丈夫よ、大丈夫だから……」

あたしは涙を^ごごしと袖で^ごすった。夢の名残を振り切るように、強く。

それから発六郎に向けてもう平気と少し笑って見せた。

けれど、発六郎はなんともいえない苦い顔であたしを見ていた。

笑ったそばから、あたしの頬に拭ったはずの涙が流れた。

ひとつ流れると、あとはもう次から次へとぼろぼろと溢れた。

止めようとしても、止まらない。

ああもう。こんなんで大丈夫だって言っただって説得力なんかありません。
ない。

思わずうつむいた時、目先にすつと手布たのこしが差し出された。

発六郎がいつのまにかあたしの横にいて、少し顔を背けたまま無言でくたびれた手布を突き出しているのだった。

あたしはその不器用さにふっと笑った。

笑った拍子にまた涙が流れたけれども、その涙はもう冷たくなかった気がした。

「ありがとう」

「…いえ」

短く発六郎は答えた。

もう胸を締め付けるような涙はおさまっていた。発六郎のおかげだ。優しい人。とても。

「発六郎、ありがとう」

もう一度、心をこめて言った。

発六郎が虚をつかれたようにあたしを見た。

その、見開かれたふたつの瞳。長い前髪がかかっているせいでよく見えないのだけれど。

「…あれ？」

あたしは声をあげた。

ここまで近づかなければ気がつかなかった。

「あなた、瞳の色左右で微妙に違う？ほら、こっちのほうが色が薄く…」

あたしが腕を伸ばして前髪に触れるのと、発六郎が身を引くのは同時だった。

そのあまりに素早い身のこなしに、あたしは一瞬呆気にとられた。

「…御前、失礼いたします」

よじよじ発六郎はそう言って、逃げるように部屋を出ていった。

えっ、と…なに？

顔がコンプレックスとか？悪いことしちゃったかな…。

発六郎が出て言った障子、その隙間からひんやりとした心地よい風が入り込んでくる。

あたしは瞳を伏せた。

夢。

炎に巻かれて、あたしは…。

文の山 1

「まえだるらい前田瑠螺蔚。まえだきろくろつとしなり前田喜六郎俊成。面を上げよ」

あたしが頭を上げると、ざわめきが人の上を走る。

「おお・・・」

「すばらしい。むい蓄殿によく似ておられる」

「まさに生き写し」

「蓄殿は真に美しい女性であられた」

「気高く、聡明でもあった」

「蓄殿を娶られた忠宗殿はほんに幸せ者よのう」

「御歳は確か16。家の息子も19でお似合いではないか？」

「いやいや何を言う。ここはやはり、家の息子と」

そんなものを聞きながら、あたしは内心ケツ、ふざけんじやないわよと悪態をついていた。

そもそも老いぼれたくせに蓄殿、蓄殿、ってバカのひとつ覚えみたいに全く。からかうのもいい加減にして欲しい。

兄上ならまだしも、才色兼備といわれていた母上が、あたしと似つくわけないじゃんか。

美辞麗句ばっか並べ立てやがって。口だけのくせに。

勢い余ってふん、と鼻を鳴らしたら兄上に肘で小突かれた。

いけないいけない。今はあたしの活躍を若様直々にお誉めいただく、
つて言う、ありがた〜い席なんだったわ。誉めるのが鷹男たかおだから、
ありがたみも何もあつたもんじゃないけど。

「よつて柴田の領地は全て召し上げる。残りの沙汰さたは、後に。前田、
瑠螺蔚るるあ」

「はい」

「大儀であつた。誉めてつかわす」

「過分なお言葉、ありがたき幸せにございます」

たったこれだけのために、朝からおつもい正装してずっと待ってた

のよ。

ホント、あたし城仕えみたいな堅っ苦しいのってキライ。

つくづく、男じゃなくて良かったって思うわ。こんなのが毎日続くって考えたらノイローゼになるわよ！

全て終わってから、あたしは鷹男に個人的に呼び出されて、こっ

りお説教を食らった。兄上には、先に帰ってもらっている。

「いいですか、姫。もうあんな危ないことをしてはなりません。怪我ならまだしも、命を落としていたら一体どうなさるおつもりだったんですか」

「そのときはそのときよ」

「姫。わたしは冗談で言っているではありません」

「・・・わかったわ。もう二度とそんな危ないことしないから」

鷹男は溜息をついた。

「姫には口約束だけでは心もとないですね・・・」

「説教は高杉たかあきりと父上と兄上でお腹いっぱい。もう耳タ」

「その高杉に今日は姫を送らせます」

「え？いいわよ別に」

「姫」

「…わかったわよ。気をつければいいんでしょ、気をつければ」

「本当にわかっているくださるのならよろしいのですが…。高杉」

「は」

板戸の向こうから、声がした。

いつの間になっていたのか。

「姫を送ってさし上げる」

「は」

「若殿も言われていたけれど、本当にもう危ないことはしないでくれよ。僕があの時偶然いたからよかったけれど、そうでなければ…考えたくもないよ」

「わかってるって！悪いと思ってるし感謝もしてる。何度も聞かされたわよ、それ！」

あたしは耳を押さえていった。

高杉のほうを向いて話していたから、どん、と人にぶつかった。

「あ、申し訳ござ…」

「姫？」

げ。

見覚えのある顔。

「ちくまひ
亦怔……」

「私の名を、覚えていてくださいましたか、北殿。愛息子の高彬殿と、こちらへは何をしに？」

「やめてよ。もうわかってるんでしょ？」

亦怔は笑った。

「前田の、瑠螺蔚姫でしたとは。これからも、末永いお付き合いを期待していますよ」

あたしに伸ばされた手を、高彬がさりげなくよけさせた。

あら？

「お久しぶりです、亦証殿」

「これはこれは、高彬殿。貴殿はこんなところで一体何をしておられるのかな？退出するにはまだ早いと思うのだが」

…。

あたしは何か不穏な空気を感じて、そつと後ずさった。

ニコニコと無邪気に笑う高彬。

大人びた笑みを浮かべる亦証。

「ちよつと！高彬！」

あたしは高笑いしてる高彬の頭をぺしりとたたいた。

「あなた、なにをノンキに亦征と遊んでんのよ。帰るわよ」

「いやあ、ははは、残念ですね亦征殿。もう少しお話したかったのですが」

「ははは、全くですよ。あ、螺蔚姫」

「溜螺蔚よ！！！」

怒鳴り返しながら振り返ったら、不意に亦征に強く腕を引かれた。

「私の正室の座は、いつでも螺蔚姫のために空けてありますから」

耳元でそう囁かれる。

「結構です!」

あたしが繰り出した平手をひよいっとよけて、亦怔は笑いながら去っていった。

「では、また会いましょう、螺蔚姫」

「溜螺蔚だつてば!」

亦怔の背に、べーっとあたしは舌を出してやった。

文の山2

何なのだこれは。

あたしは呆然と、目の前にあるそれを見た。

こんもりとてんこ盛りに土間にある、それ。いや、それら。

「^{たと}譬えるならば、かの雄大な富士がまるで雪化粧をしたかのような――」

って、流石に無理があるわ。

あたしは、頬をひくつかせながら、隣で困ったように眉を下げ苦笑いをしている兄上を見た。

「…ねえ、兄上。これ、何」

「文のようだね」

さうりと兄上は答える。

「……………」

「……………」

ふたりして、それを見る。

文。確かに、文。

それにしても、この量は異常だ。

こんもりと、かゝなりりくムリをして譬えるならば、雄大な雪化粧の富士のように積み上げられたそれは、膨大な量の、文の山。

「…ねえ、兄上。あたしの気のせいかもしれないけど、宛名、瑠螺りゅうら蔚いって書いてない？」

「そのようだね」

これまたさらりと、兄上は答える。

「…」
「で、さあ。これってあんまり考えたくないんだけど、もしかして

「求婚の恋文だね」

「な、何でこんなにたくさん、しかも一度にくるのよ！？そりゃあ今迄だつて来てたけど！でもこの時期タイミングで来るって事は、明らかに、前田家の瑠螺蔚が使える、って欲に目が眩んだ奴らばかりじゃないのっ！流石のあたしでも、そんな奴らとは結婚なんてしたくなー！ー！ー！っ！」

あたしは足で文を蹴散らすと、どこかかと文を踏みつぶして（洒落じゃないわよ）土間に上がりこんだ。

「兄上、それ全部燃やして。父上に見せるまでもないわ。…あ、うん。父上、もう見てるかも」

「瑠螺蔚？何処に行くんだい？」

「父上に会いにいつてくる。バカなこと、考えないように釘刺してくるわ」

「おお、瑠螺蔚、何か用かな？実は今、おまえに会いに行こうとしていたところなのですぞ」

「え〜と・・・父上、あの文は見た？」

「ううむ。勿論見たとも」

チッ。やっぱり見たのか。

「見たが、のう。いやはや、全く惜しいことじゃ。もつすこうし、早く文がきていればなあ…。あの約束がなければ…」

ひとり言のようにぼそりと付け加えられた言葉をあたしは聞き逃さなかつた。

「約束!?!」

あたしは叫んだ。

「約束、って何なの、父上!」

「え、あ、いや、なんでも…」

「なんでもないわけないでしょう!何なの、父上!はっきり言わないと…」

あたしは腕を組んでじり、と父上ににじり寄った。

父上が青くなって叫ぶ。

「わ、わかった！」

「最初っから素直にそう言っていればいいのよ」

「益々齷らじに似てきよって…。齷らじもすうぐそつちやってわしを齷らじして…」

「今母上の話はどつでもいいのよ。約束やくそくって、何なの？」

「じ、実は、た、高杉たかあきにのつ」

「高彬がなんだっての」

「た、高彬におまえをやると約束して…」

「はあ！…どおいじつとよっ…！」

あたしは父上の襟首をがしつと掴んだ。

父上が震え上がる。

「いいやつ！瑠螺蔚や！よく考えてもみい！佐々家は若殿の後見にもついているし、手を組んでおいて、得こそあれ、損は…！」

「あたしはそんなことを聞いてんじゃないのよっ…！」

あたしはぎりぎりと父上の首を締め付けた。

父上の顔が、青くなったり白くなったりする。

「ぐあつ、瑠螺蔚っ！老い先短い父に何を……」

「なんならここでその先を無くしてあげるわよあつ！？」

「か、勝手に決めたことは悪いと思っておる！わしも最初は断ったのだ！けど、そう何度も頭を下げられると、わしも、つい……」

「つい、何よ！？」

「うっつ、る、瑠螺蔚っ！わしは、まだ蓄に会いたくはないっつ！蓄もまだ来るなどいっておるっつ！」

「気のせいよ！母上はいつでも父上を迎え入れる気にいるわ！手を

拱こまねいて待つてるわ、父上！母上に会いたくはないの！？逝なってあげなさいよ…！」

「溜ため螺め蔚せいっ！し、死ぬ！本当に死んでしまっっ！」

「ちっちっっっえっ！」

あたしは、ぱっと手を離した。

「父上！あたし、そんなこと、知らないからね！」

あたしはそう怒鳴ると、縮ちぢこまる父上を尻目にどかどか何処へ行いくでもなく、怒りのままに歩き出した。

覚悟はしてたけど。してたけどっっ！よりもよって、高彬たかひらだなんて！

そりゃあ、そこいらの変な10や20も歳の離れた男よりは、高彬のほづがまだマシだって思うけどさ！

鼻息も荒く歩いていたあたしは、ふと、立ち止まった。

あれ、こゝ、離れかしら。

興奮して歩いていたものだから、いつの間にか、離れに来てしまっていた。

ぐるりと周りを見渡したとき、目の端に、ちらりと赤いものが映った。

「…」

血が上っていた頭が一気に冷え、冷や汗がどつと出る。

何、今の。

あたしはもう一度、首をめぐらせた。

赤い、真っ赤な、障子。緋の墨を垂らしたかのように、障子紙一面に緋色が散っている。

それは、綺麗だと言うよりも、いつそのこと禍々しい。

あたしは、震える口元を押さえた。

なに、あれ。

あたしは、その障子にそろりと近寄る。息を詰めて、ちゅと一息に開け放った。

そこには、義母上と義姉上が、血に塗れて横たわっていた。

文の山3

ぱたつと雫が落ちた。

銀色の鈍い輝きを隠して、雫はそれを伝い落ちてゆく。

障子に飛んだ緋。染め上げられた畳。

微塵^{みじん}も動かない義姉上と義母上。

そして。

血塗れの刀と、赤を全身に纏って立っているのは、
発六郎^{はつろくろう}だった。

そのくちびるが、微かに瑠璃蔚と動くのを見た。

なに、これ。

あたしは白昼夢でも見ているの？

「発、六郎……」

発六郎が、姉様と、義母上を斬ったの？

発六郎が……。

発六郎の手が、あたしに向かって伸びる。

「あんた……家に来たのはこのため？義母上と義姉上を殺すため？それとも……あたしを殺す、ため？」

伸ばされた手が、虚空で止まった。

そうなのか。

あたしはふっと笑った。

こんなときなのに、昨夜のことを不意に思い出す。

発六郎と、初めて言葉を交わしたとき。

夢をみて、震えていたあのとき。

「あのとき、あんたが傍にいてくれて嬉しかったのに」

小さく言って、あたしは顔を上げた。

義姉上と、義母上を斬った発六郎を許すことは出来ない。

あたしもこんなところで死ぬ気はないし、このまま発六郎が兄上や父上を傷つけないとも限らない。

「あたしも殺すのね」

「ヌシ瑠螺蔚」

発六郎が顔を上げる。口を開く。酷く苦しげな顔。

でもそれもお芝居かもしれないわよね。

だって、あなたはあたしに優しくしながら、こつして義姉上達を斬ったのだから。

酷く裏切られたような気がしてあたしはふつと嗤^{わら}った。

ばかみたい。裏切られたって何？あたしが、ただ勝手にいい人だなんて思いこんでいただけ。

「あんたに名なんて呼ばれたくない」

あたしは護身用の懐刀をすらりと抜いた。

「！」

発六郎が一步下がった。

懐刀と、大刀。それに加えて女と男と言う力差もある。こっちが不利なのは、火を見るより明らかだ。

それでも、あたしは殺されるわけにはいかないのだ。

あたしはちらりと義姉上達を見た。

早く、片をつけないと……。

それから、改めて懐刀を構えた。

発六郎がそんなあたしを見て、ゆるく息を吐き出した。

「……」

空気がぴんと緊張した。

ふと、発六郎の姿が一瞬ぶれた。

「！」

咄嗟にあたしが体を捻ると、後ろの赤く濡れた障子がスパツと切れる。

速い！

発六郎が目を見開く。まさか、あたしがよけるとは思っていなかったのだらう。

あたしはちらりと縁に目を走らせた。

これだけ大仰に立ち回っていれば、誰かが気づいてくれるだらう。

でも、駆けつけた誰かが発六郎に斬られるなんていう事態はごめんだ。

あたしは縁から庭におりた。

発六郎が一瞬戸惑う。多分あまり大事にはしたくないのだろう。わざわざ義姉上達を離れに呼んで斬ったくらいなのだから。

でも躊躇ったのは一瞬だった。すぐにあたしに倣ならって庭におりる。

挑発に乗ったと確認して、あたしは走り出した。

最短距離で家を抜けるために、多少庭の枝に肌を引っ掛けるのは気にせず走った。

所々で、悲鳴が上がる。

発六郎の刀を見たからか、血塗れの発六郎自身を見たからか。それとも懐刀を持って走っているこのあたしを見たからか。

何にしても、これだけ騒ぎが大きくなれば、発六郎ももう掴まるしかないだろう。

まだあたしについてきているか確認しないままにあたしはただ走った。

ついてきているもよし、ついてきていないのなら、それはどこかで発六郎が掴まったと言っただから、それもよし。

屋敷の外まで走り出て、あたしは息を整えながら、後ろを振り返った。

いない。

あたしは目を細めた。

…うっん、来た！

あたしは門に身を寄せて、発六郎の死角から、懐刀を翻した。

「！」

発六郎の喉に、刃を押し当てる。その背が、屋敷の外壁に当たる。

発六郎の目が、驚きに見開かれた。

「動かないで」

「…」

発六郎が息を詰めるのがわかった。

「どうして義姉上達を斬ったの。あなたの目的は何？どうしてどうちに来たの」

発六郎が答えずにふっと笑った。

「…」

あたしは刃を喉の上に滑らせた。じわりと血が滲み出す。

「あなたに拒否権はないわよ」

「俺は死んでもいい」

「使い捨ての駒ってこと？黒幕が別にいるの？」

「…」

「答えなさい」

「俺を殺さないのか。俺はおまえの姉と母を殺した。俺を殺さないのなら、俺はおまえを殺すぞ」

「！」

発六郎がそういった瞬間、何がどうなったのか、手に痺れが走った。

はっとして見ると、懐刀が弾き飛ばされていた。でも何処に弾き飛ばされたのか、わからない。

咄嗟に発六郎を見ると、表情が苦々しく変わっている。

どうも、発六郎がやったのではないらしい。

他にも協力者がいるの!?

あたしはずり、と一歩下がった。

発六郎が、あたしが下がった分、一歩前が出る。

ちらと屋敷を見ただけれど、今すぐに助けが来ることはなさそうだ。

絶望的だ…。

発六郎が、あたしに手を伸ばした。

捕らえて殺す気が、それとも前田を脅すのか。

そんなの、どっちもいや！

あたしは唇を噛んで、身を翻した。

小さい頃に、あたしが落ちた野洲^{やす}川。

屋敷のすぐ近くを流れているその川縁にあたしは走り寄った。

発六郎が息を呑む気配がする。

あたしは一瞬だけ、発六郎を見て笑った。

残念ね、発六郎。あたしは、あんたの手にはかからないわ。

あたしは躊躇いなく、水面に足を踏み出した。

「っ、瑠螺蔚————っ……！」

青の炎1

「クソツツツ!!」

俺は拳で柱を思い切り叩いた。

柱が撓^{たわ}み、拳には痺れが走った。

握り締めた拳に、爪が食い込んで鈍い痛みが残っても、俺の苛立ちを掻き消すには遠く及ばない。

一体、俺はどうしたんだ!?

俺の名は、むらゆき村雨はつらくん発六郎はやしほ速穂という。もつと尤も、本名ではないが。真名は知らない。知りたいとも思わない。

俺の親は両方とも何年か前の戦に巻き込まれて死んだ。俺の今の親は全くの他人。両親の血で塗れ、なお生きていた俺を拾ったと言っていた。

今の親と言っても、養父は既に死んでいる。養母はとても若い。子を産んでいるのに、まだ三十路前だろう。

養父は村雨家の主だった。故に子も何人もいたし、妻も養母以外にもいた。

けれど俺が接触があつたのは、養母の唯一の子、千集だ。正室の養母が産んだ千集は今亡き養父の後を継いで、村雨家の若頭になっている。

俺は、若と兄弟同然に育てられた。それと同時に、養父に忍びとしての業を叩き込まれた。若が大きくなったときに、護衛として、影として俺が動けるように。

事の起こりは今から約一月ほど前。

その日、普段はわりと温厚な若が、いきり立って俺のところへ来たのだった。思い切り寄っている眉根が、あまり見慣れないだけに俺に何か一大事が起こったのかと焦りを与えた。

「若。何か・・・」

「母が前田の奴に手懐けられた」

若はきつぱりとそういった。

養父が死んでから、表向き村雨家の権威は全て若に移った。けれど、まだ20にもなっていない若に全てを託すのは酷だとして、実権は養母が握っている。その未亡人となった養母に、他家からの縁談は山ほど来た。村雨と手を組みたい奴等から。

若や、皆でその縁談のひとつに決め、これで村雨家も更に大きくなると話していた、その矢先だった。

「母は、断る気である。既に決まったことだと言つに。俺が、嫌ならしい、心はいらんと言つて来た」

「若、それは・・・」

それを聞いたとき、俺も青ざめたことだろう。もし養母が縁談を断りでもすれば、相手の家が一度決めた縁談を断るのは何か含むところがあるとして、戦を仕掛けてくるかもしれないのだ。村雨家の足

を掬われるのは勘弁して欲しい。

「母は、前田の側室になりたいと言っている」

「では、殺しましょう」

あの時、俺は躊躇いも無くそういつていた筈だ。つまりは前田がいなければいいと。邪魔になるのなら消せと。そう教わってきた。

「母を、か？」

「まさか。前田を、です」

若はにいつと笑った。

「おまえならそう言ってくれると思っていた。どうする、殺すか、

全員。それとも・・・」

「全員ですね。ただの戯れにしては度が過ぎています。私が殺りましよう」

「おまえが？一人で全員だぞ？」

「お任せください」

「…どのくらいで出来る？」

「一月もかからないでしょう」

「相手は前田の本家の奴らだ。村雨が関わっているとわかれば終わりだ。最悪母が諦めればいいからな、当主だけでもいい。無理だと思っただらすぐ戻って来い」

そう言われて、俺は前田の本家に取り入った。

けれど、ここは、何なのだ！

若に、養母を誑かしたのは前田のものか、間違いないかと聞いたとき、確かに頷いて間違いないといったのを俺は確認している。だが、前田家にいざ来てみると、村雨家とは何もかもが違うのだ。違いすぎるのだ！

少しでも顔色が悪いと声をかけ、傷があるといつてはすぐに手当をしてくれる。上下身分の関係無くだ。前田家の当主自ら手当てされそうになったときは、流石の俺でも夢ではないかと疑ったものだ。

村雨ではそんなことは天地がひっくり返っても絶対に起こらない。いや、村雨に限らず何処の家でも普通はそうだろう。

それとわかるほどに顔色が悪くても、誰も何も言わずに真横を通り過ぎる。傷があっても、自分で手当てするだろうとほおって置く。俺も例外ではなかった。一瞥いちべつしただけで通り過ぎるのだ、皆が。一

人の例外も無く！

それでも、まだ大丈夫だった。まだ、憎めた。こいつらは、猫を被っているのだと、例えそうでなくても村雨の邪魔になるのなら消すべきだと、そう自分に言い聞かせれば、まだ、大丈夫だったのだ。

だが、あの女だ！あの女が、俺を狂わせるのだ！

俺は再び、強く拳を柱に叩きつけた。

鈍い音が鳴って、それが耳の奥で木霊する。

クソッ！

前田に取り込もうなんて思わなければよかった。すぐに殺してしまえばよかった。

殺す相手と接触して、情が移るのは忍として最も避けなければならぬことだ。

けれど、今までに俺はそんなことは無かった。なかったのに……

今日、どうして俺はあいつを殺そうと思ったんだ。

どうして、あいつは泣いていたんだ！

俺は高ぶった感情を抑えるように息をついた。

きつとこれから、人を殺すから、それで感情が乱れているだけだ。それだけだ。

俺は強く前を見据えた。

今日。今度こそ、殺す。

必ず。――――必ず。

青の炎2

「発六郎はつろくろう。至急の用とは何なのですか？」

「そうですね」

今日、主と、俊成としなりと、…瑠螺蔚るらいは天地城に出掛けていった。

渡りに船と残る女二人を離れに呼び出した。奥と俊成の妻だ。

手始めにこいつらを殺して、帰ってきた男二人を殺して、それから、
……………。

いや、今は目の前のことだけに集中するべきだ。女だと侮ると痛い目にあうかもしれない。失敗という文字は、ない。失敗はすなわち死、だ。

俺は、無言ですらりと太刀を抜いた。

「は、発六郎！？何を・・・」

震える声を聞きながら、俺は目を閉じた。

瞼裏まなつらに、不意に瑠螺蔚るるいの顔が滲にじんだ。

『なんでもないから』

その女は、だから大丈夫だと、そう言った。

静かに震えながら、気丈にも涙を拭って、笑って見せた。

なんでもない？そんなわけないだろ！とふとすれば怒鳴りつけそうだった。だっておまえは泣いているじゃないか。

ただの強がり。

けれど俺に慰めてやるなんて甲斐性があるわけないし、ましてや殺そうと考えている女にそんなことをしてやれる程、優しくもない。

けれどそのまま立ち去るには、強がる瑠螺蔚の姿は痛々し過ぎた。

その涙を目にすれば苛立つて、何かしてやれることはないかと考えた自分にも腹が立った。

いや、ここで疑われては今までの苦勞が水の泡だ。媚びておくにこしたことはない。俺が即座に立ち去らないのは、そうだ、たったそれだけの理由に決まってる。

気がつけば俺は懐を探って、ぐしゃぐしゃの布を差し出していた。差し出してから俺は後悔した。いくらなんでも、前田の本家の姫に、こんなぼろ布を差し出すなんてどうかしている。俺はこんなものし

か持ちあわせていないし、瑠螺蔚ならばこの百倍もいい布を普段から使っているだろう。

この手はもしかしたら振り払われるかもしれない。無礼者、と罵られるかもしれない。しかし、姫とはそういうものだ。気位が高く、扱いづらいものだ。そういう暮らしをしている者のことを姫と呼ぶのだ。そもそもこんな真夜中に姫の部屋に下男が入っているなど、ありえないことだ。首を落とされても仕方がない。

瑠螺蔚は驚いたように目を見開いた。

今更ながら、俺はじわりと全身に汗が滲むのを感じた。

俺は、何をやっているのか。

手を引っこめようとしたその時、瑠螺蔚は微笑んだ。

「ありがとう」

そう言つて、俺の手から布を受け取つた。

その笑顔は、涙に濡れていても、はっきりと美しかった。

瑠螺蔚は決して美人と謳うたわれる類ではない。けれど、その笑顔は瑞々しく純粹で、素直に美しいと思えるものだった。

人の笑顔を、いや、人を綺麗だと思ったことなどなかった。そもそも俺は他人のことをあまりよく見ていなかった。外見など、他人を識別する目印にしか過ぎないと考えていた。

俺は自分が不愛想なことも理解しているし、村雨家では裏で動いている関係上、あんなにてらいなく俺に笑いかけるような人間もいなかった。

汚れた俺に、あの笑顔は眩しすぎた。

俺はゆっくりと目を開いた。

怯え震え立ち尽くす二人の女。

今は、こいつらを殺す。それだけを考えよう。

俺は太刀を振るった。一太刀、二太刀で、悲鳴を上げさせることなく、女は二人とも動かなくなった。

「……………」

思わず漏れた溜息に我ながら軽く驚いた。

いつも、仕事を終えたとき……人を殺したときに、こんなに重いものが付き纏っただろうか。

…駄目だ。この仕事はさっさと終わらせるに限る。

ぱたり、と刃を伝って、雫が垂れる。

赤い雫は銀の冷たい光を辿って、畳を染める。

瑠螺蔚も、あの笑顔も、そう遠くないうちにこうして血に塗れて二度と動かなくなるのだろう。それを惜しいと思うのは、ただの感傷か。

しかし俺はやらなければならないのだ。それだけが、俺が村雨家で生かされてきた意味なのだから。

その時、不意に人の気配を感じて俺は振り返った。それと同時に、背後の障子が大きく開け放たれた。

俺は、動きを止めた。障子を開けた奴も動かなかった。刀を伝う血が無ければ、まるで時が止まったかのようにだった。

このまま時が、全てが止まってしまえばいい。その一瞬、俺は確かにそう願った。頭の奥のほうで鈍い音がして、眩暈がした。瑠螺蔚と俺のくちびるが自然に動く。

こんなに、早く帰ってくるとは思わなかった。瑠螺蔚は最後のつもりだった。そもそもどうして普段は使わない離れなどに来たのか。

瑠螺蔚は、目を見開いて、俺の持っている太刀を凝視していた。おそらくは、それについている真っ赤な血を。彼女の姉と母の命を。

「発、六郎……」

瑠螺蔚が掠れる声で俺の名を呼ぶ。

それが、甘く耳に染みる。

ゆっくり、俺は瑠螺蔚に手を伸ばした。

「あんたー……家に来たのはこのため？義母上と義姉上を殺すため？それともー……あたしを殺す、ため？」

思わず、伸ばした手が途中で止まる。動かない。動けない。手だけではなく、体が一寸たりとも動かない。

頭ではさっさと殺せと声が響いている。どうせ殺すつもりだったんだ、足を運ぶ手間が省けていいじゃないかと。

けれど体が動かない！どうして動かないんだ。どうして俺はさっさと瑠螺蔚を殺そうとしないのだ。なぜ！？

不意に瑠螺蔚がつつむいた。

「あ のとき、あ なたが傍にいてくれて嬉しかったのに」

小さく吐き出された声に、俺は虚を突かれた。

瑠螺蔚が、顔を上げる。俺をまっすぐに見た。こっちがいたたまれなくなるほどに、まっすぐ。

俺は、俺を映すその瞳に静かな炎が燦るのを確かに見た。

それは、憎しみの青の炎。

「あたしも殺すのね」

「瑠螺蔚」

からからに渴いた喉からやつと声が出た。その声は思いの外しつかりとしていたが、俺はそれよりも次に自分が言おうとしている言葉に驚いて、唾を飲み込んだ。

俺は、一体何を言おうとしている！？口を開けば弁解が出てきそうだった。何故そんなことを言おうとしているのか、自分で全く理解が出来なかった。

感情が大きくぶれていた。俺はなぜか動揺していた。

「あんたに名なんて呼ばれたくない」

「！」

瑠螺蔚が冷たく言い放った、その言葉が、その拒絶が、俺を強く射た。

震える足が、一步、後ろに下がる。目の端で瑠螺蔚が懐刀を抜いた

ことには気づいたが、認識するには至らなかった。

くらりと眩暈がして、一瞬意識が飛んだ。また焦点が像を結んだときには、目の前で溜螺蔚が懐刀を構えていた。今にも短刀を振りかざしそうだ。

女ごときに負けるとは思っていないが、このままではいろいろと面倒だ。気絶させようと咄嗟に思って、迷いを溜息と共にゆるく吐き出して、太刀を、一気に振るった。

「！」

けれど、俺が切ったのは溜螺蔚の後ろの障子だけ。

よけた？まさか！

俺は驚きに目を見張る。

けれど俺が切ったのは紛れもなく瑠螺蔚ではなく、障子だけ。

瑠螺蔚の姿を探せば、いつの間にか瑠螺蔚は庭に下りていた。

俺は一瞬その真意を測り損ねて二の足を踏んだが、挑戦的な瑠螺蔚の視線を受けてたって、同じように庭に降りる。

瑠螺蔚はそれを確認してから、ついて来いとも言うつように走り出した。

俺もつられるように走り出す。

ただ走る瑠螺蔚の背を追いながら、俺は目を細めた。

瑠螺蔚には何か考えがあるのだろう。ただ走っているだけでは相有るまい。

けれど、その真相を考えることも億劫だった。俺は、酷く疲れていた。

屋敷の外に出た途端、喉に何かが当たった。

「！」

視線だけ動かしてみれば、当たっているのは懐刀。それを持っているのは瑠螺蔚。背には屋敷の外壁が当たった。

「動かないで」

瑠螺蔚が囁くように言う。

瑠螺蔚の顔が、息がかかるほど近くにある。

「……………」

背筋がぞくりとして、俺は息を詰めた。

俺をまっすぐに見る、瑠螺蔚の視線が耐えられない。

視線を巡らせば、瑠螺蔚の上気した頬と赤い唇が目についた。

それに何か感想を抱く暇も無く、俺は大声で笑い出しそうになった。喉に当たるこの懐刀が無かったら、もしここに俺一人であったなら、きっと俺は笑い出していただろう。気の済むまで、大声で自分を嘲り笑っていたに違いない。

俺は、何をやっているのだろうか。

たかが、女一人。首に刀を押し当てられているけれど、そんなもの、本気になればきつと振り払えるだろうに、俺は何をしているのだろう。

どうして、さっき咄嗟に気絶させようなどと思ったのか。何故殺そうとしなかったのか。一思いに殺してしまえばよかったのだ。あの時に。人は咄嗟の時には本当の心が出るといいますが、それならば俺の誠の心は瑠螺蔚を殺したくないと思っっているのか。

「どうして義姉上達を斬ったの…。あなたの目的は何？どうしてうちに来たの」

「…」

刃が俺の喉の上を薄く滑った。痛みは感じなかった。

俺は、くちびるを吊り上げて笑った。

前田家に来て、今まで信じて疑ってこなかった何かが出来た。瑠螺蔚に逢って、俺の足元が崩れていくのを感じた。

今ここにいる俺は現。けれどそれ以外の、今までの俺は夢幻であるような気がする。

俺がわからない。自分で自分が掴めない。

いつそのこと、死んでしまった方が楽かもしれない。

ああ、そうだな。このまま、瑠螺蔚に殺されるのもいいかもしれない。

「あんたに拒否権はないわよ」

「俺は死んでもいい」

「使い捨ての駒ってこと？黒幕が別にいるの？」

「・・・・・・・・」

「答えなさい」

「俺を殺さないのか。俺はおまえの姉と母を殺した。俺を殺さないのなら、俺はおまえを殺すぞ」

「！」

俺がそう言った途端、瑠螺蔚の懐剣が弾き飛ばされた。

はっと俺は近くの茂みを見た。若だ！若が弓を射て、正確に瑠螺蔚の手もとの懐剣を弾き飛ばしたのだ！

瑠螺蔚が痺れているだろう手を押さえて、一步俺から下がった。

俺はその一步分、進んで距離を縮めた。

瑠螺蔚に、何も考えずに手を伸ばした。

瑠螺蔚は俺の手を見て、唇を噛んだ。それから、身を翻す。

その足の先には、川。

「！」

瑠螺蔚が一瞬、俺を見た。

そして笑う。

そのまま躊躇いもせず、瑠螺蔚は川に飛び込んだ。

「っ、瑠螺蔚—————っ!!!!」

必死で伸ばした手は、敢無く空を切った。

川に落ちた瑠螺蔚の、その衣がゆらりと揺れて、すぐに流されて見えなくなった。

今なら、まだ間に合う!

俺は上衣を脱いで、川に飛び込もうとしたが、すぐに止めてしまった。

俺は何をしようとしている?これでいいのだ。

俺は、何を考えているのだ。

不意に肩に手が置かれたが、俺は振り向けなかった。ただ、瑠螺蔚の消えた川面を見つめていた。

「やったな発六郎。だが、3人だな。あと、男が二人かー……。・。・。・。おい？どうした？真っ青だぞ。発六郎？」

何も考えられない。俺を覗き込む若の顔さえ、わからない。

瞼裏に、瑠螺蔚の姿が浮かび上がる。

ありがとうと言った笑顔は消え失せ、瞳に青い炎を燈して、俺を静かに見ている瑠螺蔚。

焼きついて離れないその姿。

「ああ……」

俺は呻いた。

「おい、どうしたんだよ。結構な騒ぎになってきた。このまま屋敷に戻ろう。三人殺したんだ。あとの二人はまた、ゆっくりと考えるさ」

三人、殺した……。

そつだ、俺が殺したんだ。溜螺蔚を……。

俺は、顔を両手に埋めた。

青の炎3

あれから、どのくらいたったのかわからない。夜が来て、朝が来て、再び夜が来て、また朝が来た。それが幾度巡ったのか、時間の感覚もなにもかもが俺を置いて通り過ぎていたように感じられた。

ただ、確かなのは瞼裏に時折閃く青の炎。

若は、時間が出ると俺のところに来て、心配していろいろと声をかける。

「おい、お前、前田家に行ってからおかしいぞ。で、残りの二人をどうする？聞^はいてるか？速^{はや}穂？」

頬を叩く若の手さえ、夢の中のようなもの。

「おい、速穂……？」

その日も、若の音がぼんやりと耳に届いて、俺はのろのろと視線だけで若を探した。

「決めた。館に火をかける。そうすれば、二人一度に殺せるし、誰がやったかもわからないだろう？」

火を、館に、かける…。館に…？

誰の…。

その日、久しぶりに夢を見た。

「あたしを殺すの？」

伏せられたその瞳の奥には、常に憎悪の青の炎が燻っている。

「ノボ溜螺蔚…」

「あんに名なんて呼ばれたくない」

声が喉の奥に詰まる。

「人殺し」

「違う、溜螺蔚、違う…。俺は、俺は、お前を殺すつもりは無かったんだ…」

「何が違うの？母上と姉上を斬ったのは誰？あんだじゃないの？」

「……………俺だ」

そつだ俺だ。俺が殺したのだ。瑠螺蔚の母も、姉も、そして瑠螺蔚も。

「……………瑠螺蔚……………」

俺は泣きたい思いで呟いた。

もう、俺はこれからどうして行けばいいのか。

わからない。なにもわからない。

「癈六郎」

そつと瑠螺蔚が呟いた。

「父上と、兄上を助けて」

その頬に透明な雫が伝った。一瞬俺はそれに見惚れる。

純粹で綺麗な涙。

「ねえ、発六郎！お願いだから、父上と兄上を助けて！」

瑠螺蔚が俺を見た。その瞳に青の炎は映っていない。

「お願いよ、発六郎！あたしじゃ助けられない！だから……」

それは殆ど悲鳴に近かった。

「瑠螺蔚、だがそんなことをすれば、俺は村雨家にいられなくなる」

「なら前田家に来るといい。新しい家を、家族をあげる。新しい名をあげる。あんたは自分の真名を知らないんでしょっ？なら、速穂児と名乗るといいわ」

俺は微かに微笑んだ。

「それでは今と大して変わらない」

「いいえ。違うわ。俊敏の速。瑞穂の穂、龍児の児。人々に温もりと安寧を与える、速穂児」

どう？と瑠螺蔚は笑った。陽のようだった。

眩しい、と思った。目が眩んでしまいそうだ。

俺が穂だというのなら、瑠螺蔚は光だ。俺にとっての、風であり、水であり、土である、陽女神。

「あたしのところへ来なさい、速穂児。きっと、生活には困らないわ」

そうか…それもいいな。

新しい名、新しい生活。また、一から始めるのも悪くないかもしれない。

おまえが側にいるのなら。

「ね？」

瑠螺蔚が、笑った。

それに応えるように、俺も笑った。

「三七郎さんしちろう、若は？探しているんだが、何処にもおられないんだ」

久々に伸ばす手足はぺきぺきと音を立て、動かす度に痛んだが、俺はいやに清々しい気持ちでいた。

「あ、速穂殿、ご病気が治られたんですね、よかった」

「ありがとう」

俺が礼を言ったら、三七郎は目をまんまるに見開く。

「…」

「三七郎？」

「あ、いえ、…あの、速穂殿、なにか、ご様子が変わりましたね…」

「そうか？」

俺がそう言って笑うと、それを見た三七郎は目をぐりぐりと擦って、ぱちくりとさせた。

その顔があまりにも間抜けだったものだから、俺は思わず噴出す。

そんな俺は余程前とは別人に映つたらしい。

「あの…本当に速穂殿ですか？」

「そうだが、三七郎、若はどこへ行ったんだ？」

「あ、若君ですか？若君は…」

そう言って、三七郎はえ、と声を上げた。

怪訝そうなその顔は、俺の心に一滴の不安を落とす。

「どつした？」

「速穂殿、知らないんですか？若君は馬で先程出かけられましたよ。行き先は速穂に言った」といっておられたので、僕はてっきり・

「！」

血の気が一瞬で引いた。若は前田家に行ったのだ！

でも速穂殿が知らないとなると、若君は恋人のところへでも行ったのかなあと見当違いのことを言っている三七郎の背後の空を俺は仰ぎ見た。

煙も炎もみえない。

けれど、俺はそこに燃えあがる炎と黒煙の幻を見た。

瑠螺蔚…！

俺は踵を返すと厩しほやへと駆けた。

霊力1

「瑠螺蔚さん！瑠螺蔚さん！起きれくれ、お願いだ、瑠螺蔚さん！」

うるさいな…耳元で怒鳴らないでよ…ちょっと誰よほつぺたたかな
いでよ…。

というか…なんか…寒い…。

あたしはぶるりと体を震わせるとゆっくりと目を開けた。瞼がやけ
に重い。なんで？

目の前に高彬たかあきの顔があった。泣きそうなような、怒っているような、
不思議な顔をしていた。

「…！」

高彬はあたしに覆いかぶさるように強く抱きしめた。

「え…ちょっと…なに…？」

混乱しながらその背に掌をあてて聞いたけれど、返事はない。

「高彬…？」

何か様子がおかしいと、そこであたしは気づいた。やだ、あたしずぶ濡れじゃん！手が草を潰す。川岸であたしは高彬に抱きしめられているのだった。

高彬はあたしの肩を掴んでまじまじと顔を見た。泣きそうだったその顔がだんだん怒りで眉がつり上がってくる。

「…つなにやってるんだ！」

「…は？」

いきなり怒鳴られてあたしはぼかんとした。

「どうしてこんなことをしたんだ！秋に川で泳ぐつもり？僕がいなければどうなってたかわかってる！？」

「川？泳ぐ？」

「自分から飛び込むなんて…！」

飛び込む…あたしは視線をずらして川を見た。川…？

一気に記憶が巻き戻る。

緋に濡れた障子。

はっとあたしは立ち上がった。高杉が慌てて手を放す。

「瑠螺蔚さん！」

「どのくらいだったの!？」

あたしの切羽詰まった様子に高杉は気圧されたように目を見開く。

「どのくらい...?」

「あれからのくらい...ああもう!」

「瑠螺蔚さん!？」

あたしはもどかしくなって走りだした。結構流されたみたいで、館^{やかた}までは距離がある。

倒れたまま動かない姉上様と義母上。一刻も早く、手当てをしなれば！

「兄上ええー！ー！ー！ーっ！」

走りながらあたしは叫んだ。

どうか、どうか応えて！心の底から兄上の名を呼んだ。

（瑠螺蔚！？）

じん、と心に響いてくる声があった。懐かしい声だった。その声を聞いた瞬間、あたしの瞳から一気に涙が溢れた。

泣きじゃくりながらあたしは言った。

「兄上！あたしを翔とばして！兄上のもとへ！」

言い終わらないうちに、ぐらりと地面の感覚が分からなくなって、兄上が目の前にいた。

戸惑った顔であたしに歩み寄る。

「瑠螺蔚。いったい何があったんだい」

あたしはぎつとあたりを見回した。兄上の室のようだった。

離れからは一番遠い。普段通りの態度を見ると、もしかしたら騒さわぎに気づいていないのかもしれない。

「兄上、兄上…姉上様と義母上が…お願い助けて!」

あたしの様子にただ事ではないと思ったのか、兄上の表情が緊張する。

「落ち着くんだ。二人がどうしたの?」

「斬られたの…離れで…二人とも、動かなくて…」

「掴まって」

兄上はあたしの腰を掴んで引き寄せた。また、ぐらりと自分がどこにいるのか分からなくなるような浮遊感があつて、気がついたらあの血染めの部屋にいた。鼻を突く生臭い血の臭い。

「…！」

部屋には3人の下男がいて、一様に大きく目を見開いていた。

「俊成様と瑠螺蔚様…！？いま、どこから…」

「こちらの襖からだ。どいてくれ」

と言って兄上は下男に囲まれていた人を見た。あたしは息がとまった。どこかで、あたしの見たことは全て夢だったんじゃないかとも思っていたけれど…。

だらんと力なく畳の上に伸びる手。その手すら血に塗れている…。

「二人の新しい衣と、温めた布と湯を沢山持ってきてくれ。急がなくていいから」

兄上はその場にいた下男にそう言った。

「俊成様…その、大変申し上げにくいのですが…お二人は…」

「大丈夫だ。わたしは医の心得がある。必ず助ける。行け」

下男に向かって言いながら、茫然と声も出ないあたしの肩を安心させるように叩いた。

止血…というか、布は傷口に巻かれていたが、その布すら滴るほど真っ赤に濡れている。姉上様は正面から袈裟がけに斬られたようで、義母上よりも傷は深そうだった。あたしは唇が震えた。

慌てたように下男が出て行くのを待って、兄上は義姉上の太刀傷の真上に手を翳した。

すると、見る見るうちに、深く裂けていた太刀傷が癒えていったの

だ。

「すごい、兄上…！」

兄上は姉上様の傷をどんどん消していった。

姉上様が助かる。義母上が助かる…！

兄上は姉上様の傷をあらかじめ治すと、今度は義母上の傷を治そうと向き直ろうとした。その時、ふと兄上はふらついた。

あたしは咄嗟に兄上を支えて、思わず息をのんだ。

その身体は、氷のように冷たかったのだ。

兄上は義母上にも手を翳した。傷が、癒えていく。けれど、姉上様

の時と比べるとその速さは遙かに遅かった。

霊力は無尽ではないのだ。癒の霊力は一番疲れると聞いた。こんな、重症の傷を立て続けに二人も治せば、兄上はどうなってしまつのか。

「やめて！もういい、もういいからっ！」

あたしは泣きながら兄上の腕に縋った。

「瑠螺蔚…」

兄上は細く呟いた。その額には滝のような汗がにじんでいた。

そしてそのまま、糸が切れたようにどっと倒れてしまった。

霊力2

そっとその頬に触れた。体温が戻ってきている。

眠っている兄上。あまりにも静かで、時折呼吸を確かめるために口の前に手を翳してみたりする。

思い出すのは、ぞっとするように冷たい腕。

兄上が倒れたのはあたしのせいだ。

二人を助けたかったからとはいえ、兄上に無理をさせてしまった。

姉上様も、義母上も、兄上のおかげで一命を取り留めた。義母上はだいぶ重症だけど…でも安静にしてちゃんと薬湯を飲んでいれば命は大丈夫と言われた。それもこれも全部兄上のおかげだ。

目の前で昏々と眠る綺麗な面を見詰める。

兄上、このまま、目が覚めないなんてことないよね、大丈夫だよね
…。

「失礼いたします」

「…」

かけられた声に返事をしなかったけれど、遠慮がちに襖があいた。

侍女のこ萩小萩の顔がのぞく。

「姫様、少々よろしいでしょうか？」

「うん…なに？」

「それが…土間でございます」

「え？玄関じゃん。客間に通さなかったの？」

「はい。私^{わたくし}どももお通ししようとしたが、由良姫様がここでいい、とにかくはやく瑠螺^{るらい}蔚様をお呼びしてほしいと、そればかりで…」

困った顔で小萩は言った。

「こっちも一大事だったけど、まさか佐々家もなにか起こってるんじゃない…。」

あたしは緊張すると急いで土間に向かった。

「由良！」

「瑠螺蔚さま！」

あたしが駆け寄ると、由良はあたしの手を傷一つない柔らかかな手で
がっしりと掴んだ。

「お待ちしていました。はやくいらしてください！」

そう言ってぐいぐいとあたしを引っ張っていきこうとする。

「由良、どうしたの！？何かあったの？」

「お話は向かいながらもよろしいですか？」

「いいけど…そんなに緊急なの？」

「はい」

あたしは由良に手をひかれながら佐々家に向かった。

「で、何があったの。もしかして…不審な人が暴れて怪我人が出たとか…」

発六郎はつろくろうが浮かんであたしはそう言ったのだけれど、由良はいいえと首を振った。

「瑠螺蔚さま、不躰なことをお伺いするようですが…兄上様と何かございましたか？」

「へ？高彬たかあきと？ないわよ、別に…」

言いながら待てよ、と思った。

発六郎に追い詰められたあたしは野洲川やすに飛び込んで、それをどうやら高杉が助けてくれたらしい。あの時あたし自分のことしか目に入っていなかったけど、よくよく思い出してみれば高杉もあたしと同じようにずぶ濡れだった。

緊急時だったから仕方ないと言いつつ、あたしはそんな高杉に礼を言うでもなく兄上のところへ翔とんで…。

あたしはすつと血の気が引いた。

もしかして、高杉に見られた…？

あたしはその時無我夢中で、高杉なんて気にしてなかった。けど普通に考えて、あたしがいきなり走り出したら、後を追うわ、よね。

「た、高杉が何か言ってたの…？」

「いいえ。兄様は何もおっしゃってくださらないのですけれど…」

由良は一瞬口ごもった。

「ですが…瑠螺蔚様の事だと思つたのです。あんなに怖い兄様は初めてで、私、どうしたらいいかわからなくて…」

「怖い？高杉が？」

高杉と、怖いというイメージが結びつかない。

しかも、妹を怯えさせるぐらいに顔や態度に出してるなんて、超理性先行型の高杉らしくない。

なにかあったのか。もしくは、あたしが消えるのを見てて…？でも

それじゃあなんで怒っているのかが分からない。怯えるとか、恐怖に駆られるとかならまだしも。

そんな話をしているうちに佐々家に着いた。

高杉は、自分の部屋の前の縁にいた。

片足を立ててその上に腕を乗せて座っていた。

「兄上様……」

由良がその横顔におそろおそろ声をかけた。

「由良、今は誰とも会いたくないと」

こっちを向いた高杉の声が詰まった。あたしを見留めた瞳が大きく

見開かれる。

「由良！」

それはあたしですら思わずびくつとするぐらいの大声だった。あの、高杉が妹の由良に向かって怒鳴るなんて思わなくて、あたしは驚いた。

「じっ、じめんなさい…でも、でも私…」

怒鳴られた由良は、かたかたと震えて、涙を零した。

あたしは由良の肩を慰めるつもりで優しく抱き寄せると、きつと高杉を睨みつけた。

「高杉！何があったか知らないけど、怒鳴ることないでしょ！？」

「瑠螺蔚さんは口を出さないでくれ」

高彬は打って変わった低い声で言った。

けどそんなの、怖くないんだからね！

「瑠螺蔚様！」

「出すわよ！どんな理由があつたとしても、大の男がこんなか弱い女の子泣かせるって、あんた恥ずかしくないの！？」

隣の由良がいきなり声をあげた。

ん？と首を向けると、由良は涙を零しながらも首を振った。

「瑠螺蔚様、私は大丈夫です。ですから、お願いですから、兄上様をお責めにならないでください。お願いいたします」

そう言って更に泣いた。

「…」

由良が優しいのはわかるけれど、そう言われても高彬に非難は向く。

「由良、案内あんないありがとう。もういいから、室むろに戻って」

「はい」

あたしがそう言うと、由良は涙を拭い拭いさがつていった。

「高彬」

高彬はあたしを見ずに顔を背けていた。表情は怒りと言うか、不機嫌丸出しだ。

でもあたしだって怒ってるんだからね！

「体調は、大丈夫なの」

ぶっきらぼうに高彬は言った。

「体調？」

高彬がそんなだから、あたしも自然とぞんざいな声になるのは仕方がないと思う。

大体、体調って何よ？あたし別に風邪ひいてるわけでもなんでもな

いんだけど。

「川に飛び込んだらう」

「それは…！」

あたしはカツとした。

こっちの事情知らないのはしょうがないけど、好きで飛び込んだわけじゃないからね、あほんたれ！

昔でも野洲川^{やす}なんて流れが急で、自分から飛び込むなんてしないのにこんな大きくなって川遊びなんてするわけないでしょ！

「…体調は大丈夫です。気遣ってくれてありがとうございます！でもね、あれは」

力み勇んで本当のことを言おうとしたけどふと思いとどまった。

うちに忍び込んだ奴と短刀で戦って逃げ場なくて川に飛び込んだじゃった〜なんて本当のこと言ったら、また真面目一本な高彬のお説教が延々と続くのでは…。終わったことなのに無駄に心配させるのも嫌だし。

それだつたら誤解されてるぐらいで、まあいつか？

「あれは、何」

「あれは、あれは…えーと落ちちゃっただけなのよ。飛び込んだなんて言われると心外だわ」

「ふうん？僕には瑠螺蔚さんが自分の足で飛び込んでるように見えただけだね？」

「あんだ、見てたの!？」

「見てなきや助けられないよ」

「なによ！見てたのにそんな嫌味みたいにちくちく言ってるの!？あれはしょうがないじゃんか！あたしはあんだみたいに鍛えてるわけじゃないし、他にどうすればよかったのよ！むしろあそこまで持ったのを褒めてほしいわよ」

「…」

高彬がこっちを向いた。眉根が寄って、渋い顔をしている。

あまりにもじっと見てくるもんだから、あたしは思わず一歩引いた。

「え、な、なに…」

「今の話、どういふこと？」

「え…ど、どういふことって…見てたんでしょ…」

いやな予感がしてつつつかえつつかえ言つと、高杉はあたしの腕をさっと掴んだ。

「僕が見てたのは、瑠螺蔚さんが川に飛び込むその瞬間だけけど。その後は慌てて瑠螺蔚さんを見失わないように追ったから周りは見えていないし。鍛えるとか、持つとか、どういふこと？」

「あ、えーっと…」

あたしはもごもごと口籠った。

や、やばい…自分で墓穴掘っちゃった…。

上手い言い訳も思い浮かばず黙っていると、高彬は掴んだあたしの腕にぐっと力を入れた。

「何したの」

「うちに、不審者が忍び込んできて、戦ったんだけど、追い詰められちゃって川に飛び込んだの」

思いきって言うと、高彬は声も出ないようだった。

本当に何も知らなかったらしい。

佐々家は隣なのにあれだけの騒ぎが伝わってないとは思えないから、高彬が聞いていないか、由良あたりが気を利かせて伝えてないかね。

痛いわよ、なんて別に痛くもないけど手を振り払ったら、今度は両肩をがっしり掴まれた。

つて、いたい、痛い！本当に痛い！普段はなよつとしていて、小さい頃なんて泣き虫の鼻たれだった高彬にこんな力があると思わなくてあたしはびっくりした。指の跡が残るんじゃないかと思うぐらいだ。

「溜螺蔚さん怪我は!？」

「痛いわよ、離して！あたしはこの通り無事だから」

そう言うと、両肩にかかった手の力が緩んだ。

ほっとしたと同時に、高彬に抱きしめられた。

「よかった…!」

「…大袈裟ね」

そうは言ったけども、高彬の安堵が伝わってきてなんだかむず痒くなる。

高彬は川に落ちたあたしを助けてくれて…じゃなかったら本当に死んでたかもしれないし…。

その礼を言っていないことに気づいてあたしは高彬にそつと声をかけた。

「高彬、言うのが遅くなったけど、助けてくれて本当にありがとう」

「いいんだ。瑠螺蔚さんが無事なら、いいんだ…」

高彬の優しさにじんとした。そうよ、高彬は昔から、「一言目には」

瑠螺蔚さん』で、あたしの後ろばかり付いてきて、泣き虫で、でもいつも優しくかった。

「あんだ、どうしてさっきはあんなにぴりぴりしてたのよ。あたしになんとかできること？言つてよ。言うだけでも楽になるかもしれないし、それにあなたがあたしを助けてくれたみたいに、あたしだってできるだけあんだの力になりたいと思ってるのよ。」

さっきまでと違って、あたしも大分優しい気持ちになって柔らかく言った。

「…本当に、瑠螺蔚さんにはかなわないよ」

高彬はいきなり笑いだした。

ちよつと、大丈夫かしら。

「もう、いいんだ。恥ずかしいけれど、勝手に不機嫌になって勝手に

に八つ当たりしてた。由良には後でちゃんと謝っておくし、礼も言っておかなきゃ。」

「え、結局原因は何だったの？」

「うづん、こづやって瑠螺蔚さんが僕のところへ来てくれたから、もういいんだ」

どうやら高彬は言いたくないみたいだし、下手に掘り返してまた不機嫌になられても困るからあたしは何も言わないでいた。

高彬の手が回されたあたしの腰の後ろで組まれて、そのまま引き寄せられた。肩に高彬の頭がのっかって、鎖骨の辺りに呼吸が当たる。

あたしはいきなり居心地が悪くなった。

なんか、これってちょっと…へんな雰囲気というか…いい雰囲気と
言うか…。いや高彬が相手じゃ色っぽいも何もないけれど！

「ちょっと、もう大丈夫でしょ？離しなさいよ。変なところ触ったら承知しないからね」

「いやだ」

あたしは耳を疑った。

それ…は離したくない、にかかると「いやだ」よね！？変なところ触るな、にかかると「いやだ」だったらぶつ飛ばすわよ！？

「離れたかったら、離れて。できればだけど」

「はあ？あんた頭イカレたんじゃないの？」

そう言った途端、強く抱きしめられた。

あたしはカッと顔が熱くなって、思いつきり？^{もが}いた。

今まで何とも思ってたけど、強く引き寄せられたせいで、ひよろっこいと思っていたのに思ったよりしっかりしている胸板や、あたしが思いつきり暴れてもびくともしない体なんかをしっかりと感じちゃって混乱していた。

「離してよ！離さない！」

痛いのか痛くないのか、^{おくび}？にも出さずに高杉はあたしの両腕を取った。

「兄上！」

「兄上、ね……」

あたしが思わず言つと、高彬がぼそりと低い声で呟いた。

「兄上兄上兄上あにっえ…瑠螺蔚さんはいつもそつだ！何かあるととしなり俊成殿に頼つて…。でも、僕ももう瑠螺蔚さんに庇つてもらつだけの童わらわじゃないよ。こつして、瑠螺蔚さんを守ることできるんだ。好きだ、瑠螺蔚さん。ずっと好きだったんだ…」

あたしは思わず動きを止めた。

動きだけじゃなくて思考も停止。

高彬は恥ずかしそうに少し笑つて言った。

「一生大事にするから、僕の妻になってください」

靈力3

「ぶ、ぶえーっくしゅん！」

盛大な嚏をした後にずずっとあたしは鼻水を啜った。

あ、頭痛いし、熱でボーっとする…。

「姫様。どうしてこの雨の中を歩いてこられたのですか。もう少しお待ちいただけたら、絹笠をお持ちいたしましたのに…もしくは菅笠でも蓑でもなんでも佐々家の方からお借りになられたらお風邪を召されるようなこともございませぬでしたのに…」

小萩は腕に何か注ぎながら、心配そうに言う。

「…」

だつてさ、しょうがないじゃんか…。

もうあたしもなにがなんだかわからなくて、高彬たかあきのぶつとんだ求婚
聞いて、咄嗟に何にも言わずにそのまま走って佐々家を出ちゃった
のよね。

雨が結構な勢いで降ってたと気づいたときは、混乱しすぎて方々彷徨
徨った挙句、前田家の軒先に駆け込んだ時だった。全身ずぶ濡れで
震えていて、やっと寒いという感覚に気づいたあたしは案の定風邪
をひいた。

高彬のせいよ。くそつ。

あいつが、あんな、あんな…ずっと好きだったとか、言うから…。

高彬は異性！って言うよりは弟、って感じで、今まで好きだの嫌い
だのって考えもしなかったけれど、そっか、高彬あたしのこと好き
だったのか…。

思えば直後に発六郎はつろくろうのことがあってすぽーんと忘れていたけど、高彬はうちの父上に結婚の内諾を取ってたんだけな…。「何度も頭を下げられて」とか父上言ってたような。

えっ、いつから？ずっとっていつから？自慢じゃないけどあたし高彬に好きになってもらうような態度をとった覚えはない。世話を焼いてた覚えと、迷惑をかけてる自覚ならあるけど。

そっかー高彬あたしのこと好きだったのかー…全然気がつかなかったなあ。あたし、高彬と結婚するのかな。

高彬は顔もぶつさいくではないし、若いし、禿げてないし、お腹出てないし、…ふーん。

高彬かあ。佐々家と前田家は仲がいいから、よもや相手が高彬なんて思ってもみなかったけど…。

ぼんやりと考えていると熱があがってきそうであたしは顔をしか顰めた。風邪じゃなくて慣れないことを考えすぎたが末の知恵熱なんではな

かろつかとさえ思えてくる。

「さ、姫様、葛根湯くわねとうです。お飲みください」

渡された薬臭い椀の中身をあたしが飲み終わるのを見計らって、小菘はそつと言った。

「さあ、暖かくしてお眠りになるのが一番です。小菘はずっとこうして姫様についていますから、安心してお休みください」

そうね、それがいいかも。

一度にいろんなことがありすぎて、体も重いしだるいし、もう眠るのがいい。

「小菘、ありがとう」

そう言うと小萩は照れたように笑った。

「これが小萩のお仕事ですから、姫様がお礼を言われる必要はございませんわ。遠慮されずに、しっかりお風邪を治されて、いつもの元気で明るい姫様に戻っていただければ、それだけで小萩は満足です」

本当に、感謝してるわよ。いつも…。

そう思いながら、あたしは泥のように重い眠りに沈んでいった。

靈力3(後書き)

葛根湯。「くずねゆ」と読み仮名を振っていますが所謂「かつこん
とじ」。

靈力4

倭は国の真秀ろばただなづく青垣山籠れる倭し麗し

ふと胸元で揺れる瑠璃の勾玉まがたまに気がついた。これと対になる日の勾玉は、真澄ますみがしていた。黄泉に旅立つ身の飾りに、御影みかげの亡骸から貰ったのだろうか。

真秀まほは声をあげて笑いそうになるのを辛うじて堪えた。

小由流こゆりゅうが教えてくれたとおりだった。この世では真向かうことを禁じられた、結ばれない恋人同士が持つ玉だと、小由流は、あの大津の墳墓の中で言っていたのだ。

真秀は勾玉を握りしめ、力を入れて引つ張った。紐はたやすく首の後ろで引きちぎれた。

燃え盛る炎の海目掛けて、真秀はその勾玉を放り投げた。

確かに、小由流の言ったとおりだった。同母いもの兄と妹として生まれた限り、真向かうことはありえなかった。だとしたら、いつか、あたしたちはこの島国の違ちがう部族ぶぞくに別々に生まれて育ち、こんな悲しい思い出など忘れて邂逅めくしあい、背負おうべき一族もなく、国もなく、唯愛しみ合う心だけを支えに、幸せになれるだろうか。

真秀の末裔と邂逅うその時まで、くり返しくり返し、黄泉返ると真澄は言った。

だとしたら、あたしもその時まで黄泉返り、佐保の血の一滴が潰えるその時まで黄泉返り、必ず真澄の末裔に邂逅う。

あたしたちは次の世で、それが叶わないなら、その次の世で邂逅い、この悲しい悪夢を断ってみせる。

あたしは馬によじ登って、吉野君を見降ろした。

血の気の失せた顔で、あたしを見上げている吉野君は、今まで見たどの吉野君より綺麗だった。

「今度会うときは、吉野よ。その時はあたし、最高の十二単姿で、すっかりお化粧して、とびきりの顔してるわ。こんな破れ坊主みたいじゃなくて。いつもはあたし、少しはましなのよ」

「そのままでも充分、可愛いですよ」

吉野君は言いよのない深い眼差しで、心にしみ通るような笑顔で言った。

「あなたはいつも、只、そこにいるだけで可愛いのです」

靈力4（後書き）

引用：氷室冴子著「なんて素敵にジャパネスク」「銀の海金の大地」
「古事記」倭建命が詠んだうた。

霊力5

あたしは目を開けた。

夢を見ていた。また、これだ。どんな夢だったか、覚えていない。起きた瞬間は覚えていたような気がするけれど、一瞬で全てがあたりをすり抜けてしまった。忘れちゃいけないと思うんだけど、結局覚えていることができない。

ただ、悲しい。悲しいという感情だけが夢の残滓ざんじとして頬を流れた。

ぼんやり横を見ると、小萩こはぎがいた。すうすうと寝息を立てて眠っている。

ずっとついていてくれたのかしら…。

光が明るく障子の外を照らしていた。今は昼…ぐらいかな。

ゆっくりと重い半身を起してみた。くらりと目眩がして、すぐ横になった。

もう風邪は治ったみたい。ただ寝すぎたのか体がやけに重い。

不意に小萩が目を開けた。目をこすって、疲れたように息をついて、あたしを見て、その目がぎょっと見開かれた。

「姫様!？」

「あ、な、なに？」

小萩はあたしに掴みかかる勢いでにじり寄ってくると、いきなり泣き始めた。

「え!?!なによ小萩どうしたの!?!」

「ああ姫様…起きていらっしやるのですね…よかった…」

「えっ、何が？あ、風邪のこと？やだそんなに心配してくれたの？
あたしはこの通り元気になったわありがとう」

あたしがニツと笑うと、小萩はなぜかもっと声をあげて泣き出した。

安堵の涙にしては大袈裟おおげさすぎるような…。

あたしはおろおろしてお腹のあたりに突っ伏して泣いている小萩の
頭を恐る恐る撫でた。

「どっ、どうしたの？そんなに泣かなくても…」

「いめはまおんとにおかったああ！」

「は？」

声が籠りすぎて全く聞き取れなかった。

「と、とりあえず顔あげて…どうしたっての？あたしは無事よ？」

小萩は涙でぐしゃぐしゃの顔をあげてあたしを見た。

「ひっ、姫様は7日も目をお覚ましにならなかったのですわ…」

「7日！？嘘でしょ！」

小萩を宥めようとしていた気持ちも吹き飛んで、あたしは飛び起きた。

「本当ですね。あんまり静かにお眠りになっていて、もしこのまま……」

小萩は声を詰まらせて、口元を覆い嗚咽おえつした。

あたしはどうも実感できなくて、茫然としてしまった。あたしの感じた時間の流れはあくまで、いつものように寝て、起きたぐらいのものなのだ。

じゃあ、この身体の重さも7日間寝てたから……？

そう気がつけばいやにお腹がすいていることに気がついた。

途端にぐぐとあたしのお腹が鳴ると、小萩はぽかんと目を見開いたあとにやっとなんか笑顔を見せた。

「えーと悪いけどなんか食べたいかな……」

流石に恥ずかしくて顔を逸らせながら言うと、小萩はすくっと立ち上がった。

「すぐにお持ちいたしますわ」

小萩が出ていったあとに、枕元に水が置かれているのを見つけてそれを飲んだ。

あーおいしい。ただの水だけど。

それにしても、あれから7日もたっているだなんてあたしただの風邪じゃなかったのかな…でももう熱もないし、ものすごい寝不足だったなんてことは…ないよなあ。

あたしははっとした。

姉上様や、義母上や…兄上は？あれから7日も過ぎたなら具合も少しは回復している筈。

考え始めるといてもたってもいらなくなつて、そつと立ちあがると最初に身体を起したときのような目眩はなかった。

よし。小萩には悪いけど、あの子のことだから持つてくるまでいろいろ気をまわして時間がかかるだろうから、その間にちょこつと様子だけ見てこよう。

あたしは最初に兄上のところに向かった。

「兄上…？」

遠慮がちに兄上の室の前で声をかけた。返事はなかったから、障子を押しあげたら布団に寝かされた兄上がいた。

もう昼も過ぎようかというころなのに寝ているのは、やっぱり体調が戻っていないからよね…。

そっと近付いてあたしは枕元に座った。

顔色は、悪い。血の気が通っていないような青白い顔で深く眠っているようだった。

あたしは手を伸ばして兄上の頬に触れた。兄上の瞼がゆっくりと持ちあがった。

あたしは兄上を起してしまったことに動揺してぱっと手を引いた。

「…瑠螺蔚か。目が覚めたのか」

兄上は小萩みたいに取り乱すこともなく、落ち着いていた。まるでいつも通りに目が覚めた妹に声をかけるように淡々としていた。

「兄上…具合はどう?」

兄上は上半身を起こした。

「もう、平気だよ。瑠螺蔚は、苦しいところはないかい?」

「あたしももう平気。でも兄上、まだ顔色わるい」

兄上はふっと笑った。

「瑠螺蔚こそ、姿見をみてみるといい。大分痩せた」

まあ7日も飲まず食わずで寝てたら誰でもそうなるだろうけど。

「それだったら丁度いいわね。今までの分を考えると」

「だめだよ。今までのままで十分可愛いから、痩せようなどと考えなくてもいいんだよ」

「かわっ…」

兄上がモテるのはこういうことを自然に言っちゃうからよね。しかも性質タチが悪いのは、本人は全くそんな気がないところよ。本当に女泣かせて手間がかかる兄上なんだから！

「そんなの誰にでも言っちゃダメよ」

あたしは鬻しかめつ面で兄上に言ったけど、兄上にはまるで暖簾のれんに腕押し、糠ぬかに釘。全く分かっているのか、いないのか…。

「瑠螺蔚るるあにしか言わないよ」

「だっ、から！そういつところが…」

「瑠螺蔚にしか言わない。問題ないだろう？」

兄上はにっこり笑った。

確かに、恋愛対象外の妹にしか言わないなら問題、ない、けど…。
ん？問題ないのかしら…なんか丸め込まれているような。

351

昔から兄上に口で勝てた例ためしなんかない。

「みんなに『キミだけが特別だよ』って言っているのは悪い男だからね！」

「だから、私は瑠螺蔚にしか言っていないと言つた」

兄上は楽しそうに声をあげて笑った。

あたしはそこでやっとほっとした。兄上は生きてる。よかった。生きてここにいる。

あたしはずりずりと兄上に寄ると、ぺたんと横からくっついた。

「どうしたの」

兄上は小さい頃のように、片手であたしの頭を撫でながら優しく聞いた。

「兄上…死なないでね」

あたしはぼつりと言った。

「姉上様も、義母上も、父上もみんな大切だけど、兄上も自分を大事にしてね。霊力ちからがあつたつて、何だつて、兄上はあたしの大事な兄上なんだから。死なないでね」

兄上はあたしを見ると、柔らかく微笑んだ。

「死なないよ」

あの悲しい夢を見始めてからいつも気持ちの奥底に何かに対しての不安があるみたいだった。

何か、とても大切なものを失ってしまうような、確信のような予感が。

兄上がいきなり顔をあげた。

その体が緊張で強張るのがわかった。

え？

あたしは訳も分からずに兄上を見上げた。兄上は瞬まはたきもせず空を見
ていた。けれど、その目は確かに何かを捉えているようだった。

霊力。また、霊力。命を削っているのではないの？こんな弱った状
態なのに、一体何のために霊力を費やしているの。

「瑠螺蔚」

なにかを視ていると思っていた兄上は、唐突に声をあげた。

「なに？何か起きてい」

「火事だーーーーーっ！」

あたしの声は大きく割り込んできた声に掻き消された。

火事！？あたしは慌てて腰を浮かせた。

咄嗟に兄上を見て、違和感に首を傾げた。違和感の答えはすぐに出た。あたしを見ている、兄上の目の色が、綺麗な瑠璃色に染まっていたのだ。

一瞬呆気にとられたけど、今はそんなことどうでもいいと気を取り直した。逃げるのが先よ！

「兄上！はやく逃げなきゃ！」

あたしは兄上の手を引っ張った。けれど、兄上は静かにあたしを見詰めるだけで動こうとしない。

「兄上！あの声が聞こえなかったの！？火事なのよ！規模は分からないけど、逃げなきゃ！」

そんなことを言っているうちに、あたしははっとした。開いている障子の向こう、庭を挟んで対の部屋が、燃えているのだった。

黒く煤^{すす}を出して、炎は静かに燃えていた。風向きなのか、煙は反対側に流れているようでこの部屋からは煌々と燃える炎と、黒くけぶる煙を見るのみだったがいつそれが変わるとも限らない。

「兄上！」

あたしは焦れて叫んだ。

すると、ふいに兄上は訳のわからないことを言いだした。

「真秀、後世でも僕たちの宿業は変わらないのか」

その蒼い瞳ははっきりとあたしを映していた。あたしは混乱した。兄上は何を…視ているの？

「あたし、真秀じゃない…」

短い沈黙の後、あたしがようやくそれだけ言うと、兄上は微笑んだ。

「あに、うえ…？」

なんだか、おかしい。兄上だけど、なんか違う。

「魂の軛を弾くよ。今の僕の霊力では、ほんの一刻しか外せないけれど…思い出して。全て」

兄上はあたしの頬に手をあてた。その瑠璃の瞳が淡く鈍く燐光を放つ。

閃光のように悟った。兄上は靈力を顕あらわそうとしている！

あたしは目を瞑つむって顔を背けた。

「やめてっ！靈力を使わないでっ！」

咄嗟に感じたのは恐怖だった。兄上に、これ以上傷ついてほしくないのに！

ぐらりと地面が揺れる。自分がどこに立っているのかもわからない。いや、立っているのか、座っているのか、それすら曖昧としてわからない。

体が熱い。胸のあたりが燃えるように熱い。頭もがんと打ち付けられるように痛みだした。

そのまま、なにも、わからなく、なって…くる…。

あたしは…。

霊力5（後書き）

後世。のちよと振りましたが。振り仮名は造語です。勝手に振りま
した。

ストーリーをだいぶ削りました。
やっぱり改稿すると変わってきますね…。

輪廻 1

日の昇ると呼ばれた国のある年の暮れ、淡海の湖が凍った極寒の夜明けに、あたしは生まれた。

戦国と呼ばれている瑠螺蔚が生きる今からは、1200年も前の事である。

まだ、神々の靈力がそこかしこに満ち満ちていた頃だった。巫女も多く、人は神を畏れ、精霊を信じた。今よりも、もっともっと神は身近だった。

母の御影によつて、あたしは名を真秀とつけられた。真澄という歳の離れた同母の兄もいた。真澄の外見はこの上なく美しく、しかしその代わりに目も見えず、耳も聞こえず、口もきけない神々の愛児だった。

親子三人で、淡海でひっそりと暮らしていた。

淡海国は、息長おきなながという一族が治めている土地だった。子は母のものとなる。御影は息長の一族ではなかった。余所者はどの時代も変わらず集団から弾かれ、後ろ指を指される。

業病に侵されて動けない御影と、目も耳も口も使えない真澄のかわりに、あたしは幼いころから身を粉にして働いた。そうしなければ生きていく一粒の米さえ手に入らなかったから。味方はいなく、石を投げられいじめられる生活だった。けれど決して辛くはなかった。二人がいたから。

そんな中で、育ったあたしはいつしか夢をみる。

自分がいじめられるのは仕方がない。だってあたしは息長の一族じゃないのだから。ただ、御影にも一族がいるのなら会ってみたい。そこは、きつとあたしたちを拒絶したりしない。

「おまえ、真秀とか言ったわね。もう、出ておゆき。見なければよかつた。佐保さほの女の姿など」

「佐保さほつて、なんなの」

ようやく、それだけを言うのがやっとだった。

すでに背を向けていた氷葉ひば州姫は、意外そうに振り返った。

「おまえは佐保の出でしょう？隠かくさなくてもいいわ。別に、おまえをどうかするつもりもないわ。只ただ、見たかっただけよ。佐保の女とやらは、どれ程美しいのかを」

「じゃあ、御影は佐保とかいう一族の出なの？その一族は今もあるの？」

茫然として問い返す、その声がか細く震えた。

御影が属する部族。母なる部族。

それは、真秀がずっと知りたがっていたことだ。

父がヤマトの大豪族の首長おびとだというのは知っている。でも、御影や真秀達母子をとうに捨てた男だ。そんな男の一族に未練はなかつた。

でも、母の御影が属する部族がありさえすれば　その一族なら、自分たちを同族と認めてくれるだろう。

なんといつてもこのヤマトの国の族うぢは、みなみな母の血で結ばれているのだ。どの一族もそうだ。息長いさながだってそうだ。

息長の女にも、他部族の男が密かに通つてくることがある。息長の男たちは内心、面白く思わない。

だが他部族の男でもいと女が決めてしまえば、誰も口出しできない。やがて子が生まれる。

そうすれば、それは息長の子なのだ。決して、通つてくる男の一族には渡さない。子は、母なる部族に属するのだ。だから、和邇わにを父に持つ真若王まわがも美知主みちのうぢも、息長の王子なのだ。父に繋がる和邇族ではない。

それは、神代かみよの頃から定められた神々の掟おきてだ。
聖きよらかなものも、卑しいものも、全ては母の血から伝わるのだ。
だから、御影が属した部族がありさえすれば、その一族はちゃんと認めてくれるだろう、真秀や真澄は同族だと。
息長むすながの邑むらでヨソ者だと思ひ知らされる度に、真秀はいつも思っていた。御影の本当の一族がありさえすれば、と。

春日かすがなる佐保は確かに御影の母族だった。

けれど、あたしの希望は粉々に潰えた。

佐保は、ヤマトの他のどの族よりも、神々の靈威れいゐに満ちた族だった。そのかわりに、同族としか逢わず、他族の血を嫌って生きのびてきた族だった。

御影はその、佐保の姫だった。

御影の母の加津戸かした売は、子を産むときに予言をしていた。

『私の今から産む見のうち、靈力の無い見の方は佐保を滅ぼす見を産む』

双子で生まれた見のうち、片方は予言どおりに靈力を持たなかった。それが御影だった。

御影の産んだ見、あたしと、真澄。

その強大な靈力で以もって佐保を治める巫女姫に予言された、滅びの見だった。

佐保は御影を追放したのではなかった。殺そうとした。滅びの子の真澄を、産んだ罪によって。

真澄をも殺そうとした。滅びの子という理由で。

そして、一目見ただけのあたしをも憎むのだ。滅びの子だから。

その憎しみの松明まつを掲げて立ち塞がるのが、佐保の王子、佐保彦さくはるひこなのだ。あの、真澄にそっくりな王子、真澄の異母弟の王子が、あたしたちを憎んでいる……。

何もかもが流れて行く。変わって行く。動いて行く。

確かなものは、憎まれているということ。“滅びの子”という、予言だけだと言うのか。あたしたちは、帰るべき古里ふるさとを持たない忌まれ子、禍まがつ子なのか!?

互いに憎み合い、傷つけあいながら、いつしか、あたしと佐保彦は愛し合うようになる。

信じられなかった。けれど、ごまかせない位に大きくなっていった気
持ちから目を逸らし続けることはできなかった。

その矢先に、御影が長くないことを知り、あたしたちは佐保に行つ
た。最後までらい佐保で過ごさせてやりたいと思つたのだ。佐保彦も、
守ってくれると言ってくれた。

御影の死の間際、あたしたち全ての真をひっくり返すような話を聞
く。

本当は、御影の方が靈力を持つ身であつたけれど、妹姫である大閻
見戸売くひみとめを殺されたくないが一心で、その靈力を大閻見戸売くひみとめが顕わし
ているように見せていたこと。

それは、つまり、大閻見戸売の産んだ、佐保彦佐保姫の兄妹こそが
予言された滅びの子であるということを知ってしまった。

御影が死んだその夜、真澄とあたしで伽とをした。沢山の話をした。

そのあと、佐保彦が来た。そこで、あたしと佐保彦は共寝ともねした。

幸せだった。

けれど、翌日、真澄がいないのだ。何度呼びかけても返事がない。

今眼前いままなさきに展ひらかれています。幻影まぼろしの全てを、彼は静かに受け止めようとした。

だが、もう魂が凝らせない。真澄は木棺に寄りかかったまま片手で額を押さえた。今在る世界が砕け散る音を真澄は確かに聞いたと思っただ。砕けてしまった。なにもかも……。

真秀は呼ばなかった、兄の名を。真秀は選んだのだ。愛いづくしむ唯一の者を。

それによって、私の選ぶ道は決まってしまった。いや、とうに決まっていたのだ。御影によって顕かにされた真言まことごとを知ったときに。それより前、佐保彦が淡海に現れた、その時から既に兆はあったかもしれない……。

真澄は燃え上がる炎の中にいた。

自分の意思でそこにいるのだ。なぜ!?

真澄を死なせたくない。そんなのは嫌だ!

(死なせて欲しいんだ、真秀)

魂を震わせるように伝わってくるのは、黄泉路に翔り去ろうと言
う真澄の呟きに思えた。真澄の死は既に動かしがたい。

なぜなら真澄は生きることが望んではいない。死ぬことを、そし
て甦よみがえることだけを一途に願っているのだから。

(今、これから生まれ出る、最も濃い血の者に、僕の魂が依りつく
ことを願って、死なせてほしい……。真秀ならできる…甦よみがえりを……)
「甦よみがえる…甦よみがえってどうするの、真澄!？」

(きつと甦よみがえり、僕は必ず、真秀に返あう。次の世で返あえないのなら、
その次の世で必ず、真秀の末裔すえに返あう。時を越すえて必ず返あう。その
ために幾度も甦よみがえる…佐保の甦よみがえりの血が潰つぶえるまで……)

立っている真澄の身が、ぐらりと揺れた。

真秀はよろめきながら立ち上がり、周りを見渡した。燻くすぶって煙を
あげている藪竹の繁みの中に、梓こわゆみの強弓と矢一筋が落ちていた。熱
に炙あられ煤けてはいるが、確かに弓矢だった。

それを掴み取り、真秀はゆっくりと顔を巡らせて真澄に真向まかっ
た。

炎の中に立つ真澄が仄かに笑ったような気がした。煽あられる炎の
熱で、真澄の周りの風が歪み、真澄の面さえも歪んで見せているの
だ。それはわかっていた。

それでも真澄が甦よみがえりを信じて笑っているように見えた。

真秀は嗚咽むせびなきながら、何かに背を押されるように矢をつがえた。

輪廻1（後書き）

引用：氷室冴子著「銀の海金の大地」

イマイチわからなかったひとは読みとばしていただいても大丈夫だ
と思います。

短く説明するには設定が難しすぎるので…。

輪廻2

真秀まほと名付けられた人生、生きとし生ける全ての者に必ず終わりが来る。

いくら強大な霊力ちからを持っていようと、命の潰えはきた。

肉体は滅びても、魂めくは廻る。

瑠璃るりと名付けられ、人の世に生まれ落ち、縁えにしを手繰たくり、再び灯ともしびは消え、そして。

あたしは生を受ける。

戦国いくばくのへ、前田家の瑠璃蔚姫るりいとして。

途轍もなく長い長い時間を過ごしたような気分だった。

生と死を何度も経験したような、感覚。

ぱっと暗闇が弾けた。

現実が、戻ってくる……。。

深緑の襟元が見えた。それを上に辿ると、鎖骨が見えて、傷一つない白い喉が目に入った。

あの時あたしが放った矢は、まっすぐここに突き刺さった……。

「ますみ」

言葉は考えるより早く唇から落ちた。

「真澄！」

あたしは目の前の首元に顔を埋めて泣いた。

なんだろう。どんな気持ちなのか、自分でもわからない。嬉しいのか、悲しいのか。あたしは、誰なのか…。

あたしはあたしでしかないのだけれど。真秀も、瑠螺蔚も、確かにあたし。あたしではあるのだけれど、今は瑠螺蔚だからなのか、真秀のことは何か触れない布に隔てられた向こうで起きていることのような、そんな不思議な感覚だった。

「真秀」

兄上は優しくそう言った。

あたしは応えずにただ縊る。もう離れないように。

「目が、見えるのね。耳も聞こえて、声も出せるのね。よかった。よかった真澄……」

「真秀。今の僕の霊力はないに等しい。真秀の記憶を引き出したのは、ほんの一次的なものだ。すぐに戻ってしまう」

「戻って？」

あたしはふと思いついて、霊力を使おうとした。けれど、なんの手ごたえもない。

「あたしに霊力はないの？」

「今の瑠螺蔚にはないよ。真秀は僕の甦りを願う時、僕の身を守れるくらいの霊力を併せて流し込んだんだ。逆に真秀は自分が死ぬ時霊力の潰えを願った。だから僕だけ使えるんだ。覚えてる？」

「覚えて、ないわ…ただ悲しくて…必死だったから」

思い出すと、胸が心臓を握りつぶされたかのように痛む。

あたしは真澄を救うことができず、この手で殺したのだ…。

「もうあんな思いはしたくない。あたしたち、ちゃんと甦ったのよね？幸せになるために…」

言いながら語尾は小さく消えた。何の因果か、瑠螺蔚あたしと兄上ますみは、実の兄妹として生まれてしまった。母も、今度は父も同じ…。

瑠螺蔚あたしは、兄上のことを恋愛対象としては一切見ていなかった。兄弟として生まれた以上仕方がないけど…。

「瑠螺蔚」

その言葉と同時に強く抱きしめられた。

触れた身体は、氷のように冷たかった。

「真澄！」

あたしは思わず声をあげた。

「忘れてしまっただろうけど、最後に思い出してほしいかった。この、ほんの少しの間だけでも」

真澄は笑った。儂い笑みだった。真澄は、何かを覚悟している。なにを？

「な、に言ってるの？最後って、真澄……」

「瑠螺蔚、私はいつでもおまえの幸せを願っているよ」

額に真澄の唇が触れた。それが頬を辿り、あたしの唇と重なった瞬間、身体が引っ張られるような浮遊感に包まれた。霊力！

真澄はあたしを翔ばそうとしている！

あたしはそう直感した。

なぜだかここで離れたらもう二度と会えない思いに駆られて、必死

で真澄の着ていた濃緑の衣を意識してしがみつく。

「やめてー！ー！ー！兄上！」

（真秀。僕の身体はもう、持たない）

あたしの意識も朦朧としてきた。淡々と聞こえるその声すら、薄い霧もやの向こうから聞こえてくるようでしかない。

「嘘！」

（本当だよ。霊力の限界を超えてしまったんだ。でも、こつなるこつとはわかっていた）

「うそよ嘘！そんなの絶対に信じない！」

(ずっと一緒に、生きていたかった。 瑠螺蔚)

「やめて！これからずっと一緒に、そっでしょっ！...そっと言っ
て！」

体の感覚がどんどんなくなってくる。けれど絶対にこの手だけは離
したりしない。

最後なんて信じない。

だって、死なないって言った！兄上は、あたしに向かって死なない
よと言ったのだ。

あれがあたしを安心させるためだけについた嘘だったなんて、信じ
ない！

「死なないって、言ったでしょ！？兄上！死なないと！」

(そうだね…ごめん)

「違う、あたしは…謝ってほしいんじゃない…そんなのじゃなくて、ただ…あたしは…兄上…」

あたしは、手を握っている筈だ。握っていないきゃいけない。兄上の衣を。バカなことを言う兄上を抱きしめてそれから怒らなきゃいけないんだ。

(瑠螺蔚)

いやだ。声が遠ざかる。待って、いけないで。こんなの絶対に信じない。兄上…。

輪廻3

遠くで馬の嘶いななきが聞こえた。

それを呼び水に、意識がゆっくりと覚醒する。

え…っと…なに、してたんだっけ…。

なんだか最近、こんなことが多いような…。

目を開けると、土臭いにおいと共に、そぞろに生えた草がとびこんできた。草…草!?

あたしってばなんてところで寝てるのよ!

あわててがばりと起き上がると、固く握りしめた左手に気がついた。指を開こうとしたけれど、余程強く握りしめていたのか痺れていて

動かない。感覚のない指をやっと開くと、あたしの掌の真ん中にくすんだ皮紐のついた瑠璃色の勾玉があった。

なんで、あたしはこんなものを握っているんだろう？あたしの？
んなの持ってたっけ？

あたしは首を捻りつつそれを首にかけた。胸元に収まった勾玉を、指先で抓んでくるりとまわしてみる。

瑠璃色。深い、蒼あおの…。

はっとあたしは顔をあげた。

兄上！

怒涛のように記憶が戻ってきた。青ざめた顔の兄上。瑠璃色に光る瞳。その兄上がマホとかノチヨとか、なんだかよくわからないことを口走って、それから？

さーと血の気が引いて行くのを感じた。

え、待ってあたしなんでこんなところにいるの？火事、って誰かが叫ぶのが聞こえたのよ。そしたらまた兄上がわけわかんない事を言いだして…。

それからの記憶がない。

慌てて周りを見渡したあたしの目に明々とした炎が目に入ってきたとき、凍ったように呼吸が止まった。

轟々と燃え盛るその炎の中心は、間違いなく前田家だった。

あの中に、兄上がいる！

確信を持ってあたしは悟った。

そう思ったその一瞬で反射のように飛び起きた。

その目の前に、ふいに馬の脚があらわれた。あたしは目を瞑った。
蹴られる…！

けれど、あたしは蹴られなかった。かわりに馬上の人が馬に振り落とされていた。あたしに気づいて咄嗟に手綱を引き、驚いた馬に振り落とされたのだろう。

男は盛大に舌打ちしてすぐに起き上った。何かを叫んだが、聞こえなかった。

その口の開閉で何かを叫んでいることはわかるのだろうけど、聞こえない。音がない。あたしの裸足の足が地べたの砂利と擦れる音も、騒然とする人のざわめきも、燃え上がる炎の音も。

あたしは目の前の男を突き飛ばすように走りだした。

あたしの心はただ兄上に向かう。あの炎の間中まなかにいる兄上へと。

やけに自分の動きがゆっくりに感じて焦れた。はやく、はやく。はやく助けないと。

兄上には霊力があるから大丈夫と、そんなことも頭をよぎったけれどなぜか不安だけが増した。

そうだあたしは不安なんだ。なぜか。そしてなにか抗えないものにおそ惧れている。あたしの力ではどうにもならないようなことに、絶望している。

いや、違う。あたしは絶望してしまわないように今走っているんだ。

誰かにあたしはぶつかって、その人と一緒にもんどりうって転げた。体を支えようとした手のひらを強かに擦ったけれど、あたしは即

座にはね起きてまた走りだそうとした。その時、腕を掴まれた。

「離してっ!」

振り払った腕をまた掴まれた。強く。何か叫んでいる。やめてよ離して!あたしは我武者羅に腕を振り回した。

次の瞬間、頭に響く強く激しい衝撃で、あたしははっと動きを止めた。頬にじいんとした痺れが熱く広がる。

「なつ溜螺蔚さん!」

一気に世界が音を取り戻した。ばかりという屋敷の崩れる音、切羽詰まった人の声、入り乱れる足音、そういうものがすべて一斉に溢れだした。

あたしは腕を掴んでいる人を見た。たかあき高彬だ。

あたしはカツとなって腕を振るっただけれど高彬は離さなかった。

「離してー！」

「しっかりしてくれ！どこへいくんだ、瑠螺蔚さん！」

「兄上がまだいるのよ、あの炎の中に！」

あたしの言葉に高彬は険しい顔のまま、ぴくりと眉を動かした。

「としなり俊成殿は無事だ」

そう、静かに言った。

「うそよ」

その言葉は口をついて出た。そう思って言ったわけじゃなく、考えるまえになぜか零れた言葉だった。

嘘。

涙が流れた。

悲しみが、堰を切ったように心に渦を巻いた。

「嘘じゃない。だから、とりあえず佐々家でもいい。どこでもいいから、安全なところに……」

「嘘よ。あなたは、嘘をついている。あたしにはわかる。離して！」

あたしは思いっきり高彬の頬を打って突き飛ばした。

高彬が驚いたようによろけて、その手があたしから離れた。

あたしはすかさず走り出そうとしたけれど、高彬に肩のあたりを掴まれそうになってごろごろと転がった。

すぐさま起き上ろうとしたけれど、高彬に馬乗りになられて肩を押しさえつけられた。

ばたばたと手足を暴れさせてもひっかいても叩いても高彬は動かなかった。

自分の無力さに涙が出た。

「なんで邪魔するのよ！どいて、はやく！」

「しっかりとするんだ瑠螺蔚さん！落ち着いて」

「あの中に！兄上がいるのよ！兄上が！」

「瑠螺蔚さん！」

あたしは高彬を睨みつけた。今まで、こんな気持ちを高彬に抱いたことはなかった。

あたしを邪魔する高彬が、いま、憎いんだ！

胸元が、カッと熱くなった。

「ジュッー」

あたしが叫んだら、何もしていないのに、ふわりと高彬の身体が浮き近くの塀に叩きつけられた。

「キヤーーーーーっ!？」

悲鳴が聞こえ、あたしは走りだした。もう屋敷は目の前なのだ。どこもかしこも炎に巻かれて門すら入口ではないけれど、兄上待っていて、助けに行くから!

「誰か瑠螺蔚姫を止めろっ!絶対に行かせるなっ」

高彬が後ろからそう叫んだ途端に、あたしは4人の男に次々と体当たりをされて地面に押さえられた。

高彬が近付いてくる。ぶつかった衝撃か、髪がほどけて散らばっていた。

高彬は、地に這い蹲^{はつくば}るあたしの目の前に立った。煌々と燃える炎で、

熱くその髪が煽られる。

「…」

あたしはすくつと立った。上に男が4人も乗っていたというのに、物ともせず。男たちはばらばらと落ち、あたしを恐怖で満ちた目で見た。

常識では考えられないこと。あたしは兄上のような靈力もないし、なんでこんなことができるのかわからない。けれどそんなことは今のあたしにとってはどうでもいいことだ。

「どきなさい高彬」

高彬は苦しそうな顔をしていた。

あたしは高彬の目の前に立ち、もういちど、弾きとばそうとして―
…目を見開いた。

「じめん」

高杉は、本当に苦しそうにそう言った。その手は、あたしの腹部に
食い込んでいた。

猛烈な吐き気と、息が詰るように意識が朦朧としてくる。

あたしは高杉の腕の中に倒れこんだ。

「…じめん」

吐き気はあっても、吐くものがない。7日間も眠っていたらしいあ
たしには。

あたしはどろどろとした液体をえずきながら吐きだした。

目の前には、轟々と燃える炎の海がある。あの中に、兄上がいる。

気を失ってはだめ。兄上を助けなければ。

走りたい。走って、あの炎の中に飛び込んで、兄上を助けだしたい。

なのに、身体が動かない。悔しい。悔しくて、悔しくて、あたしの頬を涙が溢れた。もう瞳も開けないのに、涙だけが後から後から伝った。

「あに、う、え」

かすれた声で呟いた、それが最期かもしれなかった。

輪廻3（後書き）

拍手いつもありがとうございます。

改稿前の方がなんだかテンポがある気が…。
悩みます。

輪廻4

死ぬって、なんだろう。

命がなくなること。その意味を、失う辛さを、あたしは今までも経験してきた。実の母上が亡くなられた時の戦でも、その痛みを嫌というほど思い知った、その筈だった。

けれど。

死ぬって何だろう。生きるってどういうことだろう。

この目の前の煤けた骨が、兄上だと言っの？

この、軽くて、触れればぐずりと粉れる骨が？兄上の身体をつくっていた骨で、あたしの身体にもある、もの？

わからない。わからないわからない。

これが兄上と結びつかない。隣の骨は義母上のもの？それだって、わからない。義母上はこんな骨じゃ、ないよ……。綺麗な人だった。優しい人だった。それでも、もう笑いもせず、喋りもせず、こうして、ただ白く風にとけるのみなのだ。

人間って、死んだらどうなってしまうの。

ここには、兄上も、義母上もない。薄情かもしれないけど、あたしは二人の器じゃなくて魂に会いたいよ……。

涙も出ない。

実感がない。

ただ一つだけわかるのは、あたしがどんなに心の底から願っても、二人には二度と会えないってこと、それだけだ。

あれからもうはやいもので三月みつきが過ぎた。

あの火事は火のまわる勢いははやかっただけけれど、誰かが「火事だ」と知らせて回ってくれたので、大勢の人が無傷のまま逃げられた。

けれど。

義母上は発六郎に斬られた傷がもとで寝込んでいた。火の手が上がったところ、侍女がついていたらしいのだが、火事と言う声を聞いて一人でさっさと逃げ出してしまった。そのままどこかへ行ってしまったらしく探させてはいるらしいけど、その侍女の行方は今も知れない。

義母上の姿が見えないと誰かが気づいた時にはもう遅かった。火は屋敷を飲み、煙で先も見えない位だった。それでも義母上を、そして兄上を助けに向かった者もいた。皆戻ってこなかった。

そして、義母上の部屋と、兄上の部屋があつたあたりから骨が出てきた。

住む家がなくなった父上は、一番近くにある淡海国内の前田の分家にいつている。

あたしは、佐々家に住まわせてもらって一日中ぼーっと過ごしていた。

目覚めてから、そして今も、なんだか夢の中のような、そんな気がしてあたしは現実と向き合えないでいる。

たまに川べりを歩いて、ただつつ立ったまま、黒く煤けた土が残る前田家があつた場所を見る。

何かを考えてはいるんだろうけど、何一つあたしの中に残るものはなくただ時間だけが過ぎ、ふらふらとまた佐々家に戻る。

みんなには大分心配させて、迷惑かけてはいるんだろうな、と思う。

けれど、なんだろう。何をしていても、心の底からの言葉が出てこない。笑うことも、泣くことも、怒ることも、必要であればするし求められれば応じるのだけれど、それにあたしの心がない。

特に高杉たかあしには、あらかじめ与えられた草紙を読むような、淡々とした声しか出てこない。

きつと、あたしは高杉を許せないんだと、思う。

兄上を助けに行こうとしたあたしを止めた高杉に。

頭ではわかってる。高杉が正しいんだ。あの時あたしがあの炎の家に飛び込むのは自殺行為だった。きつと、兄上のところに行き着くこともなくあたしも倒れ骨まで燃えつくされていただろうなんてことはわかってる。できることなんて、水を川から運んできてかけるぐらいだったろう。

でも、あたしの感情が納得しないよ…。

高杉のせいじゃないのに、むしろ感謝するべきかもしれないのに、高杉を前にするといろんな感情が激しく渦を巻く。それに蓋をしよつと心がせめぎ合う。

高杉は悪くない。高杉は悪くない。高杉は悪くない。高杉は悪くない。誰も、悪く、ない。

誰かを悪いとするなら。

あたしが悪いのかな。

兄上は、霊力があつた。強い霊力。自分を一瞬で他のところへ移動できる霊力や、人間を癒おちさせたり、見えないはずのものを視たり…。

だから、火事で亡くなるなんて思いもよらなかった。絶対に逃げてくれているとそう信じてた。

けれど、霊力を使った兄上は衰弱してて、それで逃げ遅れて死んでしまった…。

そうだ、死んでしまったのだ。

あたしが目が覚めた時に屋敷から大分離れたところにいたのはきつと兄上が翔とばしたからだろう。バカな兄上。もし、一人翔とばせる靈力しか残っていなかったのなら、あたしなんか構わずに自分ひとり翔とんで逃げていれば助かったのに…。

二人でいたら、一緒に逃げることも、何か方法を考えることもできたのかもしれないのに。

ねえ、なんで兄上、死んでしまったの。

ふと気がつくと、空に月が出ていた。

凍えた空に月明かりは鋭く美しく映る。

あたしはそれに誘われるようにふらりと歩き出した。

門番もなぜか居眠りしていて、あたしは誰に咎められることなく佐々家を出た。

直土じかうちの冷たさが足の裏をきりきりと刺して、あたしは裸足で出てきたことに気がついたが、すぐにどうでもよくなった。

何かに背を押されるようにふらふらと歩き続けて、ふと気がつけば、

目の前に湖ウミがあった。

湖面は月光を反射し、てらてらと底知れず不気味に光っている。

黒い水面は、どこまでも終わりなく続くように広がっていた。

まるで、湖ではなく、海ね…。

『明けない夜がないように、止まない雨もない。一番暗いときは、一番夜明けに近いときだ。この世界に、怖いことなどなにもないよ。顔をあげて、るい溜螺蔚』

兄上…！

涙が滝のように溢れだした。

絶えず流れ胸元にまで沁みこむ。

幼かったあたしに、兄上はゆっくり噛み砕くようにそう話してくれた。

兄上、兄上、兄上、どうして。

死なないと、あたしに言ったのに。

あたしは、ふらりと一歩踏み出した。

水がぱしゃりと跳ねて裾を濡らす。

二歩、三歩…水はゆっくりと深くなり、足をのみこんでいく。

なに、してるんだろう、あたし…。

身を裂くような冷たさが腰までくる。水はやがて胸まで。

水に揺れて勾玉が浮かんだ。

静かな波は頬を濡らし、ついに足の届かないところまで来た。

あたしはがぼりと大きく水を飲みこんだ。

『ねえ真秀、あたしを抱きしめて。黄泉神のように。生きること
は難く、死ぬことは易く、だから生きなければと思うわ……。』

そう言ったのは、誰だったか。

確かにそうだ。死と生は紙一重の差だ。表と裏、影と光のように。
それは限りなく近く、そして確かな隔たりがあるのだ。

生まれる命があれば失われる命もある。死とは生きていくその隣にいつもある。それを選ぶのは簡単で。

そして今、あたしは死に向かおうとしている。

何やってるの、まだ間に合う今すぐ踵きびすをかえすのよとあたしが言う。

このまま死にたい、兄上と義母上に会いたいとあたしが言う。

二人のあたしが、正反対のことを言う。

そのせめぎ合いの中で、くらい、くろいいるが、どっぷりとあたしを包んでいく。あたしを飲みこんで、侵食してゆく……。

「兄にいさま様！兄様！」

「ん？なんだい、瑠螺蔚？」

「瑠螺蔚ね、大きくなったらね、兄様のお嫁さんになるの！」

「嫁？」

「そーだよ。それでね、どこかでね、お屋敷たてて、兄様と二人で暮らすの。ふふ」

「ははは。いいの？私で」

「うんっ！瑠螺蔚兄様好きだし、大好きな人とは、夫婦めおとになって、一緒に暮すんだよ！」

「：そうだね、瑠螺蔚。二人で、小さな屋敷でも建てて、一緒に暮らせたら、どんなにいいだろう。山奥でも、ひっそりと静かに暮らせるのだったらどんなにか嬉しいだろう。愛しい人と、一緒に暮らせるならば、貧しい暮らしでも、とても、とても、幸せだろうね」

兄上の縁談が整ったのは、そんな頃ではなかっただろうか。

幼い日々は、今はあまりにも遠すぎた。

輪廻4（後書き）

引用・『銀の海金の大地』 氷室冴子著

かくとだに1

雪が思い付いたようにぱらりと降ってはすぐにあがった。

僕はため息をついた。

毎日がこんなに鬱陶うつとうしかつたことが今までであっただろうか。

ここ最近、ずっとそうだ。

あの時。昏々と眠り続けた瑠螺蔚るいすいさんが目を覚ました時、僕がどんなに安心し、嬉しかったか、きつと瑠螺蔚さんにはわからないだろう。

瑠螺蔚さんが目を開けず息もしているのかさえも不安な間、どんなに苦しく辛かったか。

「瑠螺蔚さん！」

僕は瑠螺蔚さんが目を開けた時と聞いた時、まず夢じゃないかと疑って、会って夢じゃないと知って、不覚にも涙ぐんでしまった。

医^{くすし}からは、『お体の方は大きな問題はないようです。しかし、お心の傷の方が大変重大です。大丈夫だとは思いますが、もしかしたらこのままの可能性もございます』という何とも頼りない言葉を聞かされていただけあり、安堵はひとしおだった。

瑠螺蔚さんは僕を見^み留^とめると、かすれた声で小さく何かを言った。

「え？どうしたの？何かして欲しいこともあるの？」

嬉しさのあまり、望むことはなんでも叶えてやるうと言う気になって、耳を近づけると、瑠螺蔚さんは「ご足労いただき申し訳ございません」と言っていた。

僕はすぐに笑い飛ばした。瑠螺蔚さんが起きたというのを知って、気が高ぶっていたんだろうと思う。

「何言ってるんだよ、瑠螺蔚さん」

「申し訳ございませんが、お引き取り願えますでしょうか」

これも瑠螺蔚さんが言った言葉だ。

僕は、瑠螺蔚さんがふざけているのだろうかと思った。

もしくは、僕を別の誰かと勘違いしている、とか。

それでなくても母と兄を亡くしたのだ。僕が来るまでに誰かから知らされたかもしれないし、まだ知らなくてもその日はとりあえずぐ部屋に戻ることにした。

次の日、僕は桑葚くわいちしを小さな籠かごいっぱい持って瑠螺蔚さんの所へ向かった。少しでも慰めたかったから。

今までの瑠螺蔚さんなら、「あら、なに持ってるの?」と目ざとく気づき、「きゃーなになに食べていいの?ありがとう!」と嬉しそうな顔を見せるはずだ。

あとから考えても、僕はやっぱり浮かれていたんだろうと思う。瑠螺蔚さんが起きたことに。会える嬉しさに。

僕だって、俊成殿としなりやあやめ殿が亡くなられたことは悲しい。けれど、僕は、いやこの戦国を生きる男は多かれ少なかれ、死というものものが日常の一部一部になっているのだ。悲しいと思う心ももちろんあるが、そのなかにも冷静で褪さめた心があり、どこかで仕方がないことだと諦あきらめている。死に抗あまがうことに。

命を奪うこと、奪われること。死こそが日常であり、それにいちいち嘆いてはられないのだ。慣れなければ生きていけない世の中なのだ。

それが大切に思う人なら話は違ってくるとは思っけれど。

だからその時、家族を亡くしたばかりの瑠螺蔚さんと大切な人が目覚めた僕の気持ちには大きな隔たりがあった。

「瑠螺蔚さん。入るよ」

僕は返事も待たずに障子をあけた。

上半身だけ起き上がらせている瑠螺蔚さんを見た途端に、どきっとした。

瑠螺蔚さんは、僕の声が聞こえているのかいないのか、僕からは横、瑠螺蔚さんにとっては、まっすぐ正面を見ていた。

その視線が、ゆっくりと僕に向けられたのだけれど、その目がまるで何も映さないように見えたのだ。変な表現だが。

僕は弾んでいた気持ちに冷や水をかけられた気がした。そこでやっと気がついたのだ。僕と瑠螺蔚さんの心の距離に。僕が考えるほど簡単ではない現状に。僕は瑠螺蔚さんが起きてくれたことが嬉しかった。もう大丈夫だと医に言われてこれで何もかもうまくいくと、元に戻るとそう安直に考えてしまっていた。

そんなわけではないのだ。失われた命は戻ってはこない。傷ついた心も簡単に戻りはしない。現に前田家は焼きつくされ、無残な姿を晒さらしている。未だ残骸の片づけすら済んでいない。焼け死んだ者の骨も出ていない。

「瑠螺蔚さん」

僕は真顔になつて瑠螺蔚さんの肩を掴んだ。

しかし言葉の続きが出てこない。

僕が、今どんな言葉をかけてやれるのか。何を言っても、なにも届かない気がして声が詰まった。

「御放し下さい」

そう言う瑠螺蔚さんの声は静かだった。何の感傷も、その言葉には籠められていなかった。言葉も、瞳も、心さえ、すべてで僕を拒絶しているようだった。

「御放し下さい」

もう一度、重ねてそう言われて、僕は茫然とその肩を放した。

「兄上様、御用と伺いましたが…」

「やる」

僕は由良に籠ごと桑苺を押しつけた。渡せなかった以上手元に置いておいても無駄だし、ましてや一粒だって食べる気にはならなかった。

「まあ兄上様。どうなさったんですか、こんなに沢山のおいしそうな桑苺。」

そこから適当にかき集めてきたのではないと気がついたのだろう、由良は呆れたように言った。

「兄上様、これはもしかして瑠螺蔚さまへの…」

「違う」

僕はカッとして咄嗟にそう言った。

けれどその気持ちを押さえる。僕がイライラしていると言ってもそれは僕の理由であって、妹にあたるなんて以ての外だ。

「由良^{いよ}。瑠螺蔚さんには会ったんだろっ？どうだった？」

「はい。瑠螺蔚さまは、私の前では普通にいらっしやるようにしたけれど、どこか御様子がおかしかったです。やはり、俊成様やあやめ様のことがお辛いのでしょうか…おいたわしいです」

由良はそっと滲んだ涙を袖で隠した。

「…それだけか？」

「…それだけ、とは？」

由良は少しむっと眉を寄せた。

由良は嘘をついている様子もないし、つく必要もない。

どういうことだ？瑠螺蔚さんが距離をとるよういきなり敬語になれば、由良だったら僕に取り乱して泣きついてもおかしくないと思っただけけれど、『どこか御様子がおかしかった』だけ、なんて…。

まさか。

「兄上様？顔色が悪いですね。瑠螺蔚様のことが心配なのは私も分かりますが、兄上様までお倒れにならないでくださいね」

顔色が悪い？そうかもしれない。

「それにしても、私はやく瑠螺蔚さまでなく義姉上様とお呼びしたいですわ」

由良がひとり言のように呟いた言葉に僕はぎよっとした。

予想もしないことを言われて、深刻だった気持ちに一気に水を差された気分になる。

「由良、お前、一体何を言っているんだ」

僕がそう言つと、由良は呆れたような目を向けた。

「兄上様こそ、一体、今更、何をおっしゃっているのですか。瑠螺蔚さまをお好きなのでしょう?」

「な…っ、なんでお前が…」

色恋を面と向かって身内に指摘されるほど恥ずかしいことはない。
僕は二の句が継げなかった。

一体、いつ、どうやって知ったんだ。

前田の当主、忠宗殿か？

なにしろ、僕は連日、瑠螺蔚さんを妻にと父の忠宗殿を拝み倒して
諾だくと証文までとりつけたくらいなのだから。瑠螺蔚さんはいくらお
てんばで顔は十人前…ごほん、とは言え、押しも押されぬ前田本家
の唯一の姫。引く手は数多で、わざわざ佐々家の末の僕に嫁がせる
必要もなく最初は渋っていた忠宗殿だったけれど、情に流されて首
を縦に振ってくれたというわけだ。

「兄上様は瑠螺蔚さまのこととなるとすぐ顔に出ますから」

由良は含み笑いをしながら言った。

「でも兄上様、瑠螺蔚さまはしっかりとやっているよつで、こと恋愛となると赤子のようでございますから、ちゃんとおっしゃらないと伝わりませんわよ？男は押し、ですわ」

「しるっせい」

どどで覚えてくるんだそんな言葉。

ちゃんと僕は自分の気持ちを伝えたぞ。伝わっているかは…わからないけれど。

そこで僕ははっと我に返った。

「いや、そんなことはどどでもいい。由良、今から瑠螺蔚さんの見舞いに行け」

かくとだに1(後書き)

高杉くんの一人称。

かくとだに2

僕は襖の陰でそっと聞き耳を立てた。

「瑠螺蔚ルロウさま、お体の具合はいかがででしょうか？何か召しあがられますか？兄上様が桑葚をくださったのですが、いかがですか？とても熟れて、美味しそうな大きい粒ばかりですわよ。さあ」

「由良ユウ、ありがとう」

落ち着いた声がして、僕は驚きで息を飲んだまま止めた。

これは、一体、どういじつ…。

「どうですか」

「…美味しい」

「瑠螺蔚さま、…はやくお元気になられてくださいね」

「うん。ごめんね、由良」

もしも。

そう考えることは、体の中心からじわりと凍えていくような。考えたくないけれど、確かに目の前にある現実が、僕に染みいる。

もしも瑠螺蔚さんが、意図的に僕に対してだけ他人のような頑なな態度をとっているとするのなら。

僕のことを、嫌いになったとするなら。

理由はただ一つ、俊成殿としなりを助けようと、無謀にも燃える館に飛び込

もうとっていた瑠螺蔚さんを止めたことだろう。

このことに関しては、僕は後悔していない。

何度あの日に戻っても、同じように瑠螺蔚さんを止めるだろう。例え憎まれるとわかっていたとしても。

あの時、瑠螺蔚さんは俊成殿がまだ中にいると言ってきた。偶然散歩にでも行っていたのか、安全な屋敷の外にいた瑠螺蔚さんを見殺しにすることは、僕にはどうしてもできなかった。瑠螺蔚さんは確信を持って俊成殿が中にいると言っていたが、外にいた瑠螺蔚さんにどうしてそんなことがわかるのか。心配しすぎるが故の不安だと、僕はいやに冷静な頭で考えていた。中にいるかいないかもわからない俊成殿の為に、瑠螺蔚さんを危険に晒すことはできない。前田家は火を吹いて軋み、いつ崩れてもおかしくないのだ。確かに外にいる人のなかに俊成殿の姿が見えないようだが、それは前田家当主の忠宗殿ただむねも、妻のあやめ殿もそうだ。俊成殿の正妻の依殿よりはいち早く運び出されて一時的に佐々家に避難している。

広大な前田家だ。僕がいたのは正門だが、どこか安全なところに来てくれるのを願うしかない。人に聞いても情報が錯綜さくそうし要領を得

ず、どれが正しいのか判断がつかない。

どうにもできないんだ。ここまで火が回ったら。

気を失わせた溜螺蔚さんを抱きしめて、そう考えていた。

頭ではそう思っていたのだけれど、しかし体は僕の考えてもいない方に動いた。

火事の時の人間は無力なものだ。炎と言う強大な力に抗う術すべを持っていない。こんな大火事のと看でさえ、人は桶おけや水の溜まる容器を手に、井戸や川から水を汲んできてかけるくらいしか手がない。

なぜか僕は桶で川から水を運ぶ人のうちの一人に寄って、それを奪いとると頭から被った。驚きで固まる男のその横を急いで通ろうとしていた女の桶も同様にとると、衣が滴るまで水をかけた。

「ありがとう」

状況がつかめず茫然とする二人に空の桶を返すと僕は踵かかとを返す。

炎が噴きあげる前田家へと。

改めて見てみれば、最早家の中まで通じる道と言える道はない。廊下は火の海だ。この中に飛び込むなんて狂気の沙汰だ。流石に背に寒いものが走る。足が竦すくみ、束の間長いようで短い時間が過ぎる。

生きては、戻れないかもしれない。

僕は腹にぐつと力を込めた。

馬鹿なことをしている。いや馬鹿なことをしようとしている。仕方ないことだ。ここまで火が回ったらもう誰にもどうしようもないんだ。例え中に人がいたとしても、もう生きてはいないだろう。助けに行っても無駄死にするだけだ。

僕は佐々家の人間で、大きな期待や責任を負っている。戦場いくさばならまだしも、今こんなところで死ぬわけにはいかない。

けれど、ここで行かなかったら、僕はこの先大事なものを何一つ守れない気がする。

大事なものを失っても沢山のそれらしい言い訳で固めて目を逸らす人間には、なりたくない。

瑠螺蔚さんはずっと叫んでいた。ただ一途に、兄のことを。自分の身をも顧みないその強さを、他人の為に何の迷いもなくこの炎の中に飛び込める強さを、僕は欲しいと強く願った。

瑠螺蔚さんに叩かれた頬がぴりりと痛み、棒立ちだった僕の足が前に動いた。口を開く正門ですら今にも崩れそうだ。はやく、いかないと。もはや一刻の猶予ゆつよもない。

僕は多分。

僕は思った。足は確実に前田家への距離を縮める。

僕は、多分。中にいるかもしれない俊成殿や、逃げ遅れた人の為に今炎に分け入ろうとしているのではないんだろう。

勿論、俊成殿が亡くなってしまいかもしれないというのは辛い。俊成殿でなくても、目の前で苦しんでいる人や、ましてや命の危機にある人がいたら助けるぐらいの気持ちはある。

けれどそれに自分の命がかかっている、しかも死ぬとわかっていてそれでも他人を助けようとするには、僕は諦めを知りすぎているし、生への柵しかいすも多すぎる。

だから、僕が今こうして炎に向かうのは、瑠螺蔚さんの為に。

瑠螺蔚さんが一途に俊成殿を助けようとしたように、僕はただ瑠螺蔚さんの為に、こんな愚かなまねをしようとしている。

どうして俊成殿や逃げ遅れた人を助けるのが瑠螺蔚さんの為なのか、うまく説明ができないけれど、僕の中でいろんな感情が闘ぎ合って、その中でも一番根本的で強い気持ちがそれだった。

「止めとオケ」

急に目の前に大きな掌が突き出された。

「尉高、義兄上」

「気持ちわかるが、諦めエろ。中にいる奴は、もう生きては」

ものすごい轟音がその声を掻き消した。

僕はその瞬間を目の前で見た。ふっ、と屋敷が撓み、空気が止まっ

たかのように酷くゆっくりと地面に落ち、そこから雪崩をうったように前田家は潰れた。拉げ潰れて瓦礫となった中に堂々と仁王立つ太い柱が轟々と燃えている。

僕は立ち尽くすしかなかった。

こうして、結局のところ僕は何もできなかったのだ。

「瑠螺蔚さま？」

由良の声が僕を現実に戻した。

「あ、ごめん、なんか、あたし、ぼーっとしちゃって……」

「…瑠螺蔚さま、高彬兄上様に呼ばれていたのを私思い出しましたわ。失礼いたします。くれぐれもご自愛くださいませ」

由良は瑠螺蔚さんに気を遣^{つか}ってか部屋を出て行った。勿論ずっとここにいた僕は由良を呼んでなどいない。

「あに、うえ、さま…」

僕も部屋に戻ろうと腰をあげかけた時にぼつりとくぐもった声が聞こえた。僕は胸を突かれた。

それは瑠螺蔚さん本人もそう言っていると意識していないだろうというほどの小さな呟^{つぶや}きだった。由良の言葉を反芻^{はんすう}しただけなのか、それとも俊成殿のことを思い出しているのか僕には判断がつかなかった。

瑠螺蔚さんと、俊成殿は昔から仲が良い兄妹だった。外見も似ていないし、傍^{はた}目には恋人同士にも映っただろう。ずっと瑠螺蔚さんの背中を追いかけていた僕はたまにそれを羨^{あや}ましくも、妬^{ねた}ましくも思ったほどだった。

「ねえ瑠螺蔚さん。今日、一緒に遊ぼうよ」と誘っても、「いやあ

よ。あたしは兄様にいさまと遊ぶんだもの」と断られるのが常だった。まあなんだかんだで優しい瑠螺蔚さんは結局僕と一緒に遊んでくれるのだけだ。

断られるたびに僕は、なんで兄の吉之助きちのすけがいいのだろう、いったい僕とどこが違うのだろう、どうして僕じゃ駄目なんだろう、と飽きずに思っていた。

けれど、瑠螺蔚さんのことを抜きにすれば、僕は俊成殿が決して嫌いではなかった。人間として尊敬できる人ではあるし、瑠螺蔚さんがつい甘えて頼りたくなる気持ちも、まあ、わかる。

僕は自分で思っておいてついむつとした。僕もまだまだ器が小さい。俊成殿と比べると、僕にはいつも劣等感が付きまとう。瑠螺蔚さんは僕には甘えてくれた事なんてなかった。

俊成殿が瑠螺蔚さんの兄でよかった。肉親故の情であるだろうけれど、これでもし俊成殿が佐々家にでも生まれていたら、僕は万に一つも望みはなかっただろう。

かくとだに2（後書き）

いー兄ー瞬だけ登場。

話が進まず申し訳ありません…。

かくとだに3

僕はため息をついた。

あれから、ずっとだ。

前田家の火事から三月たった今ですら瑠螺蔚^{るるい}さんの僕に対する態度は変わらない。

瑠螺蔚さんに言いたいことはたくさんあった。

何度、瑠螺蔚さんのところに乗り込もうと思ったか。

どれだけ、いいかげんにしろよと言いたかったか。

でもそれは僕の事情であって、そんな事をしたって身勝手な感情の押し付けにすぎないんだ。きつと。

僕は空を見上げた。黒く広がる遙か空の上から純白の花弁がふわふわと舞い落ち庭に薄く積もる。吐く息も白く凍え空気を染める。

瑠螺蔚さんに、嫌われるなんて、考えてもみなかった。

もちろん好きな人に嫌われるのは怖いから、それを恐れてはいたけれど、心のどこかで瑠螺蔚さんが本気で僕を嫌うことがないと高を括くっていたのだと、思い知った。

ふと、外を眺めていた白一面の僕の視界の端に赤いものがちらりと映った気が、した。

雪ゆき椿つばきか？

けれどいくら目を凝らしても、さっき一瞬見えた筈の赤はどこにもない。

僕は立ち上がった。なぜか気になって、その赤いものが見えたところへ向かった。

草履を履いた足を地べたに降ろす度刺すような冷たさにじんと痺れる。

珍しく薄く積もった雪のなか、赤が見えたところまで来たが、やはり見渡す限り一面の白だけで赤いものなど何も無い。気のせいだったかな、と目線を下に向けた僕はふと気がついた。積もった雪を踏みつぶした真新しい足跡がある…しかも裸足だ。その足跡は、琵琶湖の方へ向かっているようだった。子供ではなく、大きさからみても大人の足跡だった。

この冬に、裸足で外をふらふら彷徨うなんて、狂気の沙汰さたとしか、
思え、な、い…。

僕は、さっと血の気が引いた。

今日瑠螺蔚さんは何色の着物を着ていた！？赤ではなかったか？血のような真紅の。

振り返れば、僕が残してきた足跡がその足跡に被さるようについている。嘘だろう！？佐々家からずっとその足跡は続いているのだった。

僕は走りだした。

悪い考えばかりが頭をよぎる。

まさか、まさか、まさか…。

いや僕の杞憂しゆうで終わってくれ。瑠螺蔚さんはそんな、自ら命を断とうとするような、そんな人じゃない。いつもの散歩かもしれない。

僕が息を切らして湖へ辿り着いた時、赤いものは黒々と広がる水の真中にいた。

いやもはやあれは赤いものなどではない。間違いなく、緋ひの衣を纏まとった瑠螺蔚さんだった。

「瑠螺蔚さん！」

僕は湖を掻き入ろうと水に一足踏みこんで、思わず奥歯を噛みしめた。痛みを伴うまでの冷たさ。けれど躊躇ためらっている暇はなかった。瑠螺蔚さんは僕に背を向けたまま、ゆっくりと何かにひきよせられるように歩いて行く。その先に一体何を見ているのか。駄目だ、行つては。

水の抵抗で思うように進めずにいると、終ついにたふんと瑠螺蔚さんの頭が沈んだ。

「瑠螺蔚さんっ！」

悲鳴のような声が漏れて、僕は瑠螺蔚さんに手を伸ばした。たった

の三足の距離が、酷く遠い。

やっと瑠螺蔚さんを水の中から助けだすと、ぐったりとして意識がないようだった。

肩を揺すっても、頬を叩いても、何の反応もなかった。

力ない首が、揺すられるたびにぐらぐらと左右に揺れた。

「瑠螺蔚さん！」

なんで、こんな。

僕は泣きたい思いでその背を叩いた。

雪は絶えず降り続き、瑠螺蔚さんにも、僕の上にも冷たく積もる。

「俊成殿としなり、お願いだ、瑠螺蔚さんを連れていかないでくれ…」

僕は言った。情けなく手が震えている。

このまま、瑠螺蔚さんの目が覚めなかつたら。

そんなことはない。そんなことはあつてはいけないんだ。

生きようとしてくれ、瑠螺蔚さん。俊成殿がすべてじゃないだろう？ 失うことは悲しい。大事なものであればあるほど、その悲しみは身を割かれるよりも辛く苦しいだろう。けれど、それに囚われてちやいけないんだ。立ち止まって、蹲っても、いつかは歩きださなきゃならない。生きている限り。

生きている全てのものに終わりは来る。出会いがあれば別れがあるよ。よ。

でもそれを後悔しちゃいけない。出会いを悲しいものにするのではなく。

別れを惜しんでも、恨んではいけない。

自ら死ぬことは、逃げることだ。生きることから、この世の辛さから。瑠螺蔚さんは、そんな弱い人じゃないだろう？

生きてくれ。理由なら僕がなるから。

辛さを乗り越えられるだけの力に、僕がなるから。

「った！」

強く瑠螺蔚さんの背を叩いたら、瞼が震えてがぼつと水を吐き出した。

大きくむせている瑠螺蔚さんを、僕は抱きしめた。

よかった、良かった…。

情けないが安堵で涙が滲んだ。

もう、こんな思いはしたくない。最近、瑠螺蔚さんに心配かけられてばかりだ。次に同じようなことがあったら心臓が止まってしまいかもしれない。

うつすら瞳を開いた瑠螺蔚さんは、ぼんやりと視線を彷徨わせた。

水面から月へ、月から自分の付けている首元の勾玉へと。

僕もなんとなくその視線を追った。瑠璃色の勾玉は月光を受けて淡

い輝きを放っていた。

そういえば、勾玉なんて瑠螺蔚さんは持っていただろうか？いやに古びたものだ。いつからつけていたのだろうか。

瑠螺蔚さんの視線が勾玉から辿って僕を見たその時、飛び出さんばかりに大きくその瞳が見開かれた。

それはあまりにあからさまで、逆に僕の方が驚いた。

僕の顔に何か、ついているとか？

その見開かれた眼尾まなじりにみるみるうちに涙が溜まり、溢れだした。それを拭おうともせず、瑠螺蔚さんはただ僕を見つめて泣いているのだった。

理由が分からない僕はただおろおろするばかりだ。

ふいにその唇が声なく動いた。

あにうえ、と。

それを見た瞬間、僕はカツと頭に血が上った。思わず瑠螺蔚さんの肩を掴むと、瑠螺蔚さんは口を開いた。

「兄上、生きていたのね！？良かった…」

「瑠螺蔚さん！」

僕は掴んだ肩を揺すつたが、瑠螺蔚さんはそのまま真正面から僕に抱きついてきた。僕は、声を失った。

「兄上…あたし、兄上が死んでしまったのかと思ったのよ。本当に死んだのかと…ばかよね、あたし。兄上はここにいるのに…本当に

…ばかよね
「

瑠螺蔚さんは僕の胸に顔を押し当てて、嗚咽おえつし始めた。

瑠螺蔚さんの目には、僕が俊成殿に見えているのか。そう信じたいのか。

「しっかりするんだ、瑠螺蔚さん！」

僕は瑠螺蔚さんを引き離して、頬を打った。

瑠螺蔚さんは信じられないと言っように僕を見た。

「兄上…？」

「しっかりしろ！僕は俊成殿じゃない」

「兄上、じゃ、ない…?」

瑠螺蔚さんの瞳から、また大粒の涙がぼろぼろと零れ落ちた。

それは、冷たい涙だ。蒼い涙だ。悲しみの涙だ。絶望の涙だ。

そう、瑠螺蔚さんは絶望している。わずかな希望をも断たれたことに。

それほどまでに…!

「それほどまでに、俊成殿が大事だったのか、貴方は…!」

口に出した瞬間、僕の中で何かが弾けた。

俊成殿は、瑠螺蔚さんのことを好きだった。

妹として。愛しみ、守る深い親愛の情。

けれど、それだけではないということ、僕はわかってしまった。

俊成殿は見事だった。その感情を心の奥底に隠して消し表面に出さず、誰にも悟らせなかったのだから。僕もまさか俊成殿が瑠螺蔚さんを妹以上に見ているなんて思ってもみなかった。瑠螺蔚さんよりは少ないけれど、俊成殿とは小さいころからずっと一緒に過ごしてきたのに、僕にそれを見せたのはたったの一度きりだ。しかもそれはごく最近で、僕はそれまで一切気がつかなかった。

僕が気づけたのは、同じ姫を愛しているということと、普段の俊成殿を知っていたからだろう。俊成殿のことをよく知らない者では絶対にはわからない。

なぜならそれは、日常的な光景だったからだ。

1年前、瑠螺蔚さんに会いに前田家に行った。瑠螺蔚さんと俊成殿は庭にいた。二人きりで。楽しそうに、瑠螺蔚さんが指さすその先には雀がいる。米を啄む雀を見て生き生きと笑う瑠螺蔚さん。一歩さがったその隣で瑠螺蔚さんを見つめ微笑む俊成殿。

僕はいつもどおり仲睦まじい兄妹に少々苦笑しながらも声をかけようとして、凍った。

俊成殿の瞳に、情欲がある。瑠螺蔚さんの背中を見つめるその瞳の中に、深い感情がゆらめいていた、気がした。

俊成殿は一瞬で僕に気づいて驚いたような顔をした。

瞳の熱はすぐに消せないのか、その次に浮かび上がった色を見て、僕は二人に声をかけることなく背を向けた。

どくどくと不吉に高鳴る鼓動を押さえて、僕は足早に歩く。

まさか、そんな。いやそんなことはないはずだ。

けれど、考えれば考えるほど、僕の考えは確信を持って悪い方に固まっていく。

最初の瑠螺蔚さんの背を見詰める視線だけだったら、僕は気のせいで済ませていただろう。それほどまでに俊成殿が覗かせた感情は一瞬だった。

けれど、その次に僕を見た、その目には確かに嫉妬があった。

僕に向けた敵意、嫉妬……。どうしてわかってしまうのだろうか。同じ女を愛しているからか。わかりたくもないけれど、直感が告げる。

俊成殿は、瑠螺蔚さんを愛している…。

実の妹を愛するなんて、僕には全く想像もつかないような話だ。決して叶うことのない恋。俊成殿には妻がいる。そして瑠螺蔚さんはいつか、別の男に嫁いでしまう。その苦悩はどれだけのものだったろうか。本人に打ち明けることもできず、ただ見守り続けるだけだった日々を思うと、僕なら耐えられない。

その時、僕は敵かなわないと思ってしまった。その思いの深さに、強さに。一体いつからなのだろうか、瑠螺蔚さんを妹ではなくただ一人の女として見始めたのは。僕に分かるうはずもないが、僕は立場で既に勝利が決まっているのに、気持ちで俊成殿に負けた気がした。

男としての矜持たかぢと言うのか、それから僕は嵐のように瑠螺蔚さんの父忠宗殿ただむねを拝み倒して無事婚姻の内諾をとりつけた。

優越感を持ちたかったのかもしれない。瑠螺蔚さんにより近い立場にある俊成殿に対して。

なにもかも僕の先に行く俊成殿。けれどたったひとつ、瑠螺蔚さんだけは譲れない。

そして俊成殿は亡くなってしまった。瑠螺蔚さんの心を連れて。

亡くなられたことは、悲しい。けれど俊成殿にとっては幸せなのじゃないだろうか。この先、瑠螺蔚さんは別の男の手を取る。家庭を築いていく。肉親と言う誰よりも近い位置にしながら、俊成殿はいくら切望しても瑠螺蔚さんの人生に関わることはできない。肉親故に。

誰にも知られず、嫉妬や叶わない想いで身を焦がし続けるぐらいなら、きつと。

瑠螺蔚さんはそんな俊成殿の想いを知らず、これからも生きて行くのか。無邪気に何も知らず笑っていればいいのか。

瑠螺蔚さんの笑顔は好きだけれど、たまにそんな理不尽な気持ちに駆られる。

俊成殿が瑠螺蔚さんのことを愛していた、なんて今更告げて苦しめたいわけじゃない。あの濁りのない笑顔を曇らせたいわけじゃない。

それは俊成殿も望んでいないだろう。

でも、知らないということは免罪符になるのか？瑠螺蔚さん。

僕はずっとそう思っていた。

俊成殿は、瑠螺蔚さんを愛していたけれど、瑠螺蔚さんは違つと。

僕が由良を大切に思うように、瑠螺蔚さんも俊成殿を大切に思う、それは兄妹の情を出ないものだ、思っていた。

けれど、今の瑠螺蔚さんの様子を見ると、もしかしたら、という思いが過る。^{過ぎ}

一度考えると、もう止まらなかつた。

今まで俊成殿に感じてきた劣等感や、嫉妬やそんなものと混ぜこぜになって吹き荒れる。

僕は無言で瑠螺蔚さんを抱えて岸に上がった。

「あにうえは、もう、いないの…?」

そんな僕に気づかないのか、瑠螺蔚さんは小さい声で呟いた。

「俊成殿は、もうどこにもいない。いい加減にしてくれ！死んだ人
のことより、今を考えるんだ！」

僕はそう叫んでしまった。

それが、どんなに瑠螺蔚さんを傷つけるかわかっているながら。

はつとした時にはもう遅かった。一度口から零れ落ちた言葉はもう拾い上げることはできない。けれど、確かにそれは僕の本音だった。この上もなく身勝手な。

案の定、瑠螺蔚さんはひどく傷ついた顔になった。

悪いことをした、と心ではわかっているけれども、止められなかった。激情の赴くまま体が、口が勝手に動く。

これがどういふ感情なのか、何と呼べばいいのか僕にはわからない。

瑠螺蔚さんは僕から視線を逸らした。その瞳からは、絶望と言う涙が溢れている。

「貴方はそれほど、俊成殿のことが大切なのか？後を追って死にたいと考えるほど、俊成殿のことが大事なのか！？」

僕は瑠螺蔚さんの肩を掴んで乱暴に揺さぶった。

「やめて……」

瑠螺蔚さんはいやいやと頭を弱弱しく振りながら細く言った。

それでも、僕を見ようとしなない。

「僕を見るんだ、瑠螺蔚さん！貴方は、俊成殿のことを一人の男として好きだったのか!？」

「やめて!！」

瑠螺蔚さんが、僕を見た。

その瞳に宿る強い感情。今までのぼんやりと魂が飛んだような瞳とは違う。涙に濡れ爛々と輝く漆黒の目は、ちゃんと現実を見ていた。

「あんたは何を言っているの！？兄上のことを、一人の男として好きなんて、あるわけないじゃないの！あたしは…」

「それなら、何故そこまで思い詰めるんだ！」

「何よ！あんたはあたしに忘れろっていうの！？兄上のことを！」

「そんなことは言っていない！」

「言ってるじゃない！兄上はあたしの兄さんよ！？たった二人きりの兄妹だったのよ！あたしには悲しむ暇もないの？まだ、三月しか経ってないのに！」

瑠螺蔚さんは涙を拭いた。それは確かに瑠螺蔚さんの心からの声だった。

「…あんたには、わからないわ…」

その拒絶に僕はまた頭に血が上った。

身内だけが、悲しむ対象とでも言うのだろうか。友を亡くすことなんて、戦場ではままだことだ。それに、慣れなきや生きていけない。でも、慣れることと、悲しまないことは別なのに。

瑠螺蔚さんも戦火に巻き込まれたことはある。この戦の世だ、前田家のようにいつ家族が、友が、家人が亡くなるかもしれない。でもそれは、戦場に行かなくていい女の意見だ。武はそんな悠長なことは言ってもらえない。

自らの命をかけて、生活をしていかなければならない。自らの為ではなく、家の為、家族の為、愛する命の為に。

本当に、瑠螺蔚さんは世間知らずだ。良くも悪くも、愛しみ守られて生きてきた姫だ。

綺麗に整えられた世界を見せられてそれがすべてだと思っている。

「じゃあ、僕はどうすればよかったんだ？あのまま、炎の中に瑠螺蔚さんを行かせろとでも？瑠螺蔚さんの気持ちを慮おもって、中おもんばかにいないかもわからない俊成殿の為に見殺しにした方が良かったのか！？」

「あたしは、死んでもよかった！」

瑠螺蔚さんは叫んだ。迷いのない声だった。

「兄上を助けて、あたしが身代わりに死んでもいいと思ってた。あたしのせいで、兄上、霊力ちからをつかってしまって…だから、兄上が死ぬのなら、あたしも…一緒に…」

そのあとは咽び泣きに掻き消された。

「どうして、行かせてくれなかったの! どうして!？」

それは、魂の悲鳴だった。瑠螺蔚さんの魂が悲痛に叫んでいた。

「行かせたくなかった!」

「あたしは、兄上のところに行きたかった!」

憎いよ、俊成殿。例え親愛の情だとしても、ここまで瑠螺蔚さんの心を占めることができる貴方が。

僕が死んでも、瑠螺蔚さんは同じように嘆き悲しんでくれるだろうか。

「それを恋とはいわないのか!？」

「言わない！兄上のことは勿論好きだけど、それは恋なんかじゃない。あたしが死ぬ事で、他の誰かが助かるなら、あたしなんて、いいらない！」

「瑠螺蔚さん！どうして自分の命をもっと大事にしないんだ。瑠螺蔚さんが俊成殿を想うように、瑠螺蔚さんも大切に思われてるんだと、どうして考えないんだ！」

「いやっ！あたしなんて…兄上も義母上も、誰一人助けられないあたしなんて…いらない！だから、兄上と義母上を、返して！会いたいよ…」

瑠螺蔚さんはいきなりその場に崩れ落ちた。慌てて抱き起すと、気を失っているようだった。気力が尽きたのか、それとも体力か。

「瑠螺蔚さん、嘘でも、いらないなんて言わないで…」

死んでもいいなんて、聞きたくなかった。

そっと瑠螺蔚さんの目尻の涙を拭った。僕も大分酷いことを言ってしまった。謝らなければ。

瑠螺蔚さんの鼻の天辺が寒さからか、赤くなっている。はやく屋敷へ戻ろう。風邪をひいてしまう。

『ほんっとくに、じゃまよね』

その時、声が聞こえてきたのだ。若い女子おなごの声。

僕はぞくりとして辺りを見回した。

すると、僕たちが上がってきた岸边に10ぐらいの女子が座っていた。

全く、気がつかなかった…。

『そいつも、あんたも』

女子はふいと一瞬だけこっちに目線を送ると、湖を向いた。

その女子には底知れない不気味さがあつた。気配が、全くしない…。

待てよ、こんな真夜中に、こんな小さな子が一人で琵琶の湖なんかに、来るか？

『しねばよかったのよ。そいつは、そのぞんでたもの。だからせっかく、ころしてあげようとしたのに。じゃまよ、そいつ。しねばいいのに。しょうがいやなら、できし。できしがいやなら、あつし。どんなしにかたでもいい、このおんなが、このよからきえればいい』

赤い唇からくすくす、と楽しそうな声が漏れる。

『あんたも、じゃまよ。これいじょう、わたしのじゃまをするなら、そいつとおなじように、ころしてあげろ。そいつは、しぬうんめいな。もうすべ、ころされるの。あぁうれしい』

かくとだに3（後書き）

お待たせして申し訳ありません。更新しました。

今回ながあゝくなりました。わけようかとも思ったのですが、元のままの章わけでいきます。でもあとから分割するかもです。

ちなみに原文はもっと長かったです。高彬の独白で、瑠螺蔚さんは美人じゃないけどぼやっとした普通の姫と違うし、才色兼備と言われた母の蕾にそっくりな気概を持って…みたいなこと言ってたのですがカット。

あと「おお！神よ！」みたいな中二病的シーンがあったのもカット。

ちよつと暗い話です。

お兄ちゃんのお持ちをお兄ちゃん自信の口から語らせられないので、高彬君が語ってくれました。

かくとだに4

がたがたと震えながら僕の室に戻ってきて、寒さで覚束ない手で瑠螺^{らいらい}さんを降ろした。

手や足の末端は、もう冷たさを通り越して刺すような熱さを錯覚するところまできている。

だけど意識のある僕はまだいい。

ぐたりと気を失っている瑠螺^{らいらい}さんの頬から血は失せ、唇は色が抜け薄く開いている。黒く縁取られた瞼は息をしているか疑うほど静かに固く閉じられていた。

その唇に指の背をあてても、自分が寒さで痺れているせいで呼吸を感じ取れない。不安にはなるが、その確認は後だ。今しなければならぬことは別にある。

一刻も早く、身体を温めなければ。

温石、火鉢、湯を沸かすにしても…だめだ、どれも時間がかかりすぎる。薪を入れて、火をつけて…なんて悠長に待っている暇はない。

北の一部では南から伝わった真つ赤な南蛮胡椒というものを足袋に入れたり、直接擦りつけたりして凍傷を防ぐらしいがそんな珍品今手元にないし、防寒と言う意味ではもう手遅れだろう。

瑠螺蔚さんの指は、思わず顔を顰めるほど細く折れそうに凍えている…。

『しねばよかったのよ』

ふと、琵琶の湖で聞いた声が甦った。

死ぬなどと言う禍言を、楽しそうに話す、女童。

嘘のような話だけれど、僕が瞬きをする間に、跡形もなく消えていた。

そもそも、女童など僕が見た幻覚でしかなかったのだろうか。いるはずがないのだ。雪が降る冬の深夜に、琵琶の湖に女童が。

しかしその声は疑うべくなくなったりと体の奥に沈みこんでいる。

瑠螺蔚さんがもうすぐ死ぬ運命だなどと……どうかしている。

僕は不吉な考えを振り払うように瑠螺蔚さんの帯に手をかけた。体を冷やして大分時間がたっている。躊躇している暇はなかった。ぐっしょりと濡れた帯は重く手にあたったが、凍えた手にはもうその感覚すらなかった。

思い通りに動かない手に苛立ちながら、目を逸らしてやや乱暴に衣を開けば、緋の衣に白羽二重しろつばはぐたえの下着が痛いほど目に映えた。

小袖は上着、下着、肌着と重ねて着ている。当然ながら、肌着までびしょ濡れだろう。

これから、濡れた衣を脱がせて、更に新しく乾いたものを着せるのか？ 僕が？

一瞬、我に返りそうな心を慌てて叱咤^{しった}する。

考えたら、負けだ。これは病人の看護と同じだ。瑠螺蔚さんの明日の健康だけを考えろ、健康…。

肌張り付く下着と共に肌着まで脱がせると、室の隅に放り投げる。行儀が悪いと口うるさい侍従に怒られそうだが、仕方がない。

心頭滅却、煩惱退散…。

僕はぶつぶつ呟きながら箆笥を漁って新しい衣を取り出す。

仏教と言うものは、大変に興味深いと僕は思う。

僕は臨済宗りんざいしゅうではないが、そこで行われている禅問答はその筆頭だ。

禅問答とは、その名の通り師より与えられた問に座禅を組みつつ考え自らの答えを導くものである。

聞けば簡単のようだが、その問いが一樣にして理解不能なのである。

たとえば、こうだ。

ある僧がこう問う。「なぜ達磨はインドから来たのですか？」
答えて言うには、「庭にある柏の樹だ」

この意味を考えよというのだから、まったく常人にはとてもじゃない

いが思い浮かぶはずもない。

詳しく説明するとなれば一昼夜ではとてもじゃないが無理だ。しかし一言でこれの「解」を表すと、仏性はどこにでも存在するものであるから、ということらしい。

それは、庭の柏の樹であり、花であり、家であり、風であって光でもある。仏性とは人を仏に為らしめるもの、つまり、究極のところ達磨がインドからやってきたと言うことはその意味そのものであって、それ以外のものではない、それを表したのが、「庭の柏の樹」ということ、らしい。

475

このように、なんだかわかるようで、さっぱりわからないのが禅問答である。

多分、考えると言うことに意義があるのだろう。とてもではないが、自分でこの解を導けそうにはない。

10年ぐらい石の上で禅を組めば僕にも悟りの境地とやらが分かる日が来るのだろうか。

しかしあしたもわからぬ戦の世を生きる僕には、インドからきた達磨の意味をぼけっと考えることより、とりあえず今暖をとることの方が重要だ。

僕はさつくりと自分の着替えを終えると、僕の衣を着せた瑠螺蔚さんを布団に寝かせる。

しかし体格の違いからか、瑠螺蔚さんの着物の合わせが動かす度にずれて、鎖骨の辺りが覗く。

…いや、今禅問答を考えたところじゃないか。次は太公望の兵法でも復習するべきか…。

冷えた身体は人肌で温めると良いということが頭をよぎったが、きつと温石の方がいいだろう。いや、良いに決まっている。

僕は立ちあがろうとして、つんと袖を何かに引っ掛けて、そこを見

た。

ほっそりとした白い手が、僕の裾を掴んでいた。それを辿れば、黒い髪と薄く開いた唇が目に入った。

予兆もなしに、瑠螺蔚さんのふたつの瞳が、はっきりと開いて僕を見ていた。僕は息を飲みこんだ。

「そばに、いて」

か細い声が吐息と一緒に吐き出されると、瑠螺蔚さんの臉は再びゆっくりと下がって行った。

「……」

暫く、僕は動けなかった。

今のは、僕の幻聴か？けれど、幻と片付けるには、その声は生々しく僕の耳に残った。

しかも夢ではない証拠に、瑠螺蔚さんの手は、僕の袖を握ったままだ。

瑠螺蔚さんの手を、握り締める僕の袖ごとそっと包む。

片手で包めるぐらいの小さな手のひら。

いつからか、僕が守られていたこの手は、思っていたよりも大分脆いと気がついてしまった。

瑠螺蔚さん……。

僕を引きとめるこの手が、嬉しくないわけではないじゃないか。

わかった。諦めた。本当に瑠螺蔚さんは、いつも、いつも僕の心をかき乱すだけかき乱していく。

据え膳食わぬは男の恥と言うが、そういう意味では僕は立派な「男の恥」だな。

いや、本当に、これ以上ないくらい瑠螺蔚さんらしい。

思わず笑みが漏れた。

僕の服を着て、僕の布団で、僕の横で寝てる瑠螺蔚さん。

こんな状況で、側にいてなんて、良くも言えたものだ。

僕だったからいいようなものの、どこでもこんなに無防備でいられたら気が気じゃないよ、全く。

憎いぐらい静かに、瑠螺蔚さんは眠っている。

明日はいつもの瑠螺蔚さんにもどってくれらるだろうか。

そうになったら、どんなにいいだろう。

小さいころの瑠螺蔚さんは活発で、草や泥がつくのも厭いとわずよくこ
うして野原に寝っ転がっていた。

そのまま寝てしまつのもよくあることだった。

そして、その側には、いつも…俊成としなり殿がいた。

僕はくすりと静かに笑った。

どうしてこう、思考が俊成殿に戻ってきてしまうのか。

話してみたかったな、一度。はぐらかすことをせず、膝を突き合わせる。

瑠螺蔚さんをずっと、見守ってきた俊成殿と。

多分、僕がこう思うのはもういない俊成殿への哀追なのだろう。三月前の僕なら、こんなに穏やかな気持ちで望むまい。これは、決して叶うべくないことなのだ。

乱れ、舞う雪の囃子が、深々と僕の身体に染みる。

雪は、たけ猛る武士を思い起こさせる…。

「このごろは、戦、戦、そればかりだ。いくら戦国で、命が失われ

ていくことが日常になっても、やっぱり、人が死ぬのは嫌だよ。殿
はやり方が厳しいように思う。若殿はとていい方なのだけれど…。
周りの国の動きも不穏だ。一時も気が置けない。瑠螺蔚さんのまっ
すぐな純粹さが僕には眩しいばかりだ。もし、瑠螺蔚さんが天下人
になったら、命の奪い合いなど、決して許しはしないだろう。戦な
ど、絶対に起こしはしないだろうにね…。」

かくとだに4（後書き）

やっと…！更新できました…！

「かくとだに」終わりです。高彬の章でした。

次は姫に戻ります。

ひろいもの1

朝日が眩しく瞼を刺す。

あたしは上半身を起こした。

あー…なんか、すごくすっきりした気分…。

吐く息も白い。冬の冴えた冷たささえ、寝所で温まった体を覚ますには心地いい。

うーんと腕を伸ばして、固まった体を伸ばす。

ん？

お腹の上に違和感があった、衾ふすまをめくると、なにこれ、腕…。

ぼんやりとそのお腹の上に乗ってる腕をみて、それから衾を押さえる自分の腕を見た。

あたしの腕は、目の前にちゃんと二本ある。

とすると...これは!?

「きっ、きゃあああああああ!?!」

お化け!?!いや、違う!

「なつこ瑠螺蔚さん!?!」

隣でがばっと飛び起きたのは、たかあきら高彬!

「あつ、あああ、あ、あんだ、な、な、なに、なにになを…」

あたしは咄嗟とつぱに衾ごごと障子際すまに飛び退すった。

高杉はあわをくって手を顔の前で降り始めた。

「いや、ち、違う瑠螺蔚るるいさん誤解！誤解だから！本当に！誤解だから！」

今の状況を理解したのか、高杉のその頬にさつと赤みが差したのが、なんかやだ！

目の前の高杉は、髪も結ってないし、着ているものも寝てたから当たり前なんだけど、寝乱れてて、なんか、なんか…。

まさか、こいつ、あたしに何かしたんじゃないでしょうね！？

混乱しながらも、膝を詰めようとした高彬に向かって、楯のごとく
衾を突きだす。

「近寄らないで！あんた、なんでここにいるのよ！まさかとは思
けど…」

「ええ！？いや、違う、本当に！本当に違うから！瑠螺蔚さん昨夜
のこと覚えてないの！？」

「ゆ、ユウズ、ですって！？」

意味深に聞こえたのが動転と興奮に輪をかけて、あたしは髪も呼吸
も振り乱して叫んだ。

「瑠螺蔚さまっ！？」

ゆ、由良そんなに大きい声も出せたのね…。

他人が自分よりも混乱していると、自分は落ち付いてしまうものなのか、さっきまで騒いでいたあたしは少し冷静になれた。

「兄上様、信じられません！わたくしは、確かに瑠螺蔚さまにはやく義姉上さまになっていただきたいと申しました。けれど、よもやこんな無体なことをされるとは！高彬兄上様は、こんなことをされるような人ではないとわたくし信じておりましたのに！見損ないました！瑠螺蔚さま！」

由良がくるんとあたしを向いた。

「あ、ハイ」

思わず敬語になったあたしに、由良はささっと寄ると、両手をしっかり握った。

「行きましょっ」

「えっ行くってどっへ…」

「待て由良！ちがう誤解だ！落ちつけ！誤解、誤解なんだ！弁解させてくれ！」

「兄上様！」

由良が高彬を振り返った。にっこりと笑う。かわいい…じゃなくて。

「絶交ですわ」

由良はかわゆく微笑んだまま、ぴしゃりと言った。

ひろいもの1（後書き）

更新お待たせしております。

拍手いつもありがとうございます。

久々の更新なのに、短いです。すみません…。

戦伽を読んでくださっている方の中で、原作を知っている方は少ないと思っっているので、今まであまり原作について触れることはしませんでした。あまりに嬉しかったので、ちょっと書かせてください。

最近とても嬉しいことがふたつありました。

この戦伽は二次創作ですが、原作の「銀の海金の大地」は昔の作品なので、ファンサイトすら見つかることが少ないのです。膨大な二次創作が登録されているこの「にじファン」でも、「なんて素敵にジャパネスク」、「銀の海金の大地」の二次創作はゼロでした。ジヤパの方は、ネットだとファンサイトもちらほら見かけますが、銀金は本当にレアなのです…。

登録がゼロということは、知名度もあまりないということ。ひと世代前に爆発的にはやったのになあ時代は変わったなあなんて思いつつ（わたしはリアルタイムの世代ではありませんが）、戦伽を載せる際も、誰にも読んで頂けないだろうなという覚悟で載せました。内容も、ただの二次創作ではなく戦国時代に転生した主人公たちの話というトンドモ設定で内容もいじりまくり、原作を知っている方に怒られそうなもので、ますます人を選ぶ話に…。二次創作は普通原作を知らないと読みませんしね。

なので、万が一原作も知らないけど、興味を持って読んでくださる方がいらっしやるのであれば、できるだけとっつきやすく書こうと

頭を絞り、原作を知らなくても読めるようにしてあるつもり、です。と言うか書いてて思ったのですが、ジャパや銀金好きな方が私の拙い二次小説なんぞを目にとめて頂けるなんてことはよもやないだろうなあとあまり頭になかったよう、です。

さてつらつらと書いてやつと本題です。最近拍手でコメントをいただけたんですが、それがなんと銀金をご存じの方！わぁ嬉しい！本当に！銀金を知っている方に会えるなんて嘘みたいで、本当に嬉しいです！しかも、戦伽を読んで頂けてるなんて…！戦伽はジャパと銀金の転生ものとはいえ、ジャパはあつてなきかの如く…。

もともとはちゃんと銀金 ジャパ 戦伽と転生を書いていたのですが、時間も文章量もちよつと厳しいことに気づき、ほぼ銀金 戦伽のはなしになってしまいました…。今となつては名残は名前と前半のエピソードだけです。けれど嬉しい半面、不安も…。この先銀金の時代の話が出てきますが、オリキャラが主要人物をくつてるとうか、銀金の設定を根本から荒らしていると言うか…。私は心の底から銀金が好きですが、ファンの立場から客観的に戦伽をみたらキーツオリジナル設定出張りすぎ！と言う…設定ですね…書いてしまっている…その場面に行くのはだいぶ先だろうと思いますが、一応先に注意だけ…。そのシーンを書くときでは、まえがきで注意がきをつけます。本当に、いちファンの書いた二次創作と思つてわり切つて読んでいただければと思います…。しつこいぐらい言ってますが、ファンの方の銀金のイメージを壊すのは本意ではありませんので…。こういうの、最初にかいておいた方がよかったですよね。考慮が足りず、すみません。足しておきます。

もうひとつ嬉しいことはですね、コメントで「このサイトで初めて二次創作を読みます。原作は題名だけ知ってます。この小説を通して原作の良さを知りたいと思います」みたいなことを頂いたのですが、本当に本当に嬉しかったです！もちろんわたしのまだまだ勉強不足な小説は、著者の氷室冴子先生の作品と比べるのすらおこがましいですが、先生の作品を読んだことのない人が興味を持つきっかけ

けになれるのであれば、こんなに嬉しいことはないと思います。

あと、ちょっと話は変わりますが、折角銀金の話が出たので。

「銀の海金の大地」は、「古事記」に書かれている佐保彦王の乱前後、またそれから飛鳥時代まで脈絡と続く六部構成の物語を氷室冨子先生が書かれようとされた物です。

全十一巻の序章を書かれて、さてこれからいざ本編…というところでお亡くなりになられてしまいました。

もう書かれることのない続きをのどから手が出るほど欲したのは私だけじゃないはず…。

あれやこれや妄想しては紛らわせていたのですが、わたしは基本恋愛脳なので、想像するのは基本的に人物に焦点が当たってしまうんです。部族の動向やら政治的展開なんてそっちのけで…そしてできたトンデモ設定・戦伽。の、古墳時代銀金のその後ver（上記で言っている、オリジナルが出しゃばってるどころじゃない銀金）。戦伽事体大分昔に考えたものなので穴だらけですが、今からそこをいじると、全体にも影響するので、もう戦伽は戦伽で突っ切ります。でも、ちゃんと資料を読みこんだ、銀金のその後も書いてみたいなあ…とも思っんです。こつちこそ多分需要はないと思いますが。いつか、書きたいですね…。時間と資料とお金があれば…。なんて話をしてると今すぐにも書きたくなってくるのですが。今から書いても寿命が足りませんか…（遠い目）

あれ、もしかして、本文よりも長くなっちゃってしまいました…かね？

最近切に思うのは、文字を書いているだけで食欲と睡眠欲が満たされればなあ、と思います。

拍手のお返事は活動報告でさせていただいております。

次の更新は…はやめに、
します！重くないシーンなので書きやすい
ですし。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8712n/>

戦国御伽草紙

2012年1月4日13時26分発行